

---

# そして少女は紫衣を纏ふ

鑄金ダラ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

そして少女は紫衣を纏ふ

### 【コード】

N9306D

### 【作者名】

鍔金ダラ

### 【あらすじ】

「こんばんは」部活を終えた北沢楓の前に現れた黒衣の少年はそう言った。高校二年の冬、知らされた『真実』を引き金に全てが鮮美に崩壊していく。自身の境遇に絶望しつつも、復讐を身に強く刻み付けた少女の結末は。哀れな少女をめぐる、救われない長編ファンタジー。

そして少女は紫衣を纏ふ

そして少女は紫衣を纏ふ

序 T o f e e l t h e s e n s e o f i n c o m p a t i b i l i t y .

b i l i t y . ( 違和感を覚えて )  
T o f e e l t h e s e n s e o f i n c o m p a t i b i l i t y .

ネオンが月光を覆い隠す河川敷。

混じり気のない白猫が堤防の上に丸くなっている。

猫は大きく欠伸して、やがて一点にその双眸を向けた。

「『世界』は貴方を知らないんだ」

その双眸の先に、若い男が倒れていた。高級そうな布地で仕立て上げられたらしいスーツはボロボロで、鮮血に彩られている。全身に刀傷を刻み付けられた男は、血溜まりの中を浮かんでいた。

勿論、この男は助からない。絶命まであと数分といったところだ。

「『世界』は貴方の存在を知らないんだよ。だから始末する。簡単に言うとな、そう言うこと」

そんな状況下、夜より黒い黒衣を纏った少年は男を見下ろし、告げる。まるで息の根を止めるように、最期の最期で絶望を与えるように。

「うん、分かるよ。死にたくないってことは分かってる」

掠れる男の呼吸。

閉じられていく両の瞼。

「でもね、残念なことに貴方は『世界』に記されてないし、生き残るために必要な切符を持っていないんだ」

少年は手に握る刀の切っ先を男の首元に当て、

「それだけで充分。オレが貴方を殺す理由はそれだけで充分なんだ」

少年は、嘆息。

「さようなら。良い夢を」

優しく最後通牒を突き付けて、少年は男の首を刎ねた。

序 T o f e e l t h e s e n s e o f i n c o m p a t i b i l i t y

こんばんは。完結までちょっと長いですが最後までお付き合い頂けると作者冥利に尽きます。なお、毎日の更新を目標にしていますので  
ど  
ぞ  
よ  
ろ  
し  
く  
ま  
さ  
し  
ま  
す

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第一譚 催眠術の教科書

「んぎゃ」

ゴンッ！と。

まるで岩で殴られたような衝撃を受けて、思わず北沢楓キタザワカエテは顔を上げた。

「おはよう。北沢」

教科書を持ちながら、古典教師が胡散臭い笑みを浮かべている。「良い夢見れたか？」

周囲からはクスクスと嫌な感じの含み笑いが聞こえてきた。

これはつまり。

(……夢?)

周囲を見渡す。

席は窓側最後列。

窓からは眩しい夕焼けがかった日光が容赦なく照らし、隣は含み笑いに悶えている黒城和美コクジョウウカスミ。そして和美と楓の間の通路には、古典教師が呆れ顔に苦笑いを足して二で割ったような表情を浮かべていて、一つ前の席には神田裕太カントウユウタが必死に笑いを堪えているらしく、小刻みに身体を震わしていた。

楓はそんな彼らの反応を一時的に無視して、正面の黒板を見遣る。白子ヨークで割合大きめの『源氏物語』に続くような形で、文法事項や人物相関図が簡単に書かれていた。ちなみに古典教師の解説している様子は楓の記憶にはなかった。

(……………うん)

明らかに日常、学校である。

(夢、か)

間違っても、人間の10倍はあろう巨大化したモルモットの大軍

勢が人間社会を蹂躪、王冠を被った三毛のモルモットが鳥みたいな足で自分を踏み付けて高笑いしている　　というエキセントリックでアクロバティック兼ファンタジックな世界ではないようである。  
(あんな夢、……疲れてるのかな)

割と真剣に楓は悩む。

「顔、洗ってくるか？」

「　　いえ、いいです」

「寝るんだったら帰ってから寝ろ」

古典教師はそう吐き捨て、教壇へと戻っていく。

「(アంతアの授業がツマンナイのが悪い)」

黒板の上部に取り付けられている時計を見れば、三時四五分を差していた。

(眠い……)

何だか、得体の知れない催眠術にかけられた気分だった。

眠い、強烈に眠くて、

(　　気持ち、悪い)

教壇で古典教師が何やら解説を始めたが、聞く気になれなかった。誰だっけ自分がモルモットに蹂躪されるような夢を見て夢見がいいわけがないだろうが、原因はそれだけではないような気もする。

(それにしても、変な夢だったな……)

あんな世界は絶対に御免被る。危うく動物園のふれ合いコーナーで幼い頃培った可憐なイメージが音を立てて崩れてしまうところだった。

「ね、なかなか可愛かったよ？　楓の寝顔」

こそこそと声がした方へと視線を向ければ、変態じみた笑みに手を添えて和美は笑っていた。

そんな和美に構わず、彼女の発言に若干動揺しつつも前を見ると、古典教師は板書を始めるらしい。教科書片手に左手で白チヨークを握ったところだった。左利きは天才が多いという話を聞いたことがあるのだが、果たして本当だろうか。

「イビキかいちゃって〜、かわいい〜」

「うるさいな……」

と言いつつ、内心不安になってきた。

同性ならまだしも、異性に寝顔を見られるとか、イビキを聞かれるとか、それはあまり良い気分はしない。そんなわけで、

「そんなにイビキ酷かった？」

「大丈夫。少し鼻息が荒かったぐらいでウチと神田にしか多分聞かれてないから」

古典の授業が進行する中、こっそりと和美は笑う。

「……良いんだか悪いんだか」

「楓？」

「ん〜ん。何でもない」

意図せず、小さな溜め息が漏れる。どうにも古典に集中できそうにない。やる気が起きないというか、非常に気怠い。

（寝過ぎかも。というか何分寝ていたんだろ？）

思い出せない。

始業のチャイムと日直の号令で挨拶をして、それから古典の教科書とノートを開いたところまでは覚えているのだが、そこから先の記憶が曖昧だった。つまり教科書とノートを開いた瞬間に睡魔にやられたとでも言うのだろうか。

（忍たまの友ですか？）

投げ遣りな感想を抱きながら時計を見ると、もう数分でチャイムが鳴る。

そんな終わりの時間帯に気付いて焦っているのか古典教師が急いで黑板に纏めようと物凄いスピードで板書して始めた。

（まあ、ノートは和美に見せてもらおう）

窓を見れば、夕焼け色に染まり掛かっている空。

今日は比較的良好い夕焼けが見えそうである。

絵を描く、ということは楽しい。  
何もないところから何かを生み出すと言うことは、楽しい。快感にも似た気持ちになれる。

別に将来の夢が画家というわけでもない。  
楽しいから描く。

ただの趣味だったし、ようは絵が描ければ満足なのだ。  
それに何より、生きていた証拠になれる。

絵は後世に残るのだ。人の心と、上手くいけば歴史に。  
勿論、一介の高校生でしかない楓のへボ絵が後世に残る可能性は限りなく低いだろうが、それでもだ。

後世に自分が存在した絶対的な証拠を残す。  
はつきり言って、北沢楓は目立たない存在だ。

美人でもないし、男ウケが良いタイプでもない。十人並みの容姿。  
もしかしたらそれ以下かも知れない。

告白なんて受けたこともないし、自分から告白したこともない。  
しようと思わなかったわけでもないけれど。何よりこの手のお話は何も焦るべき問題ではないと思っていたし、とりあえず街をふらつく女子高生っぽく（無論、楓も現役である）スカートは折り込んであるものの、男が興味を示してくれるようなスタイルでもないから長くても短くても代わり映えないような気がする。

唯一、伸ばしている髪だけは特別入れ込んでるので毎日プライドを持って手入れしているが、化粧は特別なことがない限りしないし、最先端のファッションやブランド、周囲が騒いでいるようなアイドルグループには興味はない。

勉強にも情熱を持って取り組んでいないから成績は中の下。運動もどちらかと言えば苦手にカテゴライズされる。

部活は幽霊部員だらけの美術部。楓一人という事態だって珍しく

ない。どちらかと言えば、楓以外の部員がいることの方がイレギュラーかもしれないが、楓自身もあまり他人と交友関係を築くことは得意ではなかったから、好都合とも言えるし、創作に没頭できるから好都合だった。

そんなわけで、クラスで仲の良い友人は数えるほどしかいない。誰も特段目立たない楓に誰も意識的に近付こうとはしないし、楓も意識的にクラスに融け込もうと努めていないから当然の結果と言えは当然の結果だ。仮に、もし楓が殺人でも犯して警察に捕まったとしよう。女子高生が人殺し。ワイドショーの格好のネタになる。レポーターが級友たちに楓の印象を聞いたならば『目立たない静かなで良い子。だから人を殺すなんて信じられない』とでも、皆を揃えて言うだろうか。

家は何の変哲もない中流家庭で一人っ子。

穏和な父は大企業の下請け企業に勤める営業マン。礼節に厳しい母は専業主婦で忙しい父に代わって、楓が通っている学校まで徒歩十五分の距離にある家を守っている。家庭環境は穏和。父と母との関係も、娘の立場から見ると限り上手いっているようだ。

楓はキャンパスと窓から見える夕焼けが眩しい風景を前にして、自分の絵描きセットから赤のチューブを取り、パレットに赤の絵の具を押し伸ばす。

キャンパスには、この美術室から見える何でもない夕焼けと何の変哲もない住宅街の風景が薄く描かれている。中央に陣取っている夕焼け以外は既に着色を終了しており、残すは夕焼けのみ。もうこの絵も完成に近かった。

時より美術部顧問（絵を描いたことがあるのかすら怪しい）がコンクールに出さないかと誘ってくるが、全て楓は断っていた。賞に応募して栄光を掴む気などさらさらないし、それ以前にコンテストで栄冠を掴めるような才能と技術は持ち合わせていない。第一、人に評価されるために絵を描いているわけではないのだ。

「……さてと」

楓が通っている高校の美術室は、第三校舎という淋しい校舎にある。

通常教室と職員室がある第一校舎、図書室や音楽室など『比較的利用率が高い』特別教室がある第二校舎、そして美術室や物置など『比較的利用率が低い施設』がひっそりと配置されているのが第三校舎である。

ちなみに、この学校の生徒は滅多な用事がない限り、第三校舎に立ち寄ることはない。

主な原因として上げられる理由は、この学校のいわゆる『七不思議』という言い伝えがこの校舎に集中している（七不思議の内、五つが第三校舎に割り当てられている）ことにある。そのため、第三校舎は別名『オバケ屋敷』と呼ばれているくらいだった。

パレットに横たわる赤の絵の具を絵筆でパレットの申し分ない程度に広げる。

少しみつともない気がするが、誰も見ていないと言うことで絵筆を口に咥え、空いた手で薄い黄色を引つ張り出し、今し方広げた赤絵の具に触れないように黄色をパレットに出す。それから口元から絵筆を取り、パレットに黄色を伸ばす。

（さて、と……）

伸ばしながら、どうやってこの夕焼けに着色しようか考える。

平凡に赤と黄色を混ぜ、隠し味に少量の白を加えて夕焼けを表現しようと思っても、完成図を頭の中で広げれば納得がいかなかった。

頭に浮かんだ完成図は単なる小学生でも描けそうな『風景』になっ  
てしまっている。深みが足りない、とても言うのだろうか。納得で  
きない。

「ん、……」

楓の唯一の友人と呼べる存在・黒城和美に『女として決定的に無頓着。もっと男を捜すとかブランドやファッションに興味を持つべきだ』と言われる楓（興味がない物は所詮興味を持ってないのである）であるが、ここだけは譲れないポイントである。

「あ……」

筆をクルクル回してアイディアを捻り出す。  
もう残すのは夕焼けのみ。

住宅街や街路樹は既に着色は済んでいる。

後は空を含む夕焼けを着色すれば完成。

完成は近いのだが、

「……、」

近いの、だが、

「無理」

筆を放り投げた。

キャンパスの向こうにある風景と同色の色がどうしても創り出せないような気がする。

色彩のみで考えれば、赤に黄色を混ぜ、隠し味に白をほんの少量加えれば良い感じになりそうだが、どうしても上手くいかない気がする。絵が軽くなってしまいそうだ。

「やめやめ」

勢い良く楓は立ち上がり、そのままパレットを流し台へと持って行く。

折角ここまで描き上げられたのに、一瞬の気の迷いで絵が潰れてしまうのはあまりに勿体ない。

最近ではデッサンは疎か、住宅街や街路樹など細かいポイントの着色も上手くいった、未完成だけでも今のところ気に入っている絵なのだ。なのに、いい加減な気持ちで色を塗って失敗しました、というオチでは泣いても泣ききれない。出してしまった絵の具は無駄になってしまって勿体ないけれど、こればかりは仕様がな。

若干の罪悪感に苛まれながら、楓はゴシゴシとパレットを洗った。

第一譚 催眠術の教科書（後書き）

信じていた。幻想だとも知らずに、そして知ろうと思わなかったからこそ。例えそれが薄皮一枚の幻想であろうとなかろうと、紛れもない真実だと信じていた。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第二譚 究極の幻想

「楓？ かえ〜で〜」

ふと、黒城和美の声と同時に身体が揺さ振られた。

何事かと楓は顔を上げれば、

「おはよう」

「……え？」

「もう六校時終わったけど？」

「……終わったって？」

「授業が終わったってこと。掃除して帰るだけ」

「マジ？」

「マジ」

意識が徐々に覚醒していく。

教室には数人しか残っていなかった。既に他の人たちは割り当てられた掃除場所に行ってしまったらしい。呻り声と共に縮こまった身体を伸ばしながら一つ大あくび。

「めんどくさ」

そして少女は紫衣を纏ふ

夕暮れ時の繁華街。

楓にとって、生まれ育ったこの街は面白みのない街だった。

充分とは言えないこともあるけれど、施設や店舗は本当に充実しているし恵まれた街だとは思う。大型ショッピングセンターやデパートなどが当たり前のように軒を連ねていて、欲しい物は生活必需

品に限らず大抵手に入れることが出来る。便利な街であることは確かだ。第一、生まれ育った街なのだ。愛着がないわけではない。けれど何か絶対的に足りなかった。まるでそれはジグソーパズルのワンピースが欠けているような、何とも言えない小さな小さな消化不良のような。何かこの街に居てはいけないような気がするのだ。

そんな街を北沢楓、黒城和美の両名は他愛もない世間話を展開させながら歩いていた。

「もうクリスマスか」。楓はクリスマスどうするの？」

「あと一ヶ月も先でしょ？」

「もう戦いは始まってんの。今年こそは誰か捕まえなきゃ」

意気込む和美に対し、

「その気になればすぐ捕まえられるくせに」

楓にとつて割と本気の発言をする。

黒城和美と北沢楓。

たまにこの二人に神田裕太が加わる時があるものの、おおむね二人は連んで行動することが多い。

何故そうなったかと言えば、クラス替えでまだクラスの顔と名前が一致しないような時期に『たまたま』席が近くなったから。平たく説明すればそんな感じになる。

しかし、よく考えてみればそんな偶然がなければ和美と仲良くなる理由なんてない。

人懐っこく文武両道で、常に明るく責任感のある黒城和美。

彼女のような人物は男女に拘わらず人受けがいいから、彼女の回りには必然的にクラスメイトたちが集まってくる。二学期も終盤に差し掛かっていた今となつては、クラスでも誰からも頼られる中心的な存在であることは疑いもなく、クラスの象徴とも言えるリーダー的ポジションにいる。

対して楓は和美と全く逆を行く存在だった。

勉強も運動も人並み以下、その上社交的な性格ではないから今だクラスに溶け込めていないのは自他共に認める事実。クラスの象徴

的で優秀な和美とどうでもいい楓がどうして連んでいるのか不思議だ、と言うのが大方クラスメイトからの評価だろう。何故そう判断できるのか、そう問われれば雰囲気を感じれば誰だって分かる、そう答えたい。

「楓？」

「あ、何でもない」

「楓ってさ、時々ボーツとしてるよね」

「そうかな？」

「危なっかしかったよ、さっきオヤジにぶつかりそうだったし。間一髪オヤジが避けてくれたおかげで大丈夫だったけど……」

「ふーん」

「って興味ない？」

「だってぶつからなかったんですよ。だったらーじゃん」

「そう言うの成り行き主義って言うんじゃない？」

「何それ？」

「流され人生ってこと！」

「何か、違くない？」

いつもとあまり変わらない、中身の薄い話がクルクルと回転していく。

「って、そう。流され人生なんてどうでもいいんだって。そんなことよりクリスマス！」

いつの間にか話が脱線していた。どこから狂ったのだろうか。

「楓は何か予定でもあるの？」

「ない。和美は？」

「ない」

嫌味ですか？

思わずドス黒い感情が口から飛び出るところだったが、直前で何とか楓は飲み込んだ。

「和美こそこの前、ナントカって先輩にコクられたって話聞いたけど？」

「ああアしね。めんどくさかったから『考えさせてね』ってやんわりとふつといた」

「へ〜」

そんな話には興味なんてありません、と言わんばかりにサラッと軽く流すけれど、もし自分だったら、そう何となく楓は考えてしま

う。  
(とりあえず、付き合っちゃうおっかな)

が。

そこまで考えて何だか妙に虚しくなってきたから、思考を放棄して強引に自己完結させた。ありえない、と。

「ね、ちよつと楓。あんた反応がドライ過ぎなんですけど。冷たかない?」

「冷たくない」

「人でなし〜」

ヤケクソっぽく喚く和美だが、あたかも当然の如く楓はスルーする。

「大体さ、恋愛系の話し相手に私を選ぶのおかしいって」

「え〜?」

ロクに恋愛したがことない人間に恋愛を聞くのはお門違いも甚だしいと楓は思う。この手の話題ならクラスでも大半の人間が得意分野にしていたりするのだ。

「もつと優秀な人材引っ張ってきなさい」

そう楓は吐き捨てた。

確かに青春らしい青春を謳歌した記憶なんてろくにないし、非常に勿体ない人生かも知れないと思っているのは楓だけの秘密だったりするのだが、とにかく。

「楓も優秀な人材だと思っただけけど……」

予想だにしない和美の言葉に楓は少し動揺する。

「は?」

「だって恋愛経験なら楓の方が長いじゃん」

そして少女は紫衣を纏ふ

「いや、何言ってる」

「だってさ、大変じゃん。昔からずっと同じ人想い続けるの」

「経験談ってヤツ？ 聞きたいなって」

「うん。結構初手で面白いな。って大丈夫だからね？ 楓と恋敵になる気は、……サラサラないし」

「こ、恋敵って」  
必死に否定する少女と、全く取り合おうとしない少女との何とも平和で安穩とした掛け合いが、夕暮れ時の街に響いていた。

しばらく街で和美とショッピングして、楓と和美は別れた。  
また明日、学校でね。  
そんな台詞をお互いに掛け合って、楓は帰路に就いた。

（……、はあ）  
和美の言葉が、心を乱すのだ。

確かに、何の感情も抱いていないと言えは嘘となる。けれど、それは恐らく恋なんて大層な感情ではないのだ。

これがもし『恋』なんて感情だったらあまりにも程度が低すぎるとは言え、好きか嫌いか。そう問われれば、好きに傾くかも知れない。

そんな曖昧で微妙な、感情。楓が勝手に意識しているだけで、何の生産性も見出せない不毛な感情。

(バカ)

それは果たして自分への罵倒か、相手への罵倒か。

楓にもいまいち判別が付かない。恐らくそれは自分への罵倒だろう。曖昧な、今だ線引きすらされていない小さな病巣のような感情に、時よりどうしようもなく右往左往する自分が嫌になってくる。

(バカ)

本当に、バカだ。

少し冷静になって考えてみればいい。

十人並み程度だと思われる容姿。

勉強も運動も人並み以下。

間違っても社交的ではないし、男受けするような特技も性格でもない。

仮にこの曖昧な感情が恋だとして、そんな底辺を彷徨くような人間を受け入れてくれるほど他人は優しいだろうか。優しいわけがない。優しければとっくの昔に世界はもっと円滑で平和になっているだろう。

要するに、だ。

報われるはずがない。

黒城和美のような文武両道で社交的で男受けが良い人間と違う。抱くだけ無駄な感情なら、捨ててしまった方がいい。

捨ててしまえば、無駄に右往左往することもなくなるだろうし、よっぽど自分のためになると思う。

(バカ)

そもそも、下手にあのバカが今でも気安く接するからいけないのだ。

だからこっちも対応に困ってしまう。

確かに一緒に居れば楽しい。認めよう。

けれど、笑い合えるのは昔からの付き合い、腐れ縁だからだ。

幼い頃の記憶を探っても、未だかつて脈と言うモノを感じたことはない。

楓をからかうことを生き甲斐とするような、生意気なバカ。しかし時より覗かせる真っ直ぐで迷いの無い優しさとか温かさとか、一本槍な強さとか、絶対に楓には持てないようなモノをたくさん持っていた彼はとても輝いて見えて、同じ年なのに一回りも二回りも大きく感じていた。

( 憧れかな )

そうかもしれない。

恋と憧れは似ているのかも知れない。

だからきつと、恋ではなくて憧れだ。その方がしっくり来るような気がする。

( そう、きつとそう )

ブンブンと、ここが道端であろうと構わず楓は顔を振った。

( うっ…… )

それでもこびり付いてしまった感情は振り払われることなく、

( 和美の、バカ )

八つ当たりと分かっているても、責任転嫁するしかなかった。

## 第二譚 究極の幻想（後書き）

羊はこう考えた。空っぽに意味はあるのだろうか。空っぽに夢見る資格などあるのだろうか。空っぽが抱く絶望は果たして真実なのだろうか。獅子が牙を剥くその刹那、羊は考えていた。

そして少女は紫衣を纏ふ

### 第三譚 空白を埋めよ

「進路ね……」

放課後。

バタバタと部活に急ぐクラスメイトを余所に、一枚のプリントを前に溜め息を付く。

ショートホームルームで担任から配布されたこのプリントには『進路志望調査』と銘打たれている。何でも冬期休業期間を利用して三者面談をするらしく、何でもこれはその時の資料にするらしい。

……

…、( )

未定。

そう書いて堂々と提出したら間違いなく担任と親に叩かれる。

(二年後半なのに進路が未定だつてところがおかしいってこと……?)

高校二年の十二月になると、そろそろ本格的に受験の影が忍び寄ってくる。

実際、クラスにも最近になって担任に進路の相談や、苦手教科克服に動いているクラスメイトが増えてきたように思う。どうやら彼らは国立組でいろいろ大変らしい。楓もそろそろ真剣に考えなければならぬ時期には違いないのだが、どうも気が乗らないのだ。

(人生、そんな先急いで何が楽しいんだろ?)

楓の学校での成績は中の下。上位の大学に入ろうとか、推薦を狙おうとか努力したことがなかったし、けれどあまりにサボってれば面倒な追試が襲い掛かってくるから中途半端に努力する。だから『あんな結果』は当たり前と言えれば当たり前と言えるし、この成績に今のところは不満もない。

だからといって、大学入試に向けて必死になろうとも思わない。どうせなるようにしかならない。受験勉強なんて普段からの積み重ねだし、結局普段から努力していないヤツはどんなに受験前に焦ったって良い結果は得られないと思う。付け焼き刃は付け焼き刃でしかない。そりゃ想像を絶する努力をすれば付け焼き刃でも通用するかもしれないが、楓自身そこまでして大学に入ろうとも思えない。どうせなら今の自分の実力で入れるような大学を目指して、出来ることなら受験勉強なんて経験しないで大学に入りたい。まあ、暴走しすぎた理想論である。

そんなことより、楓は危惧すべき問題を抱えていた。それは来るべき冬期休業に投下される『冬休みの課題』と、休みの大半を食い尽くす『冬期講習』だ。

どうやって捌こうか、どの手段を用いれば容易に難題を克服できるか。最近、楓はそればかりを考えていた。去年は冬期休業前半にラッシュをかけて何とか克服したが、今年は前半に冬期講習が集中しているから思うような成果を上げることが出来ないかも知れない。更にはこの間行きつけの書店で見つけた『羽は無くとも空を見る』という大手出版社が主催しているナントカ賞（名前は覚えていない）の大賞を受賞した（らしい）小説に心惹かれ、おまけに楓が好きなアーティストのニューシングルが今月末に発売される。誘惑は多いのだ。

（めんどくさ）

とりあえず無くしたらまた担任と面倒なことが起こりかねないの  
で、気が乗らないも進路について考えてみる。

まず、削除されるのは理数系大学及び理数系学部である。  
ただでさえ低い学力の中、中でも酷いのは理数系だった。テスト  
では常に赤点ギリギリの低空飛行だし、もう好き嫌いで表せるレベ  
ルではない。根本的に頭が受け付けられないのだ。

そんなわけで残ったのが文系大学である。

その中でいくつか行きたい大学がないわけでもない。ただ、冷静

になって考えてみれば国立は絶望的のように思えてきた。いくら文系と言っても多少理数が取れなければ受からない。楓は『多少』も理数が出来ないから、センター試験で惨めな討ち死を遂げるような気がする。

結局、選択肢として楓の頭の中に残ったのは私立文系大学だった。これなら何とか現実味を帯びているような気がする。国立よりは明るいだらう。

ただ、問題がある。

金だ。

国立大学に比べて、やっぱり学費等の負担は大きくなるのはほぼ間違いない。

奨学金という手がないわけでもないけれど、それには入試で優秀な成績を残さないといけなかったり、もしくは学校推薦で入学しないといけなかったりと、いろいろ壁は高く厚そうだ。

(大丈夫、かな……)

切り出すのが何となく怖い。

家庭環境を考えてみれば、いけないわけでもなさそうなのだ。

楓は一人っ子、父と母の三人家族。父は大手企業のサラリーマン(肩書きは知らない)で、そこそこ恵まれた中流階級な家庭、と言うのが楓の認識である。生まれてこの方一度も父や母から金銭問題で『悲鳴』を聞いたことはないし、督促状を見たことがないから、極々普通の一般家庭だと思う。

(話してみようかな)

一応、進路のことだから父や母は相談に乗ってくれると思う。

ちなみにこの『進路志望調査』には『保護者からの署名と印鑑』が必要だ。夜な夜な、両親が寝静まった時を狙ってタンスから印鑑を拝借するのは簡単だが、署名を誤魔化すことはなかなか難しくそうだし、そもそも筆跡の偽装はやったことがないし、やろうと思っただけのものではないような気がする。

ともかく、だ。

「このまま何の原案もなく持つていくのもおかしいような気がしたから、とりあえず行けるものなら行きたいと思っている大学の名前を第一志望の欄に書き込もうと、

「お、進路決まったのか？」

バキッ。

「シャー芯折れたぞ？」

「驚かさないでよ……」

「なんだよ、驚きすぎだつてさ」

いきなり現れた神田にムツとする。

「そりゃ驚くでしょ？ いきなり人が後ろから話しかけてくれば」  
心臓が、五月蠅い。

どうしてこんなにも落ち着かないものなのか。

急に現れた神田にすっかり動揺してしまって、楓は前に回った神田の顔をまともに見ることが出来ないでいた。仕様が無いから顔を下に落とし、進路志望調査だけに集中しようとするけれど、やっぱり集中する事なんて出来なくて。

「ね、部活は？」

自分の動揺を誤魔化したくて、楓は口を開いた。

「行くよ。ちよつと忘れ物しただけさ」

「そう」

「ねえ」

「あ？」

そして少女は紫衣を纏ふ

会話が途切れるのが無性に怖かった。

「大学、どこ行くの？」

神田は楓の机に手をかけた。プリントに視線を合わせていた楓の視界に、ぼんやりと神田の手が入る。

「まだ、決まってるないけどさ、とりあえず入れてくれるところに行くさ」

「へー」

もし、神田が真面目に答えてくれたら自分はどうしただろうか。

彼が告げた大学を進路志望調査に書くだろうか。

ガタガタと自分の机を漁っている神田を余所に、楓はそんなことをぼんやりと考えていた。

「…………。スランプなのかな」

完成までもう一息なのに、進まない。

結局、この日も絵の具を無駄にした。

(はあ)

パレットを洗ったりキャンパスを片付けたりイーゼルを畳んだり美術室に鍵をかけていたりしていたら、周囲はもう夕焼けを通り越して夕闇に染まっていた。

(月は、見えないか)

教科書などの私物が入った学生鞆を持ち直して、生徒玄関からゆつくりと楓は校門を潜って帰路に就く。

時間的には下校時間なのだが、帰ろうとする生徒の数はあまり多くなかった。みんな部活で忙しいのだろう。楓は今朝担任教師に部活動延長願らしき書類を提出していた話したことないクラスメイトをボンヤリと思い出しながら手を擦り合わせていると、野良猫だ

そして少女は紫衣を纏ふ

ろづか、目の前を可愛らしい白猫が足下に寄ってきた。

(首輪無いから、野良かな)

思わずしゃがんで首筋を撫で、

「にゃ」

ハツと楓は我に返る。

白猫は一言残して一目散に逃げていった。

(怒られた……)

手が冷たかったからかもしれない。嫌われてしまった。

しばらく猫が逃げた方向をボンヤリと眺めていると、目が醒める

ような一陣の風。寒い。

「冷えるな」

「わ」

唐突に、聞き慣れた声と肩に乗る軽い感触。

「お、なかなかいいリアクション」

ムツとする。

「部活は？」

「終わった終わった」

「ふーん」

口調は自然と冷たいものになってしまう。

「部活は？」

「終わったよ」

「あの絵、描き上がった？」

「あの絵？」

「美術室からの風景描いてんじゃねえの？」

「何で知ってるの？」

何の捻りもなく単純にそう思った。

「いやだつてさ、前に『風景画描いてる』って言ってたじゃん？」

「うそ……」

「覚えてねえの？」

「……、覚えてない」

「寝てたんじゃねえの？」

「ね、寝てないって」

「寝る子は育つ、つつーけどまだこんなだもんな」

「中学までは私が、ってちよ……」

神田は豪快に笑いながら、ワシヤワシヤと楓の頭を撫で回す。

(ちよ……)

熱い。頬が火照った。

堪らず、抵抗してみれば神田は呆気なく手を離す。

「ちよ、いきなり」

楓は乱れまくってしまつた髪を必死に手櫛で直しながら、頬の赤らみを隠そうと必死に取り繕う。けれど早鐘を打つ心臓が鬱陶しくなるほど五月蠅くて、まともに頭を動かすことだつて難しくなつてきた。

「あ？」

にっちもさつちも行かなくなつた楓を、本当に不思議そうな顔をして神田は覗き込んでくる。何だか必死になつて隠そうと藻掻いていることなんて簡単に見抜かれてしまいそんな気がする。

(う……)

何だか猛烈に逃げ出したくなつてしまつた。

ここで気の利いた一言でも言つて逃げてしまえばいいけれど、やっぱりこんな状況で気の利いた一言を思いつけるほど楓は器用でもなかつた。

「どした？」

「……、何でも、ない」

これ以上は、限界。

八方塞がり、絶体絶命。

まさにそんな言葉が合致する状態だつた。

「つと、じゃあ俺、帰るな」

「へ？」

気が付けば、神田は携帯を握っている。

「時間だよ、時間。今帰らないとドラマに間に合わねえんだよ」

神田と別れ、火照った身体を北風で冷ますと楓は校門を潜った。さっきまで心地よかった北風が段々身に染みてきた。しばらく歩いて、不意に思う。

来週からもう十二月だった。

楓はいつもと同じ道を、一路家を目指して歩いていく。家に帰ったら、まず夕食だろう。

それから適当に自室のテレビのチャンネルを回して、もし良い番組があればこの間録画しておいた二時間ドラマでも見よう。それから風呂に入って、適当に宿題を申し分ない程度に片付けて寝よう。夜更かしは良くないし、授業中寝るよりだったら布団でぐっすり寝た方が遙かに良い。

そうこう考えを頭の中で転がしながら、楓は夕闇に沈みかけている街を歩く。

前方から来た車が、ヘッドライトを輝かせた乗用車が楓を追い越した。

何気なく楓はその車を目で追うけれども、すぐに止めて前を向く。目の前には、いつもの角。

この角を曲がればもう家まで、あと数メートル。

そう、あと経った数メートルだった。

無意識に飛び出してくるかもしれない車に注意を払って、角を曲がって、前を向いて、

「じゅんばんは」

そこには。

一〇メートルくらい、先に。

古ぼけた街灯をスポットライトのようにして。  
闇に溶けてしまうような黒い外套に身を包んだ少年の姿が在った。

そして少女は紫衣を纏ふ

### 第三譚 空白を埋めよ（後書き）

時計は時を刻む。しかし壊されたら時は刻めない。壊された時計の下、こつして壊れた舞台の幕が開いた。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第四譚 壊れた時計に鋭い刃

「は？」

風が吹き抜け、前を止めていない少年の夜より黒い外套が風に靡く。

まるで時間が止まったかのような静寂が楓を包み、身体を硬直していく。

「オレ、『追捕使』の大野繁信」

風にユラユラと揺れる外套の中に少年は黒い革手袋をした左手をゆっくりと腰元へと持つて行く。

「北沢、楓……さん、だよね？」

その声色は子供のよう。だが本来そこにあるはずである特定の感情はなかった。

少年は左手で漆黒の外套を払う。

露わになった腰元の左、そこには漆黒の日本刀が差してあった。

「当然で本当にごめん」

左手を軽く鯉口に添え、ゆっくりと少年は刀の柄を握った。

「けどさ、『世界』は貴女を知らない」

この瞬間、全てが止まっていた。

恐怖する余裕もない。

声を出す力もない。

事態を飲み込む術もない。

時間も、世界も、人も、感情も、思考も。

何もかもが止まっていた。

「オレとしては殺したくないんだけどさ」

実にゆったりとした、思わず見惚れてしまうような優雅な動きで鞘から刀身を走らせ、銀色の刀身を曝す。

そして少女は紫衣を纏ふ

そして少女は紫衣を纏ふ

「キミに恨みはないけど死んで貰う、なんてね」  
抜き払われた刀身が、街灯の光を反射した。  
瞬間。

楓は理解した。

殺される。

あれは人殺しの道具。

脳裏に自分の肉が引き裂かれる映像が過ぎる。

びちゃびちゃと飛び散る血。

ねちゃねちゃした自分の肉。

そして。

息絶えてアスファルトに横たわる自分自身

「さようなら。良い夢を」

感情が大きく暴れた。

(あ、あああ……)

暴れた感情に恐怖が合い重なって、分かった。

これ以上この少年を近づければ自身の生存に関わる、取り返しの付かない絶望的で壊滅的な『事態』に陥ってしまう、と。

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」

それは確かに子供のような声色。しかし同時に底冷えのするような特定の感情が載らない機械的で事務的な声色でもあった。

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」

トン。

漆黒のロングコートを揺らして少年は一步、また一步。楓に歩み寄る。

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」  
トン。

揺れるロングコートを抑えることもなく、

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」  
トン。

切っ先をアスファルトに引き摺るように、

そして少女は紫衣を纏ふ

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」  
トン。

助けを呼べ。もしくは逃げる。  
断続的な警鐘が鳴り響く。  
危険だと分かっていた。

本能的な警告も作用している。  
だが。

警告も命令も意志も何もかもが拒絶される。  
動かない自分自身。

身体と心が分離しているような、妙な感覚が楓をドロドロと犯して  
ていく。

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」  
トン。

凍てつく視線を楓に向けて、

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」  
トン。

黒い少年は迷うことなく確実に一步を刻んでいく。

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」  
トン。

世界は、この瞬間確かに止まっていた。

動いているのは、この日本刀の少年と、楓の生存本能。  
全てが止まっている。

それ少年と楓以外、何もかも。

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」  
トン。

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」  
トン。

怖い。

少年が放つ貫禄に、恐怖に、向寒な表情に、縫いつけられたように  
身体は動いてくれない。

そして少女は紫衣を纏ふ

「あ、あ……」

絶叫したかった。

いつそ叫んでしまえば人が来る。人が来れば自分は助かるかも知れない。

この黒尽くめの通り魔から救ってくれるかもしれない。

いや、何もしないよりは遙かにマシ。

けれども声は出ず。

首を僅かに振って、拒絶の意志を、助命を請うことしか叶わない。

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」

トン。

死にたくない。

嫌、嫌だ。

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」

トン。

身体は一向に言うことを聞かない。

まるで脳と筋肉を繋ぐ神経が潰されてしまったように。

分離してしまったような妙な感覚。

絶対的、圧倒的な恐怖と絶望の中で全てが壊れた。

手も足も、身体の動かし方も、呼吸の仕方も、声の出し方も。

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」

トン。

身体力が抜けた。

地面にへたり込む。

けれど本来伝わってくるはずのアスファルト独特の凍えるような

冷たさがない。

それどころか自分が座っているという感覚すらない。

そもそも本当に『へたり込んだ』のか、そこすらよく分からない。

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」

トン。

ただ単純に純粹に、恐怖と嫌悪が蝕んでいく。

そして少女は紫衣を纏ふ

トン。  
怖い。怖い。怖い。死にたくない。  
トン。  
嫌だ。ダメ、恐い。恐い。嫌、私を取らないで。  
トン。  
死ぬ。イヤ。死ぬ、死、死……。

「貴女はこの『世界』に存在してはならない」

トン。

瞬間、何とも言えない、変な何かが急激に飛び散った。

「  
ッ！」  
ああああああああああああああああああああ  
爆発、炸裂。粉々。

そして少女は紫衣を纏ふ

吹き飛んだ。

舞った。踊った、消えた。

何が吹き飛んだか分からない？

吹き飛ぶって何のこと？

眼前が、壊れる。

コワレル、こわれる？

壊れる　　って何？

燃えた、痛めた、鬱した？

何が壊れたのか分からない。

貴女、誰。

この、何の歌？

海？

船？

走馬灯？

殺し合い、刀に両手に鎌……。

ぶつかり合う。

カグヤヒメ、願え。

波止場、……こんびなーと。

鎌、刃。

コウサ。

アイシテル？

ひとでな　　。

オヒメサマ。

手に感触、　　感触って？

面白い、絶望に嘲笑が円を描いた……。

それを、振るう。

貴方、誰？

煙突？

何、それって何？

分からない。

解らない。  
判ら

「あ、？」

それは唐突だった。

激情と混乱が一手に消え失せ、同時、楓は状況全てを理解するに至った。

自分、アスファルトで舗装された地面に座り込んでいる。涙で頬が濡れて冷たい。

眼前一メートルほど先。

刀を握る漆黒の少年が愕然としていた。

理由、理由なんて分からなかった。

「……？」

手、にある、妙な、触感。

正体、異物の正体、それは

「鎌？」

西洋の童話で死に神が携えているような、楓の身長よりも大きい漆黒の大鎌だった。

楓は手の中にある異物を呆然と見つめる。

鎌、巨大な黒い鎌。

教会や神殿のレリーフのような豪華絢爛な装飾が柄から刃まで流れるように施されているこの鎌は、今この瞬間初めて見、触ったというのに何十年も愛用した絵筆を握っているような、不気味なくら

そして少女は紫衣を纏ふ

いシツクリと自分の手に馴染んだ。

(なに、これ?)

世界にたった一人、取り残されたように、時間が止っていた。

(でも)

分かる。

(これは)

そう。

(殺す……)

人を、

(殺す)

道具。

(なら)

この少年は、

(刀、 持ってる)

つまり、

(私を)

殺す気。

(つまり)

私は、

「あああああああああああああああああああああああ  
ッ

自分のこの身を守れねばならない。

そして少女は紫衣を纏ふ

がむしやらに振り上げる。  
軽い。

「ああああああああ　　ッ！」  
振り下ろす。

ズガンと、手に来る感触。

アスファルトが砕け散った。

「ああああああ　　ッ！」  
避けられた。

薙ぐ。

黒い影を追って、薙ぎ払う。

ギシャツと、痺れるような感覚、街灯を斬り捨てた。

「ああああああああ　　ッ！」  
追う。

華麗な跳躍を見せる漆黒を追うが、掠りもしない。

顔を上げる。

影を探して、

見失った。

刹那、後頭部に衝撃が走り、視界がグニヤリと歪んだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

妙な、夢を見ていた気がする。

(……星だ)

目を開いて、真つ先に抱いた感想は、そんな呑気な物だった。

(……………星?)

ようやく楓は『自分が仰向けに倒れている』という状況を理解し、驚いて飛び起きた。

「いたっ」

ズキンッと。

立ち眩みのような気持ち悪さと共に、一瞬だけブラックアウトする。

「大丈夫？」

その平淡な声に楓は凍り付く。

止まっていたと感じた実際の時間に換算するとほんの一瞬、一呼吸置く暇もないほどの刹那だろうが、それは永遠のように感じられた。

「あ、」

嘘だ、と思った。

嘘だと信じたかった。

「いや、」

そこには、黒尽くめの少年が縁石に座っていた。

風に靡いて漆黒の外套が揺れ、そこから腰に差してある刀が楓の目に飛び込んでくる。

「来ないで」

何で、自分は声を出しているのだろうか。

声を出す意志なんてないのに。

「立てる？」

明確な拒絶を露わにする楓に対し、少年は立ち上がった。

「ッ」

殺される。

そして少女は紫衣を纏ふ

素直に、何の疑いもなく、そう思った。

(いや)

絶対的な恐怖に犯され、本能的に何か武器になるような物を手探りで探す。が、手には冷たいアスファルトの感触だけが返ってくる。小石一つ見つからない。

(あ、)

思い出した。

大鎌。

あの漆黒の鎌は、アレは立派な人殺しの道具。とにかく、アレさえあれば助かる。

必死に楓はあの時確かに振り回していた大鎌を手探りで探し

「あ、」

漏れた、声。

「ああ……」

少年が、楓を見下ろすように立っている。

「いや……」

鎌を探すことはもう楓の頭の中にはない。

楓の思考は逃避一色に染まり、身体は反抗するように動いてくれない。

逃げようとも、逃げられない。

「いや、こ、こない、で……」

弱々しく、呟くことしかできない。

元から、それしかできなかったのかもしれない、そんな無茶苦茶な意志に犯されながら、楓は必死になって爪の指をアスファルトに食い込ませ、少年から離れようと懸命に藻掻く。

が。

無情にも少年は左手を鯉口に添え、楓と目線を合わせるようにしやがみ込むと。

そして少女は紫衣を纏ふ

「深呼吸だよ」

少年は断言した。

「深呼吸してさ、とりあえず落ち着こうよ」

脅えるだけで精一杯の楓に、断る余裕なんて一切無い。

言つとおりにすれば、もしかしたら命だけは助けてくれるかもしれない。そんな淡い期待を抱きながら、楓は素直に少年の指示に従った。

「吸って」

「すー」

「吐いて」

「はー」

「吸って」

「すー」

「吐いて」

「はー」

「吸って」

「すー」

「吐いて」

「はー」

「どう？ 少しは落ち着いた？」

落ち着きを取り戻したのか未だ混乱しているのだろうか。

自分の感情すら分からぬまま、気が付けば頷いている自分がいた。

#### 第四譚 壊れた時計に鋭い刃（後書き）

羊の心臓が始まったとき、全てが始まる。栄枯盛衰、全てが始まり、やがて全てが終わる。だがそれすらも否定しようというのか。否定された後に何が残るというのか。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第五譚 私は神の落とし子

「脅かして、ゴメンナサイ」

意外にも、少年は素直に謝罪の言葉を口にした。

「教えて上げるよ」

「……へ？」

「やっぱりオレが見惚れただけあるよ」

少年は笑みを浮かべ、

「じゃあ教えて上げるね。オレの事とか楓ちゃんの事とか、あと世界の事とか」

へたり込む楓に向かって、少年は呟く。

改めて見ると、少年は十代前半ぐらい。楓よりも身長は低そうで、黒髪に黒のロングコートにフィットした革製の黒いジャケットにズボンという、闇を纏ったような少年だった。

「お芝居に台本があるように、この世界にも台本があるんだ」

何を言っているのだろうか。

楓は戸惑う。もしかしたら新手の詐欺か新興宗教の勧誘かも知れない。

だが、そんな少年の言葉に耳を貸そうとしている自分がいるのもまた確かな事実だった。

「『アカシックレコード』って知ってる？」

楓は首を振る。

何語なんだろうか。

「簡単に言えば、宇宙や人類とかの過去・現在・未来に起こる現象とか誕生から滅亡までの歴史を全て記載したデータバンクってところかな。誰がいつどこで生まれて、いつどこで死ぬのかって言う感じだね、そんなデータが全て予め記載されてる膨大なデータバンク。」

そして少女は紫衣を纏ふ

オレのお師匠様は『森羅万象という芝居がどう進行し、どうやって終わるか』って脚本<sup>シナリオ</sup>って言ってたけど。分かる？」

楓は首を振った。

「オレのお師匠様に言わせれば、この世はアカシックレコードに刻まれているシナリオ通りに動いていて、そのシナリオに沿って劇<sup>ものごと</sup>が繰り広げられている。だからそこに出てくる人間とかその他の生物とかはみんな役者さんってわけ。織田信長が本能寺で殺されたのも、豊臣秀吉が太閤になったのも、徳川家康が幕府を開いたのも、実は全て前々から決まっていたことなんだ。それこそ気が遠くなるような遠い遠い昔から、アカシックレコードが誕生した瞬間にね」

少年はすっかり思考が停止してしまっている楓を無視して続けた。「だから、アカシックレコードを読み解けば楓ちゃんのお友達が何時結婚して何時死ぬか、なんてことも分かるわけ。その人の未来に何が起るかと言うシナリオは決まっている。アカシックレコードは絶対だからね。みんな自分の道は自分で選んでるつもりだろうけど、知らず知らずに『彼ら』はアカシックレコード通りに行動してるだけなんだよね。分かった？」

「 預言？」

「アカシックレコードが？」

頷いた楓に少年は口を開く。

「まあそんな捉え方もあるね。ま、アカシックレコードが先だから正確には預言じゃないけどね」

つまり。

楓は必死に頭を整理する。

森羅万象、全てはアカシックレコードという名の全てを網羅した記録<sup>きやくぼん</sup>通りに動いている。

それこそ、地球上に存在する生物全ての一生を記録されていて、例えば道端に咲くタンポポが何時、何処で、誰によって摘み取られるか、或いは種子を飛ばしてタンポポ一団体としての生命を全うするのか、それすら記録されていてその『絶対に外れることがない完

壁な預言』に、勿論人類もそれにそって行動させられている、と言うこと。

あまりに突拍子もない。  
出来ないファンタジーアニメのようだった。

目の前の少年が放つ言葉は常軌を佚した『異常』だ。新興宗教の勧誘の類であれば、教祖様が妄想した教本せいしょに書かれている一節でも抜粋して楓に語ったのだろう。

楓は、そう理解した。

そう理解しようと努めた。

が。

が。

普通の神経をしていれば到底受け入れられる物ではない。受け入れる気にもなれない。教祖様が信者からお布施と称して金を巻き上げるために構築した事実無根の妄想なのだろう。楓はそう思う。

しかし、気が付いたら楓はその『異常』を何の抵抗もなく受け止めていた。むしろ『異常だな』と思う自分自身を『異常だ』と思っ  
てしまうくらいに。不自然に、何か不可抗力な何かが楓に作用しているように。すんなりと身体に溶け込んで、脳内で消化されつつある。

「分かったみたいだから続けるね」

まるで楓の思考を読み切ったかの如く、少年は続けた。

「そんな完全無欠のアカシックレコードにも時より綻びが出てくるんだ」

少年は静かに楓を指さして、にこやかに告げた。

「北沢楓、という存在はアカシックレコードに記載されていない。

オレらはアカシックレコードに無いのに存在しているヤツのことを『異常因子』って呼んでる。『異常因子』は処分しなきゃいけないんだよね。存在自体がアカシックレコードにとって有害だから」  
「は？」

絶句の前に、疑問が湧き出た。

もしこれが勧誘の手口なのだろうか。

私の手に掛ければガンが治りますから一度教団本部にいらして下さい。

目を付けた人間を不安にさせる、そんな有り触れた手口の一環なんだろうか。

だが。

「例えばさ」

少年を睨み付ける楓に少年は言ってみせた。

「完全無欠のアカシックレコードに記載されていない『北沢楓』が、記載されている『人間A』と知り合つたとする。だけどさ『北沢楓』を知らないアカシックレコードが『人間A』と知り合う　なんてシナリオはないんだよ。だってだって『北沢楓』なんてアカシックレコードは知らないもん。アカシックレコードには無い『北沢楓』が、アカシックレコードにある『人間A』と知り合うなんて、冷静に考えてみれば有り得ないと思わない？」

つまり、と。

少年は啞然とする楓に構うことなく、

「『北沢楓』という『異常因子』が『人間A』に接触してしまつたことにより『人間A』は事前に書かれたシナリオとは異なる行動をしてしまうわけなんだよ。けれどそうなつてしまえばアカシックレコードが困るわけ。そんなことが通用しちゃつたらアカシックレコードは完全無欠じゃない。ドラマに台本のない人が出てきたら物語は狂つちゃうでしょ？ それといつしよなんだよね。それに極端な話、もし普通の科学者でしかない『人間A』が、アカシックレコードにはない『北沢楓』の一言からヒントを得てノーベル賞とつたら大変なことになつちゃうよ。その人の予定運命は大きく狂っちゃう」

「だから、私を、殺すの？」

「うん。本来ならばね」

「本来ならば？」

「うん。それが仕事だからね」

躊躇無く、少年は言い切った。

「オレは楓ちゃんみたいな『異常因子』を取り払うことだけが存在意義の『追捕使』なんだ。だからアカシックレコードって脚本シナリオに記載されていない登場人物きたざわかえでは、悪意があるうと無かるうと必ずアカシックレコードに害なんだよ。楓ちゃんは害虫を殺すでしょ？ 蚊がうるさければ蚊取り線香焚いて殺すでしょ？ いらぬ物は捨てればいい。邪魔な者は殺せばいい。だから処分するんだよ。アカシックレコードを守るためにね」

馬鹿げている。

実際誰が聞いたところで馬鹿げていると言っただろう。

だから、何だか自分自身が馬鹿みたいに思えてきた。

そんなくだらないことで動揺させられていたなんて、本当に愚かだ。

「新興宗教の勧誘ってことは充分にね」

「へ？」

湧いてきた自信に従って、

「残念だけど、信者になる気はないから」

「うん。別に信者にならなくていいよ」

予想もしない返答に楓は少し戸惑った。

「オレはね、別に新興宗教の勧誘に来たんじゃない。今言ったことは全部真実だよ」

「みんなそう言うから」

「じゃあね、信じて欲しいから証拠出すよ」

サラッと告げた少年は指を差した。

楓はその指の先を見遣ると、

「……あ」

切断され、無惨に横たわっている街灯と、アスファルトに開いた鋭い穴。

フラッシュバック、フラッシュバック、フラッシュバック。

妙な鎌を持っていた自分。

そして少女は紫衣を纏ふ

鎌を振っていた自分。

鎌でアスファルトに穴を開けた自分。

鎌で街灯を両断した自分。

「さっき楓ちゃんが振り回していた大鎌ね、あれ『紫衣』って言うんだ」

瞬間。

少年の言葉、楓の記憶、全てが合致した。

楓は悟った。

新興宗教の勧誘なんかじゃない。

アレは妙な夢なんかじゃなく、現実だと言うことを。

少年が語ったことは全て紛れもない真実だと言うことを。

同時。

破局、を見た気がした。

「……シエ？」

声が震える。

「『紫衣』ね。さっき楓ちゃんが出して振り回していた大鎌のことさ。でね、話が少し戻るけどもし『異常因子』の中で『紫衣』を纏える者が現れたら特例で殺さなくていいことになってるんだ。生き残る切符ってわけ。だけどそれは『紫衣』を纏える『異常因子』本人が、オレみたいに『異常因子』を駆るためだけに生きる『追捕使』になることを承認すれば、の話だけだね」

身体の中に『異常因子』という言葉が溶け込んだ。

楓の中で、自分が自分ではなくなっていた。

今まで当たり前だと思っていた『自分』が『世界』が『常識』が。漆黒の少年によって遠慮一切無しに塗り替えられていく。

「もう一度言うよ。楓ちゃんは特例なんだよ。生き残れるチャンスがある。生き残っていい。死ななくてもいい。だって楓ちゃんは『紫衣』を纏えるから。楓ちゃんは生き残るために必要な切符を持っている」

機械的な口調だった。

そして少女は紫衣を纏ふ

感情移入されていない。ただ『伝えること』だけに特化した口ぶりで少年は告げる。

「一日ね、月並みだけど一日待ってあげる。一日でオレに殺されるか、生き残る道を選択するか決めてね。明日のこの時間、返事を聞かせて」

## 第五譚 私は神の落とし子（後書き）

悲劇は人を引き付ける。真っ直ぐで純情なヒーロー。美しく儂いヒロイン。全てが人を引き付け、魅了して止まない。だが、それはあくまで絵本の中のお話。リアルは、決して人を魅了しない。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第六譚 悲劇のヒロイン

「ただいま……」

玄関で靴を脱ぎながら、ゾツとした。  
今の声は何だ。

自分は果たしてこんなに貧弱な声だっただろうか。

こんなに弱った声を出す人間だっただろうか。

「おかえりなさい。お父さんは？」

「……さあ」

フラフラと覚束ない足取りでリビングに入る。と、母・佳子が台所で夕食の支度をしていた。今日は肉料理らしい。

北沢家は何の変哲もない中流家庭だった。

穏和なサラリーマンである父に礼節に厳しい専業主婦の母。家は楓が通っている高校学校まで徒歩十五分程度の距離にあり、一般的な二階建て住宅。家庭内には（娘としての見解であるのだが）特に目立った問題らしい問題はなく、父と母との関係も上手くいっているようだ。

「どうしたの？ 顔色悪いけど？」

真剣な顔をした母の顔が視界に映る。

「何でもない……」

取り繕うことも余裕もなかった。蚊の泣くような声で答えると階段を上がる。

「ちょっと、もうご飯よ？ 着替えるんだっいたらさっさとしてよね」  
怒ったような母の声が聞こえたけれど構うことなく階段を登っていく。リビングや洗面所、客間など共同スペースである一階に対して、二階は楓の部屋と両親の寝室、物置部屋となってしまった父の書斎など、個人個人のスペースになっている。

そして少女は紫衣を纏ふ

楓はのたのたと自室に入ると、ドアを閉めた。それから適当に鞆を放り投げ、制服のままベッドに倒れ込む。ベッドから、顔に跳ね返ってくる柔らかい感触。

だが、どこか感触がおかしい。触覚が狂ってしまっているのだからか。

安堵感はなく、何だか不安が煽られている気さえする。

(……アカシック、レコードだっけ)

森羅万象、全て記されたアカシックレコード。

(何で、信じてるんだろ……)

楓は、信じていた。

つい数分前の出来事だ。しかも内容は突拍子もない。意味不明だ。しかし。

楓は、信じていた。

自分でもおかしいと思う。有り得ないと思う。

しかし。

太陽が東から昇って西に沈む。

自分の中には血液が流れている。

パソコンは電気がなければ動かない。

そんな当たり前の事実と、アカシックレコードなる物は楓の中で肩を並べていた。

あの少年の口ぶりが脳裏に甦る。

(宇宙や人類とか、何もかも記してあるデータバンク　　だっけ、か……)

誰が何時何処で生まれ、そして何をして死に、どう生まれ変わるか。

森羅万象という演劇がどう進行し、どうやって滅亡するか記されている世界の脚本。シナリオそんな物が存在しているらしい。

そして。

(私は、シナリオから、)

欠落している。

(だから……)

処分されなければならない。殺さなければならない。

欠落している『異常因子』きたざわかえては例外なくアカシクレコードに悪影響を及ぼす厄災なのだから。

思考が、それ以上動いてくれなかった。

フラッシュバックする恐怖、そして絶望。

夢で、あつて欲しかった。

夢ならば、何れ醒める。醒めてくれる。

またいつも通り、アカシクレコードとか『異常因子』だとか。

そんな無情で非情な事実は夢だったと笑い散らせる。

寧ろ、そうなることを望んでいた。

否、望まずにはいられなかった。

(何で、私が……)

一階から母の呼ぶ声が聞こえる。

そう。

この母の声だって夢であつて欲しい。

気が付いたら授業中で、目の前には古典の教師がいて、友人たち

からは嘲笑されても構わないから。

モルモットが自分を踏みつぶして高笑いしている、そんな世界で

あつてもいいから。

再度、母の声。

(夢で、……お願い、神様)

それが、その思考、行動全てが現実逃避だと分かっている。

(今までやった悪いことか全部謝るから)

北沢楓は願い、祈り続けた。

例え、その祈りも願いも懺悔が意味のない行為だとしても。

北沢楓は願い、祈る。

母の声が、一際大きくなった。

翌日。

楓はすっかり寝坊した。

母親に叩き起こされ、時計を見たときには既に始業時間まで三〇分を切っていた。

いくら楓の家から学校まで走って一五分程度だとしても、これはキツイ。十五分で身だしなみを整え、朝食を食べて学校に向かわなければならぬのだ。楓は鈍足だ。運動会という運動会は全て四位とか五位というブービー賞的なポジションしか取ったことしかない。更には食後に走ると横腹が痛むので謀らずともスピードは落ちる。状況は限りなく悪い。

楓は大慌てで制服に着替え、階段を下り、顔を洗い、必死になって髪を解かし、寝癖を隠すために見苦しくない程度に結い上げ、滑り込むようにテーブルに着き、朝食を流し込み、玄関を駆け抜けた。玄関を出ると、携帯を見る。

時間は、始業時間までは残り一七分程度。

なかなかハードな展開だったがとりあえず学校までは『それ相応のスピードで歩いて』一五分程度なのだ。余裕が出てきたが、通路の途中に厄介な交差点と信号が待っている。

急いでも損はない。

長年（と言っても一年と一ヶ月だけでも）の勤が働いて、いつもより歩くペースを上げた。

（一時間目は……、確か現国だったっけ）

現国ならば、宿題はない。

とりあえず、現国の教師にどうこう言われる可能性は限りなく低い。

そんなことを思いながら楓は、

角を曲がったその瞬間。

闇。

少年。

縁石。

日本刀。

大鎌。

恐怖。

絶望。

アカシックレコード。

そして少女は紫衣を纏ふ

(ツ！)

フラッシュバックした。

壊され、無惨に横倒しになっている街灯を目の当たりにして、頭を打ち抜かれた。

そうだった。

そうだったのだ。

夢では、なかった。

思い出した。

(いや、だ)

嫌味なほど眩しくて爽快な日光が楓を照らす。

そして、感じ、思い出した。

『一日。月並みだけど一日待つてあげる。明日のこの時間、返事を聞かせてね』

少年の言葉。

そして、今日、この日、ほんの数十時間後に全てを決めなければならぬ。

一日。

アカシックレコードという永久不変のシナリオ。しかしアカシックレコードには北沢楓という存在は記載されていない。だから処分しなければならぬ。そして『紫衣』と呼ばれる大鎌を出す能力。最後に少年と同様の存在『追捕使』になること、つまり『駆られる』対象から『駆る』対象へにならないか、拒否すれば殺す、という爆弾のような誘い。

脳裏を昨日の光景が余すことなく強引に駆け抜けていく。

それを、あと数時間の内に『北沢楓』という『異常因子』の運命を決めなければならぬ。

もし『異常因子』が『紫衣』を纏えるなら特例が認められる、と確かに漆黒の少年は言った。

しかしそれは『紫衣』を纏える『異常因子』が、あの少年のような『異常因子』を駆逐する『追捕使』になることを承認すれば命は助かる、と。

脳裏で、反響し、全身へと染み渡る。

生きる資格がある。

それは天使の救いなのか、悪魔の囁きなのか。

一日。猶予は一日ある。このまま処分されるか、それとも生き残るか。

決断するには、一日という時間は余りに短すぎる。

教室に入ると、いつも通りの光景だった。

結局、葛藤していた時間が思ったよりも登校スケジュールに大きく影響して、学校まで全力で走らざるを得なかった。結果的には始業時間には間に合ったものの、ダメだ。疲れた。授業を居眠りなしに受けられるほど楓に体力はない。もう少し身体を鍛えた方が良くかも知れない。もしくは小さい頃から運動部に所属しておけば良かったと、自身の人生を少し悔やみつつも窓側最後列の自分の席へと座る。

(はあ……)

少し周囲を見渡すと、世間話が、笑い声が飛び交っている。教室は呑気な物だった。

いや、これがいつも通りなのだ。

違うのは楓であり、たまたま今日楓が『呑気』でないだけ。

(これも、シナリオ通りなのかな)

アカシックレコード。

彼らが交わす言葉、足先から髪の毛一本の動きに至まで、全て予定通りに進んでいるのだろうか。

(完璧な脚本、か)

完璧な脚本。

アカシックレコード下

アカシックレコードは時に狂いが生じる。

生じた狂いは、アカシックレコードに記されていない『モノ』の出現となって世界に影響を及ぼし始める。その『モノ』は『異常因子』と呼ばれ、『追捕使』によって情け容赦なく粛正されていくのだが、もし『異常因子』の中で『紫衣』を纏えれば話は別。特例と

して『追捕使』になることを条件に肅正を免れられる。

(……私には)

恐怖と絶望の中で、突如として握っていた漆黒の大鎌。

(その資格がある……)

あの漆黒の少年は、北沢楓にそう告げた。

果たして、こんな自分に生きる資格などあるのか。

「やめた」

自分にすら届くか届かないくらいの小さな声で、呟き、溜め息を付く。

実は、簡単な問いなのだ。

生き残りたかったら、少年の誘いに乗ればいい。

死にたかったら、少年の誘いを断ればいい。

たったそれだけ、その二択だけだ。

(私は、……)

死にたくない。

死ぬなんて真つ平だ。

せつかく『特例』が認められるのならば、使わない手はない。

「ウツース」

ハツとして顔を上げると、神田裕太がゆったりと座っていた。

ムツとした。

こちらは生きるか死ぬかの決断を迫られているのに、何故この男はここまで気安く話しかけてくるのだろうか。それが身勝手な感情だと重々承知しているが、怒らずにはいられなかった。

「眠そうじゃない？ どーせエロゲーでもやってたんでしょ？」

昨日の仕返しも込めて、楓は嫌みたらしく吐き捨てた。

けれどそんな楓を尻目に神田は大あくびをして、

「この俺様がエロゲーなんてするわけねえだろ？ 本気を出せば、

女なんて簡単に落ちるんだよ、姫」

身も蓋もない、そう思っただけだ。

楓はそのまま苛立ちに身を任せて、割と本気で神田の背中に一発

そして少女は紫衣を纏ふ

見舞う。勿論、ゲーで。

「変態」

「ばーか」

特に痛がる素振りも見せず、楓に背中を向けたまま神田は言う。

「ばか」

予鈴が鳴った。

それは恰も、楓を嘲笑うかのように平然と鳴り響いた。

## 第六譚 悲劇のヒロイン（後書き）

タクトが振るわれ、そして歌手は歌った。答えるように、はたまた抗うように。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第七譚 指揮者は歌手に絶望を命じる

「え……？」

オバケ屋敷も呼ばれる第三校舎の一角に美術室ある。

楓は、その美術室の前で愕然とした。

「……なんで、ここにいるの？」

居る筈なんてないのに、恰も当たり前ですと言わんばかりに、そこにいた。

「何でって」

美術室の入り口で固まっている楓に対して、

「顧問だもの」

聞き覚えのある綺麗な女の声だった。

「顧問は部活に來ちゃイケナイの？」

女は美術部顧問兼社会科教師・尾藤蘭<sup>ビトウラン</sup>。

彼女は右手に握る白チョークで黒板にでかかど『歴史は繰り返される！』と描きながら、特に楓の方をみるわけでもなくふて腐れたように言った。ちなみに『歴史は繰り返される！』は明朝体のようなデザインである。

「明日は大嵐ですね」

そして少女は紫衣を纏ふ

「うん」

尾藤は校内随一の放任主義者だった。

授業も適当。性格は良く言つと度量が広く、悪く言えばいい加減で、教師のクセにびっくりするほど生徒に肩入れしない。生徒がやりたいと言えば何でもかんでも自由にやらせる。究極の放任主義といつても良いかも知れない。ちなみに彼女が担任である二年四組は今年の文化祭で茶店（とは言つのは立前で実質キャバクラ）を計画し、それが校長に露見してクラス共々怒鳴られたりしている。何ともまあ、前代未聞、前人未踏な感じである。

そんな尾藤蘭が美術部に顔を出す、ということとはほとんど無い。だから美術部は莫大な幽霊部員を抱えているのだ。まあ、楓にとつては集中できる絶好の環境というわけで結果オーライというヤツであるのだが。

「心境の変化でもあつたんですか？」

楓はイーゼルを立てると、例の絵を載せる。

「いや〜。元気にしてるかな〜って思つて」

尾藤は『歴史は繰り返される！』をちょこちょこ修正しながら、

「北沢。それで今度のコンクールに出してみない？」

「は？」

ふと、数ヶ月前の光景が甦つてきた。

「センセ。嫌だつて言つたでしょ？」

「そうねえ」

尾藤が進めたコンクールはそれなりに名の通つたコンクールだった。

けれども、コンクールに絵を出そうとは思わなかった。

そもそもコンテストなんかで獲られる名誉には何の価値を見出せないのだ。

楓はただ自己満足のために絵を描いているのだ。

デッサンが上手くいった。

建物の着色が綺麗に出来た。

そして少女は紫衣を纏ふ

納得のいく構図を実際にキャンパスに映し出せた。  
全て、自分のため。  
酷く利己的なのだ。

だから、

「出しませんよ。審査員に見せる絵は私には無理です」

審査員を動かす絵なんて描けない、書く気が起きない。

せっかく今まで自分のためだけに描いてきた絵なのに、そんな急に人受けする人に絵なんて描けるわけがない。

「私には、そこまでの技術も感性もありませんから」

数ヶ月前も、楓は同じ台詞で断った。

個人的には尾藤が断ったのもう一度同じ誘いをしてくれたのは嬉しかった。

滅多なことで特定の生徒に肩入れしない尾藤が誘ってくれる、ということとはちよつとした優越感に浸れたし、何より他人に自分の絵が『人に見せるに値する』と評価されたことが嬉しかった。

「センサーはそうは思わないかな」

「え？」

「人の不安とか悲しみとか、あんたはそーゆーのよく分かるでしょ？ 大体人が何を思ってるか、とかさ。その観察眼と表現できる感受性は天性の物だとセンサーは思うけれどね」

「センサー、買い被り過ぎ」

「そう？ だって北沢、センサーにちゃんと『心境の変化でもあったんですか？』って声かけてくれたじゃない。それが良い証拠だと思っただけ。他の先生とか友達に『察しが良いね』とか『気が利くね』って良く言われるでしょ？」

「ないね。どうせ誰も私のことなんて見てないって」

「そう？」

「すみません」

豪快な笑みを見せて、

「何で謝るのよ？ 元々はセンサーが仕掛けたんだしね。」

さ

とと」

満足な出来になったのか、チヨークを投げ捨てて、  
「じゃ、戸締まりヨロシクね。日直から怒られるのセンサーなんだから」

そのまま呑気な声と、黒板に美しく、力強く纏められた『歴史は繰り返される！』をそのままに、結局何がしたかったのか分からないまま美術室から出て行った。

(多分、暇だったからかな)

まあ、いい。

とにかく、今からは完成間近の絵に集中しよう。

そう思いながら、楓は描きかけの絵の前に立った。

夜が迫る。

「こんばんは」

家まで、あと数メートルの地点。

家に至たる最後の曲がり角。

曲がったところに、昨日のこの時間と同じ光景。

「改めて。オレは『追捕使』大野繁信。楓ちゃんみたいなアカシックレコードに記されていない『異常因子』を処分してアカシックレコードを守る者」

黒髪、黒のロングコートにフィットした革製の黒いジャケットにズボン。

闇に溶けてしまいそうな漆黒の少年はそこに佇んでいた。

「丁度一日経った。オレのように『追捕使』になるか、それとも処分されるか」

眼前の少年は構えを崩さずに、

そして少女は紫衣を纏ふ

「選んで？」

感情のない、言い回し。

強烈なプレッシャーが楓を包み込んで、逃れようとしても逃がさない。

彼の要求通りに、楓が今ここで『「追捕使」になる』そう言えば殺されることないだろう。

なのに、楓は死の恐怖で震えた。

自分の一言が生死を分けると言うことくらいは分かっている。

逆に、自分の一言で絶対的な安全を得ることだって可能、その方法も完璧とは言えないけれど、理解している。

だが、怖い。

怖い。

怖いのだ。

手段も、言うべきことも分かっている。

けれど、何処か絶対的な恐怖が付きまとう。

「わかった」

楓は自分の身体を抱き締め、出来る限りの虚勢を張って必死に言葉を紡ぎ出す。

「やる」

一陣の風が吹き抜け、カサカサという葉音の後、静寂。

「ホント？ 後悔しない？」

「……断れば、斬るでしょ？ 死にたくないし。やればいいんですよ？」

少年は楓の問いを愚問だと言わんばかりに流し、

「ホントに？」

「死ぬよりは、マシ。死んじゃったらそこで何もかもオシマイでしょ？」

「誓って」

と、楓は気付いた。

少年の様子がおかしい。明らかに出逢ったときと違う。

「これから、何が起こつても絶対に後悔しないって」

声が少し震えている。声の裏に歡喜が見え隠れしていた。少し、楓はその反応に疑問を抱いた。

これは、ただの『歡喜』ではない。何か、どこか歡喜以上の何かが入入している。

「いいよね？」

「うん」

警戒は依然解かない。自分の声が少し低くなる。

少年の一挙一動が、凄く怖い。何だか開けてはならない箱を開けてしまったような、感覚。

「選んだコト、後悔しないでね」

スポットライトのように、古ぼけた街灯が楓と少年を照らす。

「これからはね、全部が『当たり前』だからね。常識を捨て、全てを受け入れて。これから起こる、全てをさ。有り得ないこと全てを受け入れて、強くなつて。いい？」

楓は臆しながらも、頷く。

少年は『頷いた』楓を見据えて、

「これから、ヨロシクね」

にこやかに告げ、少年は消えた。

この後、楓は数十秒の思考時間を要してようやく『少年が脚力のみで飛び去った』という事象を認識した。

第七譚 指揮者は歌手に絶望を命じる（後書き）

意志は揺らぐ。揺らいで、揺らいで、そして碎ける。碎け散った意志を握り締め、少女は叫んだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第八譚 やがて、少女は

とりあえず、あの『追捕使』の少年に殺されることはなくなった、らしい。

（は、）

思ったよりもずっと気を張り詰めていたらしい。

楓はスカートが汚れることに構わず、アスファルトの上に座り込んだ。腰が抜けた。

（こわかった）

ボンヤリと思う。

怖かった。

本当に、怖かった。

和美に無理矢理載せられた絶叫マシンの恐怖とも、母親や教師に叱られたときの恐怖とも根本的に違う。緊迫感に押し潰されそうだった。全く生きた心地がしない。

「はーはー」

とにかく、少年に『追捕使』になると告げてしまった。

けれど、拷問のようなあの恐怖の中で自身の死を選べる人はいないだろう。絶対に生きる道を選択する。それこそ自殺志願者でもない限り、よほどぶっ飛んだ人でもない限り、生存本能というヤツが働いて生きる道を選択するだろう。例えそれが利己的な感情だとしても。他でもない自分の命がかかっているのだから。

「よし」

一度、家に帰ろう。

何はともあれ死の危険は回避できた。

それにあの少年から『追捕使』について詳しく聞いていないし、何より『紫衣』の正体を知りたい。やらなければならぬことだら

けだ。こんなところに座り込んでいる場合ではない。

「……帰ろう。とりあえず、帰ろう」

繰り返し、頭に刷り込むように呟く。

やることは決まった。

やることがある。

スカートの埃を一通り叩き終わると早足で歩き出した。

目指す自宅はもう目と鼻の先。

あの少年が居た地点から三〇秒も歩けば自宅が見えてきた。

簡単な門を潜り、見慣れた敷石の上を歩いて、それから学生鞆の中から鍵を取り出し、鍵穴に突っ込む。北沢家の鍵は少し独特だ。

鍵穴に鍵が上手く入らないのだ。これは年季物で錆びているせいで、そろそろ両親に新しい鍵の設置を提案した方が良くも知れない。

何より最近世の中物騒だ。殺人事件は毎日のように起こっているし、近所で空き巣もあった。このボロ鍵では心許ない。

「ただいま」

昨日よりは、断然声が出た。不安が払拭されたからだろうか。

ちょっととした自己満足に浸りながら、楓は玄関先で靴を脱ぎ、

(ん?)

妙な臭いがする。

嗅いだこともない奇妙な臭いであるそれはリビングから漂ってくる。

「お母さん?」

多分、母が魚でも焦がしたのだろう。リビングからその妙な臭いがするのはリビングとキッチンが隣接しているからだろうから、特に不審な点はない。

楓はそのままリビングに繋がる廊下を躊躇いもなく直進して、リビングを覗

「あ、お帰りなさい」

息が詰まった。

学生靴の感触が手から消え、そして何かが落ちた音が聞こえた。リビングの中央には、出張していた父のおみやげであるトルコ絨毯が敷かれている。

「え？」

そのトルコ絨毯が、血に染まっていた。

血溜まりの上には、何か、俯せになって横たわっている。楓は何故だか声を抑えていた。場を支配している何とも言えない絶対的な「何か」が、声を出させるのを押さえつけているのかも知れない。

俯せになっている「何か」 否、俯せになっている「誰か」はもう死んでいるだろう。これだけの出血をされていて助かるはずもない。医学的な知識はなくとも、本能で分かる。

それにしても、血の量が凄い。

人間の体内にはこんなに沢山の血液が流れていたのか。

楓は呆然とそんなことを思っていた。

視線を上げてみる。

リビング全体に、血が飛び散っていた。

家族団欒の舞台であるテーブル。

その上にある新聞、テレビやエアコンのリモコンと籠に入った蜜柑。

つい最近までチャンネル権は父が握っていた今時古いブラウン管テレビ。

設定温度は高めだったエアコン。

そして少女は紫衣を纏ふ

クラシックが趣味である父が設置した高級コンポにモーターとバッハの全集が置かれている棚。

幼い頃に楓が欲しいと強請って強引に買って貰った黒いソファ。

全てに、血。

血、血、血。

真っ赤っか。

その赤、中心部に、その『誰か』が横たわっている。

楓は、考えた。

そこに転がっている『誰か』は一体全体誰なのか、と。

「お、か、あさん……?」

何故、どうしてこの場面で母親を呼ぶのだろうか楓には理解できない。

けれど、楓は母を呼んでいた。

見慣れた背格好に髪型。

半分は真っ赤に染まっているけれども、母が好きだった服とそのコーデイネート。

それは。

母親の、佳子、によく似ている。

「う、そ……」

楓は、一步下がっていた。

「あ、あ……うあ」

違う。

そして少女は紫衣を纏ふ

似ているのではなくて、

「い……うあ」

本人だ。

そう確信した刹那。

グツと、腹の底から押し寄せてくる。

気持ち悪い、吐きそうだ。

「ぐ、ふ」

口元を押さえる。

気持ち悪い。

この死体は母親なのに。母親をも気持ち悪いとってしまったのか。

学校に登校するあの時、笑っていたあの母親が今

「う、ゲツ！」

瞬間、楓は身体を折り曲げた。

瞬間的に口の中に酸味が広がり、胃袋の中身を全て吐き出した。

楓は嘔吐した。

汚い音が連続し、床に自分が吐き出した物でありにも拘わらず

『気色悪い』吐瀉物が広がっていく。

「大丈夫？」

少年は血に染まった刀をそのままに、

「水でも持つてこようか？」

淡々と告げる。

握り締められている血塗られた刀が、誰が楓の母親を殺めたのか、  
という疑問を適切且つ合理的に解決させていく。

なのに。

なのに、少年は言った。

「オレが斬ったんだよ。それなりに腕に覚えがあるからきつと苦痛  
は感じなかったと思うけどね」

何が、起こったのだろうか。

状況の、把握が、出来ない。

死んでいるのは、母親。

そして少女は紫衣を纏ふ

殺したのは、あの『追捕使』の少年。

それだけ、把握しているのに、まだ何も解らない。

「大丈夫。オレは『あの世』なんて信じてないけど多分寂しい思いはしないと思うよ。」

刀の切っ先から血が床に滴り落ちていく。

「大峰勝夫」

母方の祖父の名前。

「大峰吉乃」

母方の祖母の名前。

「大峰恵子」

母の妹、叔母の名前。

「北沢翔太郎」

父方の祖父の名前。

「北沢花子」

父方の祖母の名前。

「北沢悠」

父の弟、叔父の名前。

「北沢香苗」

叔父の伯母。

「北沢誠哉」

叔父の長男、従兄弟。

「ざつと今『記憶しているのは』このくらいかな。とりあえず役所から戸籍の類を拝借してね、血の繋がった人間は邪魔だから楓ちゃんに声かけたあとに皆殺しにしてきたんだ。あ、何で殺さなきゃならなかったか、と言うとね、いろいろこれから『追捕使』になるためにレッスンしなきゃいけないからでさ、家族がいるという

いろやりにくいんだよね。だってさ、楓ちゃんがいきなり鎌とか出したらお母さんたちびっくりしちゃうでしょ？ だから殺しちゃった方が合理的だったことくらい分かるでしょ？」

世界が、止まる。

「ちなみにね、お父さんはまだ生きてるよ。この家に『入った』ときにお母さんがお父さんと電話していたから、今日は会議だからちよっと遅くなるみたいだし。本当は一緒に斬って、楓ちゃんに殺しの現場を見て貰いたくなかったんだけどこればかりは仕方ないよね」  
愕然を通り越し、何も考えられない。  
これが無の境地だと、冷静な猛一人の自分が言っつて、  
刹那。

ハジケル。

そして少女は紫衣を纏ふ

口元を拭う。  
手に吐瀉物の一部だろうか、気色悪いモノが少し付着したけれど、  
気にしない。  
手は、後で洗えばいい。  
楓は、冷静だった。  
母親が殺されたというのに、初めて大鎌を手にしたときよりも、  
心が落ち着いているし、不思議と妙な緊張もなかった。  
「ふん。恐怖じゃなくて哀しみね……」  
楓の眼前で、少年は血に染まった刀を正面に構える。

「対し、楓も大鎌を構えた。

軽い。

大きさの割には軽い。軽すぎる。自分の身長より少し高いのに、まるで発泡スチロールの棒を握っているよう。そんな在り来りな感想を楓は抱く。

両者は、楓の母の亡骸を挟み、対峙する。

「今日はゆっくりして欲しかったんだけど、予習も悪くないよね」  
平然と、言う。

冷酷に、淡々と。

「オレは楓ちゃんのお父さんが帰って来たらお父さんを斬る。楓ちゃんはお父さんを守りたいんでしょ？ 楓ちゃんの勝利条件は二つだよ。お父さんが帰ってくる前にオレを殺すか、帰ってきたお父さんをオレから守るか、そのどちらか」

カチャツ、と刀身が鳴った。

少年は刀を返す。

「さ。早いとこ白黒つけちゃおうか？」

刹那、楓は大鎌を振るい

「楓ちゃん。フライング」

刀を使わず、少年は片腕で受け止めた。

湾曲した刃が直接少年の手の甲に触れているのに、一ミリも肌に食い込んでいない。

呆気にとられる楓に、少年は意にせず平然と言った。

「レスンススタート」

第八譚 やがて、少女は（後書き）

そう。全てが私を追い詰めて壊すのよ。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第九譚 神を殺せ、世界を奪え

ドサ。

持ち上げていた土嚢を落としたような、それはそれは呆気ない音だった。

そんな音を、楓は、荒れ放題のリビングの片隅で仰向けになって聞いていた。

否、聞かされていた。

もう、死臭が鼻につくこともない。

屍となって転がっている母親に気分を害することもない。

楓は、手を伸ばす。

身体が激痛に悲鳴を上げた。

けれど構わず、楓は懸命に手を伸ばして。

トルコ絨毯からはみ出して、フローリングの床にまで広がっていた血に触れる。

パリツと。

血溜まりが、割れた。

血液の凝固時間は約一五分程度。そんなことを聞いたことがある。

(お、かあ……さ )

楓は負けた。

武器のリーチとか、関係無しに楓は負けた。

楓が繰り出した一手は、悉く読まれ、躲され、素手で受け止められ。終始弄ばれ、そして父が帰宅した瞬間にご丁寧に峰打ち。

「気分はどう？」

少年がリビングに入ってきた。

そしておもむろに懐から紙を取り出すと、鮮血が滴る刀身を取り出した紙で拭う。

そして少女は紫衣を纏ふ

「これで予習は完了だね」

血糊が払われて、すっかり銀の輝きを取り戻した刀を鞘に収め、少年は黒のソファアーに座った。

本来、そこは母が座るポジションだった。

その証拠に、母が愛用していたクッションがある。

屈辱的だった。

「そろそろ『業者さん』来るから」

「業者、さん？」

「死体処理専門の業者さん。裏社会のね。昔は切り刻んで海にでも捨てちゃえば良かったし、斬り捨て御免って便利な制度があったから苦労はしなかったんだけど、今はそうもいなくてさ。警察も科  
学捜査って凄い技術使うようになって優秀になってきたし、以前みたいな『曖昧な誤魔化し』は今じゃもう通用しなくて。現代はとっ  
ても生きにくいんだよ」

「捨て、るの？」

楓は、主語を言えなかった。

「さあね。全て向こうに任せてるからさ」

あまりの平淡さに、楓は憤怒する。

動かない身体で、睨むしかない状況にも拘わらず、必死に。

「殺す」

無意識に、こぼれ落ちた。

「殺す、あんただけは、絶対に」

身体は動かない。

けれど、ここで何も言わなかったらこの人殺しに屈したことにな  
ってしまう。それだけは絶対に嫌だった。

だから、戦う。

例えそれが無様な悪あがきに過ぎなかったとしても、戦う。

身体が動かなければ口がある。

それを、使えばいい。

「殺して、やる」

「遅かれ早かれ、機会はあるよ」

意外な一言に、楓は目を丸くする。

「それにはちゃんと一人前の『追捕使』になって、人を殺す術を身につけてからでも遅くないと思うよ。今さっき戦ってみて解ったと思うけど、実力差がありすぎるでしょ？ そんな程度の力しか持っていないときに戦ったら犬死にも良いところ。でしょ？」

「……、」

「楓ちゃんの復讐のために協力してあげる」

復讐される側である少年は謳うように告げる。

「復讐に必要なのは人を殺す術。教えてあげるよ、これからオレが泊まり込みでね」

声色は変わらない。

それが自身の命を脅かす『復讐者』きたみわかえでという存在に力を付けさせる、明らかに自身の生命を危険に曝す行為なのに、それでも少年の声色は淡々としていた。

「大丈夫だよ」

声色は変わらずとも、看護師が喘息で入院している幼女を励ますような、そんな雰囲気で、

「楓ちゃんなら、できるよ」

楓の家族が皆殺しになって、二日。

少年と父と母の亡骸を処理しに来た業者の偽装工作によって、いつの間にか『実は借金苦で楓を一人置いて蒸発した』ことになっていた。

ちなみに『実は借金苦だった』という行も蒸発したことを印象づけるための方便だったのだが、楓が両親の部屋を整理し始めたその

瞬間に方便ではなくなった。

父の書齋を整理していると大手消費者金融からヤミ金業者らしい会社まで、何十枚もの督促状が出てきたのだ。嘘から出た誠とでも言うべきだろうか。

楓はシヨックだった。

何の問題もなく、極々普通の一般家庭だと思っていたのに、テレビドラマの世界だけだった借金が現実に自分の両親を蝕んでいた。そして呑気なことに楓はそのことを知らなかった。上辺だけ綺麗に塗り固められた『家庭』で楓は笑っていたのだ。何も知らず、呑気に。一緒に笑ってくれた両親は、全部虚構の『平穩』の元に成り立っていたなんて。物証に真実を宣告されて、しばらく楓が動けなかった。

だけど、結果としてこの事実は『真実』をよりいつそう霞ませることになった。

前もって警察の目を誤魔化すために少年や業者が仕掛けていた数々のミスリードに、嬉しい誤算である莫大な借金。『楓の通報を受けた』警察はこの一家集団失踪を『借金苦による蒸発』と判断した。

楓は、勿論両親が残した借金が不安だった。

督促状の送り主を見る限りヤミ金と思われる業者もあるようだったが、当然取り立てもあるだろう。稼ぎ手が『蒸発』したとは言え、それほど世間は甘くない。どうやって金を作るのか、その旨を告げると少年は「取り立てに来るのはどうせ暴力団関係者だろうか」から手回しをしておく。だから心配しなくていい」とのことだったが、心配は消えてくれなかった。

「お疲れ様。遺品整理ご苦労様だね」

あの出来事から、二日経った。

少年はソファに腰まで埋め、他人事のように呟いた。

「コーヒーでよければ煎れておいたから」

「ありがとう」

意外に気が利く、そう思いながら楓は椅子に座ってコーヒーカッ

プに手を伸ばした。

「……、」

味は、インスタントだった。

(これからは買ひ物も全て自分でこなさなきゃいけない)

インスタントコーヒーの味を噛み締めながら、楓は漠然と思った。

(でも、何とかなる、か。料理なら何とかなるし)

一時期、楓は料理に凝っていた時期があった。

それは確か小学六年生くらいの夏休みで、料理に夢中になったきっかけは母の包丁捌きに憧れたから、だったような気がする。でも小六という多感な時期だったのが仇となったのか、夏休みが終わるとすぐ飽きてしまって何もかもうやむやになってしまった。尤もその小六の夏休みで料理の腕は格段に上がり、高校受験の時には勝手に有り合わせの残り物で夜食を作っていたから食事に関してあまり危機感はない。

(何とか、なる)

コーヒーを飲みながら、楓は自分自身に言い聞かせ、そして何気なく壁に掛かっているカレンダーに視線を流した。

( 二日、か )

二日。

両親が殺されてから、もう二日経った。

楓は学校を二日間とも休んでいた。

既に『蒸発した』ことを把握していたらしい担任は、ひとまず今後のことを考えるのを止めて今はゆっくり休みなさい、とそう告げて、欠席を咎めようとはしなかった。有り難い限りである。

「それにしてもさ、つままないな」

「……は？」

少年が煎れたコーヒーを口元から離して、楓は少年を見る。

「仮にも、オレは家族を皆殺しにしたんだよ？ 折角武器があるんだから寝込みを襲ってきてもいいのに」

少年は、リビングの壁に立てかけてある漆黒の大鎌を一瞥する。

「寝ているときが一番無防備なんだよ？」

「それもそうだけど」

楓はコーヒークップをテーブルの上に置いて、

「今は、まだしない」

毅然と、告げた。

「確かに、殺したい。出来るモノなら今すぐにでもね。だけどアンタが言ったようにまだアンタを殺せない。私の、父親を守れなかったように、今の私じゃまだお前には届かない。きつと『寝込みを襲う』ってハンデもらってもダメ。ちゃんと自分のチカラを使いこなせるようになったら、そんな時は改めて殺すから。心配しないで」

「やっぱり、お師匠様にそっくり。ふふふ。オレは楓ちゃんのこと好きになっちゃったよ」

「冗談。これでも腸が煮え繰り返ってるんだから」

楓は残りのコーヒを一気に飲み干して、椅子から立ち上がる。

「どこ行くの？」

「まだ、いろいろ片付けがあるの」

「頑張ってるね」

冷淡な少年に見送られ、楓は廊下に出、階段を駆け上がる。殺したい。

少年に対して、圧倒的な憎悪が楓の心の真ん中で渦巻いていた。だけど、今それを開放しても良いことはないのだ。

実力の差があり過ぎる。

前回、あの少年に歯向かった際、能力があつたのに、冷静で居られたつもりだったのに、それでも父親は死んだ。守れなかった。戦闘中は良いように弄ばれて、結果的には何も出来ずに少年に一刀の元に（峰打ちだったけれど）斬り捨てられた。

楓には絶対的に力が足りない。

今歯向かったところで、振り返ちに遭うのは必至だ。それにこの差は一朝一夕でどうこうなるようなモノではない。長い時間を掛けて、じっくり自らを鍛えなければ埋まらない、そんな絶望的な差が

そして少女は紫衣を纏ふ

楓と少年の間にはある。

だからこそ、埋める。

埋める手段がある。

少年から技術を学ぶ。その技術をフルに活用し、両親や家族の敵討ちをすればいい。一見遠回りの道のりかも知れないけれど、冷静に考えるとそれが確実にベストな選択肢だと楓は思う。

(待つ)

階段を駆け上がって、楓は心に刻む。

絶対に殺す。

両親や家族の仇は絶対に討つ。

心の中で絶叫し、楓は両親の寝室に駆け込んだ。

駆け込んで。

駆け込んで。

駆け、込んで。

少年に二つ置かれていた父のベッド、母のベッド。

父が愛用していた本に本棚、そして母が大事にしていた油絵に簡単な化粧台。化粧台の上には小箱があった。

何気なく、その小箱を手にとって、蓋を開く。

リングだった。

飾り気のない、銀色の。

それは生前父親から貰ったと、母親が大切にしていた指輪で。ふと、両親が存在していた残滓を目の当たりにして。

そして少女は紫衣を纏ふ

楓は、崩れた。

抱く考え、感情、全て丸ごとかなぐり捨てて。

まるで迷子になった幼子のように泣きじゃくった。

第九譚 神を殺せ、世界を奪え（後書き）

獅子は笑っていた。笑って、羊に惚れ込んだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

「間違いないんだね？」

「ああ、間違いない。名前は北沢楓。間違はなく『異常因子』だ」  
「……ふうん」

「どうした？」

「あの娘、カワイイな。お師匠様に似てる」

「あんな小娘が好みか？ あの程度の娘なら世界にごまんと溢れてるではないか」

「『押領使』は本当に女を見る目がないね。下手に美人よりもあんな感じの可愛い子ちゃんの方がそられるんだよ。それに何よりお師匠様にそっくりじゃん。そっか。あの娘はお師匠様の生まれ変わりなんだ」

「余には貴様の考えが理解できぬ」

「いいよ、分かって貰えなくても。ねえ、ホントに斬らなきやならないの？ お師匠様かも知れないのにさ、ホントに斬らないとダメ？」

「無論。貴様は『追捕使』なのだ。それが永遠の役目だ。それにあの女が先代のわけがなからう」

「お師匠様、オレのこと忘れちゃったのかな……。一度死んじやつたから記憶が飛んじやつたのかな。でもさ、お師匠様だから『紫衣』を纏えるから大丈夫だよな？ ね、お師匠様の生まれ変わりならならきつと大丈夫だよな？」

「貴様……」

「だってそっくりだもん。あれは絶対にお師匠様だって」

「愚かな。生まれ変わりなどありはしない」

「あんなにそっくりなの？」

「無論」

「でもさ、あんなにそっくりなんだからお師匠様だよ。オレを愛してくれたお師匠様だよ」

「目を覚ませ。愚か者が」

「目を覚ますのは『押領使』だよ。あんなにそっくりなんだよ！？  
もうあの娘はお師匠様。誰が何と言おうとお師匠様なんだから！  
！」

「貴様というヤツは」

「あの時はお師匠様の気持ちが多分ならなかったからあんな無下にしちゃったけどさ、今度は大丈夫。きちんとお師匠様の愛を受け止めてみせる。だからさ、オレは決めた。今度こそお師匠様といっしょになる」

「あの女は先代とは別人だと言っている」

「違うよ。あれはお師匠様。絶対にお師匠様なんだから」

「……、」

「ねえ『押領使』。オレは、お師匠様の願いを叶える。三〇〇年経った今なら分かる。オレはお師匠様を愛してる。お師匠様はオレを愛してる。今度こそ愛し合う二人の『追捕使』が永遠の時を渡るんだ」

「貴様はどこまで愚かなのだ。例えあの女が先代の生まれ変わりだとしても、あの女が『紫衣』を纏えるとは限らない。それに貴様では女を壊すことしかできん。お前のような人間に女が付いていくわけがない。全てを改めるのならば別だが、お前が欲しい物をあの女から引き出すことはまず不可能だ。ましてや、お前が望むような展開など有り得ぬのだよ」

「やってみないと分からないよ？ オレ、なかなかの遣り手だからさ」

「そんなにあの女が欲しいのならば手込めにすればいいではないか。その方が遙かに楽だとは思わぬか？ どうせ処分する存在なのだからな」

「お師匠様のこと悪く言うなよ。いくら『押領使』だからって口が過ぎるんじゃないの？ それにね、オレはお師匠様の身体が欲しくて言ってるんじゃない。オレはお師匠様の心が欲しいんだ。身体なんて二の次でも三の次でもいい」

「ほう」

「もう一度言うよ。オレは決めた。過去の間違いをオレは正す。あの時のお師匠様の想いに答えるよ。オレはもう一度お師匠様とこの世で踊る」

「好きにしる。貴様にはほとほと呆れた。余は責任を取らぬ」  
「いいよ。その辺で見えていれば？ オレはお師匠様と愛を育むんだから」

それは。

少女と少年が出逢う、ほんの少しだけ前の出来事。

行間 一（後書き）

人の心は酷く醜い。故に、人は覆い隠す。自らを守るために、自らを着飾るために。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第一〇譚 ヒトデナシはだーれだ？

楓は、逃げた。

二日ぶりに登校して教室に顔を出したその瞬間、一瞬でクラス全体が凍った。

つまり『娘をかえて除いて一家蒸発』したという虚構の事実がクラス全員に知れ渡ったのだらう。既に教室に入っていた全員が楓を注目し、一斉に同情の眼差しを向けた。

だから、逃げた。

あの瞬間、確かに北沢楓の『何か』が木っ端微塵に砕け散ったのだ。

それを思い知らされて、怖くなった。ひたすら逃げた。

人の目を振り払うように廊下を駆け抜け、教師の静止の声を無視し、階段をいくつも駆け上がり、屋上に繋がる唯一の扉を押しした。

屋上は、風が強かった。

太陽が照らしていたものの、肌を切り裂くような寒風が身に染み

た。冬の屋上なんて来るものではないが、ここしか行く場所がなかった。

美術室という手も考えたことは考えたのだが、もしかしたら授業で使うクラスが出てくるかも知れないからやめた。結果、考えついた誰も来ない場所というのが屋上だったのだ。

北風に震えながら、風除けとなりそうな場所を探して座り込む。やがて、本日の始業を告げるチャイムが響き渡った。授業が始まった。が、あの教室であのクラスメートと同じ空気を吸うなんて耐えられなかった。

屋上の片隅で顔を膝に埋める。

そして少女は紫衣を纏ふ

憎たらしかった。

北沢楓という人間が、無性に憎らしかった。  
あの時。

少年に『追捕使』にならねば殺す、そう迫られた時。  
極めて利己的な考え、そして物事を決めてしまった。

自分が生きたいから。

生き延びたいから。死ぬのが嫌だから。

特に何も考えず、承諾した。

終わってしまった過去の出来事に『もしも』はない。

けれど、考えてしまう。

『もしも』あの時、楓が『追捕使』になることを拒んだら。

『もしも』あの時、楓が素直に命を諦めたら。

どうなっていたらだろうか。

無論。

答えは一つ。

命を喰われたのは楓一人で済んだ。

罪もなく、事情すら知らされずに血縁全員が斬殺されず済んだ。

あの楓の不用意な一言が、全てを変えてしまったのだ。

紛れもない、利己的極まりない一言で。

不意に、扉が軋んだ音を立てる。

「授業サボっちゃって何しているの？」

「ざあ、と風が鳴く。」

膝に埋めていた顔を上げ、楓は近付いてくる足音の主を見上げた。

「何しに、来たの？」

目の前に立つのは『追捕使』の少年だった。

あの、少年だった。

「楓ちゃんのことを心配して来たんだよ」

さも当然のような口ぶりで、

「オレも『初め』はそんな目で見られたからね。気持ちは解らない

わけではないんだよ？」

「黙って」

「ゴメンね。ねえ、どうしてそんなに落ち込んでいるの？」

僅かに黒衣の少年は目を細めながら、続ける。

「もしかしてさ、不用意に『追捕使』になるって言っちゃったこと気にしてる？」

「……、」

「もし気にしているんだつたらさ、そんな無駄な感情さつさと捨てちゃった方が楽になられるよ？」

「ッ！」

楓は目を剥いた。

「人間って凄く自己中なんだよね。だから『追捕使』になるって選択して家族が殺されたことに罪悪感を覚えることもないし、周囲から浴びせられる同情とか驚愕とかに踊らされることなんてないと思わない？ オレたちに刻み込まれている本能には生き延びること、子孫を残すことしか書かれてないんだし」

身が裂ける思いだった。

遠慮一切なしの物言いが、楓を震わせる。

「先輩として言っておあげる」

「黙って」

聞きたくなかった。

「オレに半ば脅迫されたとしても『追捕使』になる道を選択したのは正解だよ」

「黙って」

聞きたくなかった。

「例えその決断で多くの命が散っていったとしても、ね」

「いいから黙ってッ！！」

空気を切り裂く怒号と共に、気が付けば楓は少年の黒衣を掴んでいた。

構わない。楓は吼える。

「殺したのはアンタッ！！ アンタがお母さんもお父さんもみんな

殺したんじゃないッ！ みんなを無惨に殺したアンタが、『追捕使』になつたのが正解だ』なんて言う資格なんてないッ！！ この、人でないしッ！！』

楓の脳裏からは完全にここが学校の屋上だと言うことは消えていた。

真実を大声で怒鳴ろうが、何だろうが知ったことはない。噛み付くように絶叫した。

「それが正論だよ」

絶望と哀しみが混沌と混じり合う楓の叫喚に対して、少年は表情一つ変えなかった。逆にその対応に驚愕して楓が表情を変えてしまっぐらいい。

「楓ちゃんの言いたいことはよく分かるよ」

少年は告げる。胸元を掴まれているのに、抵抗することなく、弟子に物事を諭す師匠のように。

「家族が殺されて、殺した相手に憎しみをぶつけるのは人間として当たり前。だけどね」

あまりの温度差に、思わず楓は沈黙してしまった。

「果たして本当に楓ちゃんは『家族に悪かった』って思ってるのかな？」

えっ、と。

予想外の一言に、楓の目が大きく見開かれた。

「オレの刀とか楓ちゃんの大鎌。あの能力は『紫衣』って言うんだ。でね、『紫衣』はアカシツクレコードに記されていない、本来ならば『異常因子』として処分される者だけに発現する凄く凄く珍しい能力でさ、『異常因子』が『紫衣』を纏つてことは『追捕使』の素質を持つ者の証ってわけなの。それが『異常因子』が生きるための唯一の切符ってわけ」

朗々と語る。

「オレや楓ちゃんが纏う『紫衣』は『心の奥の感情』で発現、いや、爆発するって言った方が正しいかな……。とにかく『紫衣』を纏う

そして少女は紫衣を纏ふ

ためには部屋の照明をつけるためにスイッチみたいなきーになる感情があつてね、その感情を『追捕使』自身が把握しなければ『紫衣』は思うように使えない。だから『心の奥の感情』を引き出すために路地で脅したり、家族皆殺しにしたりしたんだだけだね。あ、これが家族殺したもう一つの理由ね」

そんな、理由で。

楓は呆然とした。

手から、力が抜けていく。

「忘れちゃったと思うけどお師匠様は『怒り』でね、だからてつきり楓ちゃんも『怒り』かと思つてただけだよ、どうやら違つてみたい。生まれ変わったらどうも昔の話はリセットされちゃってるみたいだね」

胸元を掴む手が、離れた。

「楓ちゃんの場合はね、きつと『哀れみ』だと思つよ」

少年は毅然と言い放つ。

「しかも『他人に向ける哀れみ』じゃなくて『自分に向ける哀れみ』なんだと思う。これはオレの推測なんだけど、オレに初めて会つたあときは『殺される自分が哀れだ』つて思つたからその感情に触発されて『紫衣』が発動した。二度目は『悲劇のヒロインになつてしまった自分が哀れだ』から。そして三度目、お母さんの死体を目の当たりにしたときは『殺されてしまったお母さんの娘である自分が哀れだ』つて心の奥底で思つたから」

つまりね、そう少年は続けて、

「オレは人でなしは楓ちゃんだと思っな」

人でなし。

少年の声と数十秒前の自分の絶叫がリンクする。

「決して他人へと向けられることがない、自分にだけ向けられる同情心。自己満足で自己保身の塊ってこと。楓ちゃんの本心はきつとソレ。これはオレの考えなんだけどね、同情つてのは人間が抱く感情の中で一番醜いんだよ。だって同情つて『嗚呼、なんてあの子は可哀想なんだろう』って感情でしょ？ 上から目線じゃん、自分は何様ですか？ それに夕チが悪いことに楓ちゃんの場合は極めて自己チューだし」

にこやかに少年が発した言葉の意味を把握するまで楓はたっぷり数十秒を要した。

「同情はね、その人間が確固たる地位にいる証拠なんだよ。豊かな国の人が貧しい国の人の話を聞いて『カワイソウ』って思って募金なりボランティアなり動くでしょ？ つまりそれは自己満足以外の何者でもない。豊かで恵まれている人間だからこそその優越感があつて初めて成り立っている感情なんだ。だってもしその人間が豊かじゃなかったら『恵まれない人々をカワイソウ』って思う余裕なんてないでしょ？ 同情なんて余裕があるからこそ抱ける感情だ」

何もオレはボランティアとか支援活動とかを否定しているわけじゃないけどね。少年は平淡に補足しながら、

「さつき楓ちゃんはおれに人でなしって言ったけどさ、そう言う意味での本当の人でなしは楓ちゃんだとおれは思うよ。大体さ、楓ちゃんはお心の底から『家族に申し訳ない』って思ってるの？ もし頷けるならその根拠は？ その『想い』が自己保身のために知らず知らずのうちに関自分自身でいよいよに改竄されている可能性は本当にゼロ？」

答えられないようだったら、どうせ安っぽい同情心から派生した感情だよ。先輩として忠告しておくけど、せつかく生きる道を選択したんだからそんなさ、具合悪くなりそうな感情はさつさと捨てた方が楽になれるよ。楓ちゃんは楽になりたいでしょ？」

絶望が、楓を墜とす。

そんな楓に少年はうつすらと笑みを浮かべ、

「じゃそう言うことで『レッスン』は今晚からだからね」

第一〇譚 ヒトデナシはだーれだ？（後書き）

捨てれば楽。いつしかそんな簡単なことをも見落とすようになっていた。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第一章 終わりに手を伸ばす

「楓ちゃん。とりあえずここまでおいで」

深夜一時過ぎ。

北沢家の庭に二つの人影があった。

その人影の片割れである楓は上を向く。

視線の先、屋根の上には闇に溶けてしまいそうな漆黒を身に纏う

少年が風見鶏のように立っていた。

「……無理」

「ジャンプジャンプ！」

「冗談！」

楓は一言で拒否するも、少年は当たり前のように、

「冗談じゃないよ。楓ちゃんがその気になれば人間のスペックなんて軽々と超えられるんだから」

「あのおさ、もっと分かりやすく説明してよ」

「だからさ、アカシックレコードに記されていないってことはね、この世界とは関係ないってこと。逆説さ。この世界とは一切関係ないってことは、この世界の法則だって関係ないって事」

「……、」

「楓ちゃん。人間は空飛べる？」

「無理」

「何で？」

「翼がないから。そもそも鳥じゃないし」

「翼がないから。鳥じゃないから。それが『飛べないこと』の証明になる？」

「常識でしょ。ネットで検索すれば理論付きで教えてくれるんじゃないの？」

「その理論はこの世界の理論でしょ？ 楓ちゃんはこの世界に關係ない。世界に關係ないって事は法則だつて關係ないんじゃないの？ 例えそれが当たり前つて呼べる現象だとしても」

言葉に詰まった。

人は空を飛べない。

当たり前だ。

人には鳥のような翼がないし、鳥のように飛ぶための筋肉を持っていない。

だがそれはこの世界の常識。世界から逸脱している『異常因子』きたぐわかえでには、そんな常識や法則は適用されるだろうか。少年の問いかけに妙に納得してしまった。

「せっかく『異常因子』なんだから自分の力の限界を決めるなんてもつたないって思わない？」

少年は楓を屋根から見下ろし、さつさと上がってくるように促す。

「そんな、……勿体ないとか、そもそも意味わかんないし」

「オレらは『紫衣』を纏える。もう『みんなが言う人』じゃないんだ。アカシックレコードに記されていない者のことを『異常因子』

つて言うけど、それは『本当に異常な因子』だからなんだよね。一般常識とか、科学的に定義付けられた人間の定義を根本から覆すことだつて簡単なんだよ。異常だからさ。だから人間の常識なんて關係ない。強い思いこそが北沢楓を使いこなせる力なんだよ。北沢楓が『異常因子』である限りね。飛べると思えば空を飛べるし、歩こうと思えば水しぶき一つ起さないで海の上を歩くことだつて簡単だし、頑張れば特撮ヒーローとかマンガに出てくる悪魔や天使みたいな力だつて出せるよ」

少年は、謳う。

「これからは楓ちゃんが常識を一から組み上げなきゃならない。さあ頑張つて」

楓は、少年の言葉に励まされるように軸足に力を込めた。

「ぬは……」

少なくとも女が出す声ではないな、そう楓は思いつつ眠い目を擦りながらのそのそとベッドから這い出て、大あくびしながら鳴り響いている携帯のアラームを止めた。

頭が、重い。

(いくら夜が目立たないからって、学校……)

寝不足で頭がグワングワンしているけれど、楓は強引に頭を覚醒させた。

時計を見る。

六時三二分。

(朝食、……トーストでいいや)

深夜にレックスするのは学校に影響するから止めて欲しい。

そう言ったのに取り合ってくれなかったあの少年を怨みながら、

楓は階段を下りる。

「おはよ、楓ちゃん」

リビングに入ると、漆黒の少年がソファに座って親父のように新聞を広げていた。

リビングには両親がまだ健在だったころと変わらず、朝日が差し込んでいる。

人がここで死んでいた、そんなことを忘れてしまっくらい綺麗な母親が殺されたこのリビング。

楓が少年を阻止できず、父親が帰宅とほぼ同時に斬殺されて、ほんの数分でサラリーマン風の男たちが家に雪崩れ込んできた。少年曰く、一見そこら中に居そうな彼らは裏の世界では名の知れた『清掃業者』らしく、彼らの手にかかればどんな殺人現場でも完璧な隠蔽が可能らしい。その『清掃業者』の男たちは満身創痍で倒れてい

る楓に見向きもせず、素人である楓が見ても手慣れた様子で死体を片付け、家中に飛び散っていた血痕を何か薬品らしき液体を散布しながら処理していった。彼らが去った後、そこには『普通』が戻っていた。人が死んでいたなんて嘘みたいだった。まるで魔法使いが魔法を使ったかのように、普通の北沢家だった。

「眠そうだね、よく眠れなかった？」

苛立ちを押し込め、強引に沈め、楓は当然のように少年を無視してそのままキッチンに入る。

楓は棚の中からパンを取り出すと、台の上に置いてあったトースターに突っ込んだ。それからスイッチを入れ、トースターが起動したのを確認するとそのままトースターを放置して洗面台に向かう。

(ふう)

簡単に顔を洗い、愛用している櫛を取ると寝惚け眼で鏡の自分と睨めっこしながら、髪の手入れに入る。

楓の髪は荒れやすい。

そう言う体質なのか、はたまた楓の生活習慣が悪いのか。手入れを怠るとこの黒髪はすぐに痛んでしまう。数少ない友人たちは綺麗な髪してるね、とそう言うが、苦労して手入れしているから当たり前。正直、あなたたちに言われなくても解っています、ついついそう反論したくなるが、一度反論してしまえば周囲からは傲慢だと思われる反発される。円滑な人間関係を築くためにはいろいろ気遣わなければならないことが山ほどあって、非常に面倒だ。

必要以上に髪に拘る朝の恒例行事は、それは母親と『バカ』の一言から始まった。

今でもそうだけど、昔から楓はめんどくさがり屋だ。

幼稚園児だった頃、習い事でもしないかと周囲から進められた時もお遊戯会で良い役をやらなかと促されたときも拒否した。理由はめんどくさいから。

そんな性格だから、当然身嗜みを整えることもめんどくさくて嫌いだった。

そして少女は紫衣を纏ふ

女の子だし綺麗な髪の毛なんだからと母親が無理矢理楓の髪を梳かしたり、可愛い服を着せられる度に嫌気が差した。身嗜みを整えるために長時間拘束され、自分の許可もなしに弄くり回されるのは納得いかなかった。

( バカ )

にも関わらず、今でもバカみたいに髪の手入れに必死になっている鏡に映っている自分を見て楓は毒気付く。

特に意味はない。

意味はないけれど、腹が立つのだ。

「よし」

鏡に映る自分の髪を見て楓は頷くと、リビング方面から、チンとトースターの軽い音がした。

さつさと朝食を済ませてしまおう。

先程までの悶々とした気持ちを抱いていたことなどすっかり頭の片隅に追い遣って、楓はリビングへと急いだ。

二

トーストはいい加減もう飽きたらしい。

( いい気味 )

少年の毅然とした抗議を『嫌なら食べないで』という、何処か母親らしい一撃で黙らせ、楓は制服に着替え、充電が終了していた自分の白い携帯を掴んで、自分の荷物を持って家を出た。

朝日が眩しく、若干肌寒い。天気予報によると今日は一日中晴れるらしいがあまり気温は上がらないとのことだった。

時刻は何だかんだで七時半。学校まで匍匐前進で行ったりしない限り、絶対に間に合う時間である。

楓はアスファルトで舗装された住宅街の細い道に行く。

いつもと変わらない、朝だった。

「ん？」

不意に、殆ど無意識に楓の視線が動く。  
にゃーお。

そんな間抜けな声が足下から聞こえる。

視線を下ろせば、そこには何時だったか校門で会った白猫がいた。  
楓は思わずしゃがんで首筋を撫でると、今度は逃げることなく白  
猫はされるがままだった。

（首輪が、ない）

ということは、飼い主はいないのだろうか。

それにしても不思議と今回は逃げない。前触ったときはすぐに逃  
げたのに。

そしてあの時味わった妙な手触りも感覚もなかった。

錯覚だったのかも知れない、そうぼんやりと思いつながらもしばら  
く楓は白猫の感触に浸っていた。

第一章 終わりに手を伸ばす（後書き）

そこは空虚。全てが空っぽであり、全てが嘘なのだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第一二譚 空虚の狭間にて

昼下がりの屋上で、楓は一人反芻するように呟く。

「両親を含めた一族全員が娘を残して蒸発か……」

この事実は予想以上にハードパンチだったらしい。

楓が教室に入るとクラスの雰囲気がおかしくなる。何というか、同情のような、嘲りのような、とにかく腫れ物扱いなのだ。

勿論、教師陣でもある。

見知った先生と廊下で擦れ違えば、元気出せ、とか、相談に乗るからいつでも来なさい、とか安っぽい言葉をかけてくるし、面識がない教師だとあからさまに視線を逸らされたりする。

(授業中当てられる回数が格段に減ったっていうプラスもあるけど……)

楓がアカシックレコードに記されていない、処分の対象である『異常因子』であること、そして助かる方法を知って、その方法を選択し、一族が『追捕使』の少年に皆殺しにされて、もう五日が経った。

もういい加減この状況に慣れてしまっていた。

実感はないが、世界がアカシックレコードという名の脚本通りに進んでいることを知り。

自分がアカシックレコードに記されていない者、処分される立場である『異常因子』と知ることを知り。

そんな『異常因子』を処分する『追捕使』の存在を知り。

そして『異常因子<sup>キタザワカエデ</sup>』でありながら処分を免れる選択肢を提示されて。

その選択肢を選んだ途端に両親を初めとした一族が皆殺しにされて。

借金苦で北沢楓一人残して一族全員が蒸発したという風説を散布されて。

自らは『紫衣』という異端な能力を手にし、毎晩自在に操るためにレッスンを受けて。

そんな『異常』な世界に、慣れてしまった。

存外人間の適応能力は素晴らしいようだ。

慣れてしまえば次第に何ともなくなってくる。感覚が麻痺していても言うのだろうか。少し違いかも知れないが、連続殺人犯が次に人を殺すことに罪の意識が薄れていくような、そんな感じかも知れない。それは楓とって少し怖いことだったが、周囲が楓に向けての同情と奇異の眼差しにも平然としていられるようになった。今では本人以上に周囲が狼狽えているのかもしれない。

遠くで五校時の始まりを知らせるチャイムが鳴っている。

両親が『蒸発』して以来、楓は変わった。

以前だったら昼食は教室でそれなりに仲の良い友達と取っていたが、あれ以来、妙に居心地が良くなってしまった屋上に一人で取るようになったし（『慣れ』と『我慢』は違うのである）楓は良く授業をサボるようになっていた。

このまま北沢楓は『紫衣』の扱いを学び、そしてゆくゆくは『追捕使』になるのだろう。それが楓の未来だ。道は決まってしまうているのだ。いくら天才であろうと大馬鹿者であろうと関係ない。大受験も将来目指す職業や夢なんて意味もない。勉強する意義を見出せない。逆に勉強してどうなるのか、そう問い糾したいくらいだ。以上が楓が授業をサボる理由である。そもそも楓の未来は一本しかないのだから。

だが。

みすみすそんな線路を大人しく歩いていく気は毛頭無かった。

楓は『追捕使』になる気はない。

少年の元で『紫衣』の扱いを学んでいるのは他でもない、あの少年を殺すためだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

あの『追捕使』に勝つためには『紫衣』を飼い慣らすことが一番。そう楓は思い知った。

殺す。

少年を殺す。

現在の至上命題だ。

それが果たせれば後のことはどうでもいい。

極論を言ってしまうえば、退学になったって構わない。

退学になって今まで勉学に当てていた時間を全て『紫衣』を上手

く扱ったための訓練に当てられる。その方がずっと良いし、効率的だ。

何にせよ、もう後戻りできない。

家族が殺された今、楓の頭は少年への復讐でいっぱいだ。

どうやってあの少年に復讐するのか。

どんな方法が一番効果的か。

どんな方法をとればあの少年を絶望に墜とせるか。

気が付いたらそんなことばかり考えている。

暇な時間があればそんなことばかり考えている。

だから、復讐さえ出来ればいい。

復讐を遂げれば、とりあえずやることはなくなる。

家族の仇が取れば、別にどうなっただって構わない。別に死んだ

って良い。寧ろ、自殺したら『向こう』で家族みんな幸せに暮らせ

るかも知れない。

力を、付けるのだ。

早くあの少年のような力を身に付け、家族の仇を討つ。

家族は、楓の利己心によって殺されたのだ。

楓が生きたい、そう願ったから家族は殺された。

殺されなくて良かった家族が、犠牲になった。

そんな家族に申し訳が立たない。

犠牲になった両親を初めとした一族全員の命に申し訳がない。

何のためにこの道を選択したのか、何のために家族全員が犠牲に

なったのか、それを考えれば楓には一刻の猶予もない。

そして少女は紫衣を纏ふ

( 殺す )

あの少年を、殺す。

殺さなければならぬ。それは義務だ。

絶対に、血祭りに上げる。

一族全員の仇をこの手で、掴む。

心で渦巻き続けているこの怒りを、悲しみを、憎悪を、全てぶつけてやる。

「ころす」

声が漏れる。

「ぜつたいに」

誓う。

「わたしは」

誓う。

堅く、厳しく。

チャイムが鳴り響く。にわかに学校全体が騒がしくなってきた。

( 四時間目か……、帰っちゃおうか )

そんな考えが過ぎり、すぐそれを肯定する自分がいた。

大体にして『平日は学校』という固定観念がいけないのだ。

母親のおかげで遅刻なんて滅多にしなかったし、何より小学生の頃からだったから『朝早く起きて学校』という行動が染みついて離れない。気が付いたら身嗜みを整え、登校する準備を整えて玄関を出てしまっている。そんな感じなのだ。

全く、中途半端に真面目なのだ。

中途半端に善人を気取り、中途半端に悪人を気取る。

そんな自分が無性に嫌になってくる。

楓は人知れず嘆息する。

もうそんなことに拘る必要なんて何一つないというのに。両親の教育の賜か、真面目でとことん愚かなのだ。北沢楓という人物は。

(……帰る)

軽く決定し、立ち上がろうとして 止めた。

(荷物全部教室のロッカーだった……)

携帯を開いて確認すれば、もうあと数分でチャイムが鳴るところだった。

今教室に戻ってしまえば四校時を受けなければならない。それは、めんどくさい。

仕方がない。

楓は諦めた。

とりあえず今は待ってみよう、そう思った。

携帯の時計を見れば、約四〇分後には授業は終わっているはずだ。授業の終わりを待って、昼休みになれば教室に人が疎らになる。その隙にこっそりと教室のロッカーから私物を持ち出して帰れば良い。もしクラスメイトや教師に何か言われれば『お腹が痛いので』とか何とか仮病を使えばいい。嘘も方便。別に誰が損する嘘でもない。強いて言えば損するのは楓だが、まあそれはいい。教師やクラスメイトは勝手に『身内が蒸発したことが原因である心労』とでも捉えてくれて逃げることなんて簡単だ。

(よし、それにしよう)

壁にもたれ掛かる。

暖かい陽気だ。眠くなる。連日深夜の『レッスン』で寝不足だからだろうか。眠い。無性に眠い。いっそ少し寝た方が後々楽になるかも知れない。

そして少女は紫衣を纏ふ

肌寒い。

堪らず薄く目を開けると、

「うわッ！」

思わず、逃げた。

「あ、…………？」

視界いっぱいには神田裕太の顔があった。

できるものならお前のせいだ、大声でぶつけてやりたい。

けれど今はバカみたいに騒いでる心臓を落ち着かせることが先だ。

「どうした？」

「……………何でもない」

深呼吸を繰り返す。心臓を落ち着かせるのももう慣れた。

「何の用？」

「ん？ 心配してお出でなさった俺に向かってそんなコト言っの？」

いつのまにか夕焼けだった。

昼休みで早退するつもりだったのに、どうやら放課後まで寝過こしてしまったらしい。

楓はボンヤリと鈍つたままの思考を起こし、手串で髪を整えているると神田が脇に座つた。

「やっぱ、辛いだろ？」

「……………うっさい」

「はあ。相変わらずだな、姫は」

苦笑と苛立ちを混ぜたような表情を浮かべて、

「心配してやってんだぞ、俺は」

「……………それは、どうも」

案外、神田は的を射ていた。

思わぬ所で確信付近を見抜かれた楓はどう返答して良いのか解らずに黙り込んでいると、神田は手に持つていた何かを楓に向かつてポイツと投げた。びっくりしたけれど何処か見覚えがあるシルエットのそれを何とか受け取つて、

「つて、これ私の鞆じゃない！」

「お前の机からパクって来た」

「ちよ……」

「いーじゃんか、別にさ。今更だろ？」

確かに今更だ。この学校で誰よりも神田と親しいと楓は自負しているくらいだが、それでもである。

「だからってね」

と、そこまで考えて、ふと思う。

その程度かも知れない。

神田にとつて、北沢楓という人物は。

ただの幼馴染み。よく考えてみたら神田との繋がりはその一本なのだ。

神田から見れば、妹を見ているような感覚なのかも知れない。

「どした？」

「……何でもない」

スカートに付いた汚れを軽く払って、鞆を肩に引っ掛けた。

「じゃあね。バイバイ」

「ちよつと待った。どーせこれから暇だろ？ 付き合えよ」

「……、」

「いーから。俺の驕りだ。来るだろ？」

驕りと言われれば、付いて行きたくなる。

「じゃ、決まりってコトで」

「ちよつと！ まだ行くって行つてないんだけど！」

「あゝもゝ、めんどくさいな」

実に鬱陶しそくに神田は振り返って楓に視線を合わせる。

そのまま露骨に鬱陶しそうな口調と表情で、

「俺の驕りだ。来いよ」

如何せん、楓は納得がいかなかった。

けれど、神田が醸し出すその妙な自信と雰囲気誘われたのか、気が付いたら楓は神田の背中を追っていた。

第二二譚 空虚の狭間にて（後書き）

純真で、無邪気だった。だから心地よかったのかも知れない。

そして少女は紫衣を纏ふ

### 第一三譚 天真爛漫な輪舞

いつからだっただろうか。

神田裕太が北沢楓の事を『姫』と呼ぶようになったのは。

幼稚園の頃からもう既に『姫』と呼ばれていたような気がする。

神田と出会ってから、もう一五年以上経っている。

けれど、彼は今でも変わらず楓のことを『姫』と呼び続けている。そう呼ばれるに到る所以は、良く覚えていない。幼稚園に入園する少し前の夏祭りがきっかけだったような気がするが、そこら辺の記憶が酷く曖昧なのだ。

けれどまんざら悪い気はしない。

それは神田と楓とを繋ぐ貴重な糸の一本だったし、何だか神田から特別扱いされているようで呼ばれる度に嬉しかった。周囲から冷やかされもしたがそれでも、嬉しかった。

ぴゅう、と風が吹き付け、楓は現実世界に戻された。

一二月は、やっぱり寒い。

高速道路の高架下を潜り抜け、大量の砂利を積載した大型トラックが巻き上げる粉塵と排気ガスを出来るだけ吸わないように息を止めながら、先行する神田の姿を追う。

学校から歩いて一五分程度経っただろうか。地元では比較的有名である格安ホテルの前を通る。

(何処に連れてく気なんだろ……)

そして少女は紫衣を纏ふ

いろいろな可能性を頭の中に浮かべ、消していく。  
と、

「こっちだって」  
ハツとした。

あろう事か神田は楓の後ろにいた。

どうやら考え事をしていた間に楓は神田を追い抜いてしまったらしい。慌てて神田の元へと戻れば神田は安心したように一息付いて、そのまま格安ホテル隣の地下飲食店街への階段を下りていった。

(酒でも飲んだりして)

地下街全体が気持ち酒臭い。

神田がこんな所に入りに入りしていた事自体驚きだが、当の神田は居酒屋には目もくれずさっさと進んでいく。どうやら目的は酒ではないらしい。

しばらく古ぼけた飲み屋を両側に進み、やがて最も奥まった所でピタリと止まった。

目的地は、ここらしい。

その胸を把握した楓は、神田と並んで目の前の店を見据える。

「ここ？」

「ここ」

小洒落つつも廃れたといった感じの小さな店がある。

お世辞にも綺麗とは言い難い、焦げ茶色のドアに掛かっている看板には、店名らしき文字が書かれている。辛うじて『ク』と『ツ』と『チ』が見て取れるが、朽ちかけの看板からはそれ以上読み取ることが出来ない。

「スナック？」

「アホ。喫茶店だ」

楓にはどうもいかがわしいスナックに見えて仕方がない。少なくとも学生が寄り道するようなところではないだろう。

「……本当に喫茶店？」

「安心しろって。ここのコーヒーがマジで美味いんだ」

にっかりと笑う神田。

「ふ〜ん」

心臓がうるさい。

馬鹿みたいな動揺を隠すために、意識して楓は平淡で淡々とした口舌を振るう。

「知る人ぞ知る名店でさ、俺の兄貴がここの常連でそのよしみで俺も通ってるの」

「兄貴、って……祐介ユウスケさん？」

「んあ、良く覚えてるな？」

「幼稚園のときよく遊んだじゃん、三人でさ」

「だったな」

あの頃はまだ家の周辺は雑木林と田んぼがたくさん残っていて、灌漑用水を溜めておく綺麗な溜め池まであった。確か、池の名前は『神賀池かつかいけ』。人工的に造られた溜め池なのに大層な名前だと幼いながらに思った覚えがある。今ではすっかり田んぼや雑木林は住宅に姿を変え、あの溜め池は埋め立てられてしまっているのだが、あの池は一生忘れることのできない場所だった。あの時の会話も

含め、何もかも。

「ま、とりあえず入るぞ？」

「ん」

あの頃に戻れることなら戻りたい。

出来ることなら、本当に。

ドアベルを鳴らして店内に入ると、予想通りだった。

内装はやっぱり古ぼけている。派手な彫刻の類が一切無いが、雰囲気だけで充分な焦げ茶色の柱だけでも充分。壁紙は剥がれ落ち、

そして少女は紫衣を纏ふ

店内の電灯は所々切れかかっていたりして、喫茶店というよりは古びた写真館や骨董品店のような印象だが、何となく楓はコーヒーを嗜むには打って付けの空間かも知れない、そう思った。

「なんだ、せっかく兄貴が帰ったかと思えば今度は弟かよ」

テノール歌手を彷彿させるダンディーな渋い声がカウンターの向こうから飛んできた。

面倒見が良さそうな老人。どうやら彼がマスターらしい。

「いーじゃんか、いつものね」

本当に常連のようだ。

神田はさも当たり前のようにど真ん中のカウンター席に陣取り、入り口でどうしたらいいのかわからないでいた楓を手招きした。

「お嬢ちゃんは？」

ぎこちない動きで神田の隣に陣取った楓にマスターは言う。

(今時の女子高生に『お嬢ちゃん』は古いんじゃないかな)

そんなことを思いながら、

「じゃあ、ブルーマウンテンで」

咄嗟に出てきた単語がそれだった。

マスターはカウンターの奥に置いてある古めかしいラジオのスイッチを入れた。

そのラジオの砂が混じったような感じの音は不思議と眠りを誘う優しさに満ちていて、妙な安心感と充実感が優しい空気を醸し出す。

「良い店だろ？」

切り出したのは神田だった。

楓は両手を温めるようにコーヒークップを包み込みながら、素直に頷く。

「一人になりたい時とか、俺はよくここに来るんだよ」  
「？」

楓は神田の真意を測りかねたが、  
「露骨だな。邪魔だつてか？」

「まあね、ちよつと今回は邪魔だな」

真意を伝えたかった相手にはしっかりと伝わったらしい。

「お前たち兄弟は本当にろくな神経してねえな」

「何でも良いから早く引つ込めよ、マスター。出て行くときはちゃんと呼ぶから」

マスターはやけくそ気味に文句一つ吐き捨て、やがて奥へと消えた。

雑音混じりラジオだけが、店内に響いている。

果てしなく、静かで心地の良い空間だった。こんな空間で絵でも描きたいなあと思いつながらコーヒを啜る。

「ね、どうしてこんなトコまで連れてきたの？」

「ん？ そりゃ、姫を心配してるからに決まってるんじゃない？」

「ふーん」

楓はいい加減に相槌を打って、楓は角砂糖を二個ばかりコーヒーの中に放り込んだ。

「最近授業もサボってんじゃないか。姫らしくねえって思ってたさ」

角砂糖がノロノロとカップの中で溶けていく。

「グレちゃったの」

「あつそ」

楓はスプーンを取って、溶けていく角砂糖を突いた。瞬間的に角砂糖は崩壊し、黒へと吸い込まれていく。

「ま、姫は昔から適当だったけどさ、学校とか授業とかサボる事なんてなかったじゃん？」

「そう？ 体育とかサボってたけど？」

「だっけか？」

そして少女は紫衣を纏ふ

両手でカップを包み込むように持ち、一口含む。

芳醇な香りがする。それでいてまるやかで、インスタントコーヒーなんかとは比べものにならないくらい全体的にしっかりとしている。店の雰囲気だけではなかった。確かにこの店は『名店』のようだ。素人目でも分かるような気がする。

「……ウチの母上が『もし困ったらいつでも来なさい。刺身ご馳走してあげるから』って」

「うん。ありがとう」

「大丈夫か？ 顔色あんまよくねえみたいだけど？」

「まあ、ね」

言ってしまうおうかと思った。

いや、打ち明けたかった。

あの『追捕使』や『紫衣』やアカシックレコードのことも、一族皆殺しという真実も何もかも全部。

神田なら打ち明けても良いような気がした。

神田なら受け止めてくれるかもしれない。

この苦しみから救ってくれるかも知れない。

救いの手を差し伸べてくれるかも知れない。

だが。

楓はその想いを否定した。

今さつき意想したこと全て。瞬時に。

言ってしまうえば全てが終わる。

真相を神田が知れば、神田にいらぬ荷を背負わせてしまう。

もし神田が真相を知ったことがあの少年の耳に入れば、神田の命はない。

あの少年は間違いなく武力行使に出る。一族の死だけでも充分過ぎる犠牲なのに、神田まで巻き込んでしまう。それは絶対に嫌だ。

絶対に、嫌だ。

「大丈夫。ちょっと、疲れてるだけ」

「明日、学校来るんだろ？ 黒城のヤツが心配してるぜ？ 俺から

そして少女は紫衣を纏ふ

「フォローしとくか？」

「……ううん。フォローは自分でやるから」

「あっそ」

すっかり飲み頃になっているコーヒーを口に運ぶ。

沈黙が、続く。

店内には音の悪いラジオからジャズっぽい音楽が流れている。

妙に落ち着いた、何だか懐かしい感覚を楓は莫然と享受していた。いつまでも、願わくはこの平穏が続きますように。

絶対に叶わない願いを、心に秘めて。

午後七時二三分。

携帯の背に付いている小ディスプレイにはそんな文字が浮かんでいた。

(すっかり遅くなっちゃった)

玄関先で靴を脱ぎ、あの喫茶店に長居したことを多少なりと反省する。

この際だから食事は適当に残り物で繕って、さっさと風呂にでも入って仮眠を取ってしまったおう。どうせ今夜も『レッスン』があるはず。『レッスン』はどうせ深夜だから仮眠を取らなければとてもじゃないけど体力が続かない。

階段を登り、二階の自室の扉を開けて鞆だけを中に放り込む。本来ならばここで着替えられるのだが、めんどくさかったから着替えることなく夕食の準備をすることにして、楓は一階へと戻り、リビングのドアを開けた。

「おかえり〜」

開けると、気の抜けた声が飛んできた。

「何、してんの？」

漆黒の少年は空腹で死んだようにソファで寝ていた。

彼がいつも腰に差している刀は無造作に床に投げ出されていて、何だかその刀が妙な哀愁を醸し出している。

「何してるのって、……楓ちゃん酷いね」

「は？ 意味分かんないんですけど」

「酷い。酷いよ、楓ちゃん」

少しヒステリックになっっているらしく、少年は弱々しい声で、

「楓ちゃんがあんまり遅いから餓死する所だったじゃない！」

そのまま死んでしまえばいいのに。

楓が抱いた率直な感想だった。

「関係ないし。冷蔵庫にいろいろあるから適当に食べればいいのに」「りょーり、したくないの」

だから何か食べさせて。

そうごねる少年に楓は嘆息しながら、食パンを手を取った。

第一三譚 天真爛漫な輪舞（後書き）

負を纏いて、少女笑ふ。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第一四譚 この鎖が許さない

今日の『レッスン』は家の中でやるらしい。

「で、何するの？」

リビングの中央部に置かれていたダイニングテーブルを端に押しやると、比較的広いスペースが出来る。楓は食パン数切れで黙らせた少年の指示通り、あの日から無造作に壁に立てかけられているだけだった漆黒の大鎌を手握る。

「試しに振ってみて。大鎌それ」

リビングの中央で少年は向かい合う。

楓は言われるまま、家具を気遣いながら薙ぐように振り回してみた。

大鎌は身の丈より少し大きいのだが、その割には不自然なほど軽い。

まるで発泡スチロールの棒を振っているようだ。

そんな所感を頭の中で転がしていると、

「あ」

咄嗟に、声が出た。

ここは室内だ。だから気遣って振り回していたのに。

ダンツと、嫌な音。そして何とも言えない冷や汗が出る。

どうやら軽いと感じるのは持ち主かえでだけらしく、持ち主かえで以外にはしつかりと見た目相応な作用が働くらしい。

「床に刺さっちゃった原因は一つだけだよ。室内の大きさと楓ちゃんの鎌の大きさが合わなかっただけ。じゃあ、ここで問題です。ど  
「すれば楓ちゃんは思う存分振り回せるでしょうか？」

「……、」

「単純に考えようよ」

そして少女は紫衣を纏ふ

単純に考える。

その一言に促されるようにして、

「部屋を大きくするか、鎌を小さくする」

「うん。だけど実際問題部屋を大きくすることって出来ると思う？」

「無理でしょ」

少年は頷く。

「じゃあ楓ちゃんの鎌を小さくすればいい」

「は？」

「だって部屋を小さくできないんだったら楓ちゃんの鎌を小さくするしかないじゃん」

「そんなこと、できるの？」

「さあ」

矛盾している、楓は苛立ちを押しとどめながら思う。

「オレのお師匠様は武器の形を自由自在に変えてた。楓ちゃんも多分お師匠様と同じタイプだと思うな。それに『紫衣』は人間の最も強い気持ちがそのまま武器の形状になったモノだからさ、根性出せばどんな形にも変化できるはず」

少年は口調を変えずに続ける。

「人間は気持ちを理性で操作できるでしょ？ 一番強い気持ちって言ったってやっぱり気持ち。コツさえ掴めば簡単だよ？」

柄に手を当て、ゆっくりと刀身を曝し、

「これはオレの話だけど、例えば……」

懐から紙を取り出し、二つ折りにして刀身を挟み込む。

「切れ味の調整」

少年は刀を引く。が、紙は二つに斬れることなく刀は抜けた。

「ペーパーナイフ以下の切れ味になったと思えば」

紙を懐にしまつと、おもむろにリビングを彷徨いて、刹那、

「時に鉄をも両断できる切れ味になったりする」

一閃。

ブラウン管テレビが袈裟斬りに、欠片一つもこぼれ落ちることな

く鮮やかに切断された上半分が床の上に落ちた。

「ね？」

「ちよ、ば、テレビ！」

「こんな感じでね、」

「何サラツと、アンタ、テレビ！」

「結論から言えば『紫衣』は『変化する武器』なわけ」

「テレビ、弁償しなさいよ！！」

「ちなみに『紫衣』の扱い方は自分で編み出すしかないから。自分の気持ちを他の人が操作できないでしょ？ それと同じ。と言うことで今日の『レスン』は楓ちゃんの鎌をどんな形でも構わないから変化させてみて。頑張つてね、楓ちゃん」

鮮麗された動作で、少年は刀を鞘に収めた。

楓は少年の腰元の刀と自分の鎌を見比べながら、

（変化させるって言ったって……）

とりあえず、テレビのことは忘れることにした。勿論、この瞬間だけだが。

楓は床に突き刺さっている大鎌を引き抜く。

（切れ味の調整か）

あの少年が見せた現象。

果たして自分にも出来るのだろうか。

（大きさの調整……）

何となく、手に持つ鎌に力を込めてみる。

（何も起こないじゃない）

ふて腐れてみるが、やっぱり変化がない。

「ねえ、コツは？」

「だから扱い方は自分で編み出すしかないからさ。コツなんて人それぞれだよ。人によって形も質も違うからね。後は楓ちゃんが『紫衣』に慣れるかにかかっているんだよね。多分、一ヶ月もすれば自然と上手くいくと思うよ？ 元々そう言うモノらしいし」

言い残して、さっさと少年は出て行く。

楓を一人リビングに残して。

まだ三〇分しか経っていない。  
が。

(やっつけられないって)

すっかり鎌を放り出し、ぼんやりとリビング中央で佇んでいた。  
いくら『紫衣』は使用者固有の形状と操り方があるうと、何のヒ  
ントもなしに『形を変えてみる』なんて言われても困る。

(感情だって暴走するって)

人が感情を自由自在に制御できたら恐らくこの世界はもっと平和  
な世界になっているだろう。

絶対に戦争は今よりもっと少なくなるはずだ。確信はないけれど、  
何となく確信できる。

(鎌の大きさを変える、か)

仕方がないから、楓はあの少年が言っていたことを思い出そうと、  
記憶の糸を探ってみる。

(単純に考える)

鎌に手を伸ばしながら、単純に考えてみる。

一時期ブームだったスプーン曲げの要領で念じれば何とかなるだ  
ろうか。

(無理ですね)  
ならば、

(やっぱり、感情の制御ってヤツ?)

物凄く、ぶっ飛んだ考え方だと改めて思った。

少年の口ぶりから察すれば『紫衣』の形もいろいろあるらしく、  
個人個人の感情が形状形成に大きく影響するらしい。

確かに少年の言う通り、人間は感情を理性で多少なりと制御できる生き物だ。そう。一番強い感情って言ったって所詮感情でしかない。コツさえ掴めば制御できないわけがないだろう。だが、そのコツが掴めないから今現在こんなに憂鬱になっていると言っわけ

(ん？ 一番強い感情？)

引っ掛かった。

「 、一番強い感情」

復唱してみる。

そう言えば、あの少年が何か言っていたような気がする。

(何処で、だったっけ)

思い出せない。

思い出そうとする。

思い出せない。

思い出そうとする。

思い出せない。

思い出せそうで思い出せない何とも言い難い不快なモヤモヤが楓を飲み込む。

「気持ちワル」

楓の口から、不意にそんな言葉が漏れた。

一番強い感情。

何だろうか。

一番強い感情。

( 復讐心？)

確かにそれもある。  
が、もっと奥だ。

(焦り？)

違う。

(嫉妬？)

違う。

次々と候補を思い浮かべ、消していく。

(ナニ?)

不思議な気持ちだった。

気持ち悪い。

喉に小骨が引っ掛かっているような、何かに心を抓られているような。

(私は、)

そうだ。

(感情)

一番強い感情。

(感情)

北沢楓を形作っている深淵の感情は、刹那

『人でなしは楓ちゃんだと思っな』

フラッシュバック。

脳内に映し出されたそれは、ノイズ混じり。

(なに、これ……)

思わず顔を上げる。目に映るのは代わり映えのない天井。

そして少女は紫衣を纏ふ

そして少女は紫衣を纏ふ

ガクガクと膝が震える。

『楓ちゃんの場合は「哀れみ」だと思っよ』

立っていられなかった。

思っよように、立てない。

膝が笑っている。楓は大鎌を支えにして情けなくしがみついた。

『簡単に言えば、同情と同じだよ』

フラッシュバックは容赦しない。

『オレに初めて会ったあのときは「殺される自分が哀れだ」って思ったからその感情に触発されて「紫衣」が発動した。二度目は「悲劇のヒロインになっってしまった自分が哀れだ」から。そして三度目、お母さんの死体を目の当たりにしたときは「殺されてしまったお母さんや家族が哀れだ」って心の奥底で思ったから』

絶望の渦が楓に食らい付いた。

『同情心だよ。一回目と二回目は自分に対する自分自身の同情。三

回目は家族に対する同情』

ダンッ！

楓は膝を付き、身体をくの字に曲げ、殆ど無意識に拳を床に叩き付けた。

『同情ってのは一番醜いとオレは思ってるんだ。だっって同情って「嗚呼、なんてあの子は可哀想なんだろう」って感情でしょ？ 上から目線じゃん、自分は何様ですか？』

嫌悪感。

猛烈な嫌悪感が楓を飲み込み、その勢いのまま、猛烈な勢いで拳を床に叩き付ける。

何度も何度も何度も何度も何度も。

一心不乱に湧いてくるフラッシュバックを拒絶するように、振り払っよように。

が。

そして少女は紫衣を纏ふ

『ホントウノヒトデナシハカエデチャンドトオレハオモウヨ』

ぷっちん、と。

何かが切れたような音がした。

第一四譚 この鎖が許さない（後書き）

仮面を外せば視野が広がった。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第一五譚 散華の咆哮

もう、戻れない。

手の中を見る。

そうだ。

認めよう。

今まで認識していた『自分』は全て虚構だったのだ。

善人のフリは、もう辞めだ。

そして『自分』が認識している以上に『自分』は酷い人間だった。冷静に考えれば分かることだ。

何故、両親の亡骸を目の当たりにして『自分』は涙を流さなかったのだろうか。

何故、両親の寝室に入って涙が溢れてきたのだろうか。

何故、たったの二日間で学校に復帰できたのだろうか。

理由はそれぞれ一っだけ。

人でなしなのだ。ここにいる『自分』は。

何故、両親の亡骸を目の当たりにして『自分』は涙を流さなかったのだろうか。

あまりのショックで安心していただけから。

否。

それは突然両親を奪われた『自分』が哀れだと思ったから。

何故、両親の寝室に入って涙が溢れてきたのだろうか。

言いようのない喪失感に襲われたから。

否。

それは両親を無くしたという事実を思い知らされた『自分』が哀れだと思ったから。

何故、たったの二日間で学校に復帰できたのだろうか。

そして少女は紫衣を纏ふ

何事にも負けずに頑張っつていこう、そう決意したから。  
否。

両親が殺された悲しみがたったの二日間であらうから。  
生まれてから今まで、とことん『自分』にとって理想的な自己解  
釈をしていたのだ。

心の奥底に渦巻いていた『ホントウノジブン』に蓋をして、理想  
的な善人を気取っていた。

事実を認識すればなんてこともない。

大鎌を思うように扱えなかったのは『自分』の本当の姿を捉えて  
いなかったから。

たったそれだけだったのだ。

そう。

たった、それだけのこと。

くの字に折り曲げていた身体を起こす。

足の震えは止まっている。立てる。簡単に立てる。

手の中には身の丈以上の大きさを誇る闇色の大鎌。

石突きから湾曲した刃の切っ先に至まで雄々しく美しいレリーフ  
が施され、形は絵本に登場しそうな死神が持っている鎌と変わらず。

石突きで床を小突き、一呼吸置いてグツとただ単純に握り締めて  
みた。

一瞬、それはほんの一瞬の出来事だった。

「わ」

思わず床に大鎌を落としてしまった。

楓は屈み、拾う。

一〇センチほどの『大鎌』を。

身の丈以上の大きさだった大鎌はその大きさを換え、掌にすっぽり隠れてしまうサイズまで小さくなっていた。楓は掌サイズの大鎌を『抓み』ながら、試しにもう一度力を込めてみる。すると一瞬にして掌サイズの大鎌がすっかり身の丈ほどの大きさに戻っていた。

「すごいすごい」

間抜けな拍手がリビングに響いた。

「さすがは楓ちゃんだよ」

脳天気には拍手しているのは黒衣に身を包んだ少年だった。

「お師匠様そっくり。やっぱりお師匠様だよ」

言葉の真意は分からないが、純粹に賞賛しているだけなのだろう。頭ではそう分かる。

「ただ、許せないモノは許せない。」

腕を振るった。

「どうしたの？ 楓ちゃん」

平然と、ただ楓の瞳だけを捉えて少年は言う。

喉仏付近に、大鎌の石突きが突き付けられているにも拘わらず。

「うん。いいね」

少年は楓の不意討ちにしっかりと対応していた。

「ご丁寧にも、最小限の動きで。」

一夜明けた。

「フォローか……」

通学路。

楓は悩んでいた。

正直、神田のアドバイスはありがたかった。

自分のことで手一杯だったから、和美の事なんて眼中になかったのだ。

言ってしまうえば、楓にとって基本的にクラスメイトや担任教師はどうでもいい。

親しい友人なんて数えるほどもないし、教師で親しくして貰っているのは担任と尾藤くらい。

そして彼らだって楓一人が欠けたって何とも思わないだろう。数少ない友人は『偶然』楓と会話して『偶然』気があつた程度。尾藤だって美術部顧問だから、担任は担任だから『自然と』関わりを持つただけに過ぎない。

それは積極的にクラスの中へ飛び込んでいないからであつて、その気さえあれば、いくらか楓が置かれている状況から脱却できるかも知れない。けれど、そんな気にもなれなかつた。

中途半端にクラスに飛び込んでしまえば、いろいろめんどくさい。それに自分がクラスの面々ときゃあきゃあ出来る人間だとも思えない。無理して背伸びする必要はないし、身の丈にあつた振る舞いをすれば面倒事はまず降り懸かつてこない。それが昔からの楓の持論だつた。

(うん)

今でこそ分かる。

なんでそんな持論を展開出来たのか。

人でなしなのだ。北沢楓は。

表から向き合えば、クラスが楓を見放しているように見えるかも知れない。

けれど逆説、裏から見ればどうなるだろうか。  
裏からみれば、楓がクラスを見放しているのだ。  
彼らと拘わる必要はない。

彼らと拘わっても何のメリットを見出すことは出来ない。  
そう、彼らを決め付け、見下して。

ナルホド、確かに人でなしだ。

そう思えば、不思議と笑みが零れた。

(それでいい)

それが、北沢楓の本性だ。

本性がそうならば仕方がない。

何も無理して背伸びする必要はないのだ。

今まで『内気な子』と言う上っ面で残酷な部分を隠して生きてきた。

今までその本性を捉えた者はいないだろう。そもそも自分の正体に気付いたのはほんの数日前だ。自分でも知らなかった本性を他人が知りうるだろうか。まず無理だろうと楓は思う。いくら自分自身を知ったからって、生き方を変える必要なんてない。このままで問題ない。

そう、そのはずだった。

しかし、だ。

神田は和美が心配していると言った。

神田からそのことを聞かされたとき、嬉しかった。

和美は、楓を心配してくれているらしい。

嬉しかった。

そう聞いただけで、少しだけ救われた気がした。

持つべきモノは友達だ。持論とは矛盾しているということくらいは自覚している。だがそう思わずにはいらなかった。こんな自分でも心配してくれる友人がいたのだ。

楓にとって『和美』という存在は『北沢楓』でいるための最後の砦だった。

和美がもしいなければ、恐らく家族が殺された時点で『北沢楓』は崩壊していただろう。

学校にも行く気はなくなっていただろうし、莫然としているけれどもっと状況は悪化していたかも知れない。

最後の砦だ。大切にしよう。

そう楓は思いながら通学路に行く。

慣れ。

教室に入ってみれば、誰一人として楓に注目する者はいなかった。先日までの『北沢楓は不幸な可哀想な女の子』的な空気は既に払拭されていた。流石はクラスに置いて、居ても居なくとも差し支えない換えない存在。見事に証明されている。そう自嘲気味に思えば、自然と口元が緩んでくる。

(つと)

教室の入り口で突っ立って微笑んでいれば相当妖しい人だ。

少し慌てて辺りを見渡す。幸い、誰も奇行を見ていた者はいないようだ。これも流石はクラスに置いて、居ても居なくとも差し支えない換えない存在だから為せる技か。

自嘲に自嘲を重ねれば、不思議と何だか本当に面白くなってきた。今度は微笑みを出るだけ押さえつけ、ポーカーフェイスを気取りながら、あちらこちらで談笑に耽るクラスメイトを縫うようにして自分の席へと座る。いつも時間ギリギリに来る神田はともかく、和美はまだ来ていないようだった。

(……和美は、まだね)

あの一件が起こる前は、楓もギリギリ登校派の一人だった。理由は何でもなし。ただ朝起きるのが苦手だったからである。今

となつては『起こしてくれる人』がいなくなつてしまつたし、必然的に『朝食を用意してくれる人』もいなくなつてしまつた。だから自力且つ朝食を用意しなければならぬという関係上、昔より早く起床しなければならなくなつたのだ。だから仕方がなく携帯のアイテムと、近所の商店街で安売りされていた目覚ましを数台纏めて購入、部屋の至る所に配置して何とか朝起きている、そんな状況だつた。

(そのおかげで少し早く登校出来るようになったんだけどね)

副産物、そう言つて良いのか悪いのか楓には判断しがたいが、少なくとも通学路を爆走する、という事態はなくなつていた。

「おはよ、楓」

ふと、声がする。

黒城和美である。

「おはよ」

「久しぶりに楓を見たような気がする」

「うん。……ゴメン」

「何で謝るの？」

「いや、心配かけたかな」って

「え？」

「神田から聞いた」

「そっか」

瞬間、全身を言い様のない違和感が貫く。

(なに、コレ……)

違和感。

何だろう、これは。

楓は顔を上げた。

そこに映つたのは、黒城和美。

(和美……?)

はて、黒城和美はこんな表情をする人間だつただろうか。

こんなに、邪気を孕んだ表情を

そして少女は紫衣を纏ふ

「楓？」

「え、あ」

瞬間、チャイムが鳴り、それとほぼ同時に担任教師が入ってきた。わだかまりを残したまま、ホームルームは始まった。

第一五譚 散華の咆哮（後書き）

誰かが囁いていた。この世界の向こうで。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第一六譚 効かない薬ばかり

授業態度はどうであれ、久しぶりに一時間もサボらずに授業を受けたからか、酷く疲れた。

「おかえり。今日は遅かったね」

リビングに入れば、少年はソファに埋まるように腰掛けていた。楓は鞆をテーブルの上に置く。

「そろそろ七時だけどさ、夕食はまだ？」

少年の声がする。

「何？」

疲れたから後にして欲しかった。

「夕食まだ？」

心の底から殺してやろうかと思った。

「うっさいからちよっと黙ってて」

「ね、お腹すいた」

「……餓死すれば？」

餓死してくれば楓が直接手を下すまでもない。

ある意味、最も効果的な殺し方かも知れない。餓死させると言うことは。

しかし、楓は驚いていた。

今、心身共に疲労している状態なのに、不思議と一族の仇である少年を殺す妙案を思い付いたのだ。どんなに疲れていても人殺しの方法だけは思い付く。どんなに疲れていても復讐のことなら思考はキレを取り戻す。これほどまでに北沢楓という人間は腐ってしまっただのか。楓はそう思うと冷笑せずにはいらなかった。

そして少女は紫衣を纏ふ

深夜。

今日は月がやけに綺麗だ、自宅の屋根に立っている楓は呑気に空を見上げる。

「良い夜だね。やっぱり夜には月がないと」

「今日は何するの？」

「鬼ごっこ」

「は？」

思わず、目が点になった。

「……鬼ごっこ？」

口から出た声はビックリするほど気の抜けたもの。

「そ。鬼ごっこ」

「あの、鬼ごっこ？」

「あの鬼ごっこ」

鬼ごっこ。

真意が掴めない。

「鬼ごっこって、鬼に捕まらないように逃げるアレ？」

「そ。ルールは簡単だよ」

少年は人差し指を顔の横で立てて、

「時間無制限。朝でも昼でも関係なし。楓ちゃんの勝利条件はオレにタッチすること。楓ちゃんがオレにタッチできるまで続くから覚悟してね。場所はこの街全域で、とりあえず『紫衣』は禁止で、楓ちゃんの成長次第で『紫衣』を使っても良いことにするから。ね、本当に鬼ごっこでしょ？」

少年は楽しそうに、

「オレは頑張つて楓ちゃんから逃げ続ける。あ、別に隠れたりはないよ。今まで通り、楓ちゃんの家において楓ちゃんが作ってくれたご飯食べるからさ。どんな手段使っても良いからオレに触れれば楓

ちゃんの勝ち」

「　　どんな手段使ってもいいの？」

「　　いいよ」

「寝込み襲っても？」

「うん」

「痺れ毒盛っても？」

「毒を手に入れられればね」

少年は朗らかに笑っていた。

「じゃあそついうことで、世界で最も自由な鬼ごつこの始まり始まり」

月光がネオンを見下ろす。

この街ではまだ商業区のみであるが、高層ビルの屋上を鋭いスピードで風もなく移動する影が一つ。

(ツ！)

フラフラと、見ていて危なっかしく着地したのは高層ビルの屋上、給水タンクの上だった。

(速い……)

鬼ごつこ(レッスン)が開始されて早一時間。

ルールは単純明快。互いに『紫衣』の使用は一切禁止。逃げる『追捕使』の少年を全力で楓が追い掛け、彼の身体に触れたら楓の勝ち。そして鬼ごつこは楓が少年を捕まえるまで続く。楓と少年のスビードと戦略のぶつかり合いの勝負と言う構図だ。

露骨に呼吸を乱しながら、楓は給水タンクの上でもう一つの影を補足しようと目を凝らす。

が。

(ムカツク)

凝らすまでもなかった。さつきから挑発するように楓の周囲を動き回っている影。その動きは間違いないく『挑発』だ。

(ちっ)

楓が比較的自由に『飛べる』ようになってから五日経った。

初日は確かに怖かった。元々運動はあまり得意ではなかった自分が、ちよつとした意識の変化一つで助走もなく一度の跳躍だけで二階建て住居の屋根まで届くような超人的な身体能力を手に入れてしまったのだ。勿論、最初に『飛べた』ときは空中で激しく動揺して見事に着地に失敗した。

( 世界の常識は自分が創るモノ、だっけ )

初めて少年にその言葉を告げられた時、何が何だかさッパリ分からなかったけれど、それはダイレクトに『飛ぶため』のコツだった。

世界の常識は自分が創るモノ。

つまり『イメージ』することなのだ。

私は飛べる。

絶対に飛べる。

華麗な着地を決められる。

と言った具合に、自己暗示とも言える強烈な『イメージ』を脳に焼き付けることがさえできれば簡単に一般的な人間の身体能力を超えることができた。楓も『イメージ』するコツを掴んでしまったら後は簡単だった。確かに若干の恐怖も根強く心の中に残っているけれども、今では一度にたくさんの距離を移動出来るようになった。

ちなみに少年曰く、この超人的身体能力はアカシックレコードに記されていない『異常因子』だからこそその技らしい。

「ねえ、仕掛けてこないとつまらないよ」

いつの間にか給水タンクの下に少年、彼は気持ちつまらなそうな表情を浮かべて楓を見上げている。

「うっさい。ってか、ちゃんと飛べるようになって一週間も経ってないのに捉えられるわけないと思うんですけど？」

そして少女は紫衣を纏ふ

「でも一週間も経ってないのにそこまでの速力出せるんだったら出来だと思っよ、楓ちゃん」

励ましのつもりだろうか。

しかしながらその一言は癪に障る。

思うがまま、ギリギリと利き足に力を溜めて、

「死ねッ！」

バネのように爆発させれば、身体は人間とは思えないほどの跳躍力で少年目掛けて弾丸のように飛ぶ。その衝撃で楓が立っていた給水タンクが轟音を立てて破裂、大量の水が投げ出されるが気に止めることはない。

「うん。上出来だよ」

派手な音を立てて、コンクリートが砕け、破片の大きさに拘わらず舞い上がる。

「むかつく」

「いやいや、凄いつて」

爆心地の中心で、楓は背から聞こえる少年の喝采を鬱陶しそうに聞き流し、もう一度踏み切った。

陽光が降り注ぐ。

眠い。

「サボリ姫」

「人のこと言えたクチ？」

枕にしていた自分の学生鞆を漁って、携帯で時間を見れば、三校時の最中らしい。

連日、夜な夜な繰り広げられる少年との鬼ごっこは予想以上に体力を楓からごっそり奪い去っていく。ちなみに現在も鬼ごっこは継

続中だ。が、昼間にあんな派手な立ち回りをするわけにもいかない。だから自然と『派手な鬼ごっこ』は夜に限られ、昼間は微妙な駆け引きが重要となるようだ。

何はともあれ『飛ぶ』ことは想像以上に体力を消耗する。

別に授業中寝ることに抵抗はない。けれど授業中寝れば間違いないからあまり好きではなかった。ならば授業はさつさとパスして誰も居ない所で横になって寝た方がよっぽど効率が良い、そう楓は判断した。授業をサボっている理由なんてそんなもんなのだ。

「今授業中でしょ？ アンタこそサボっちゃヤバイんじゃないの？」  
「さあね。サボるの大好きだからな」

ダイスキ。

その言葉が楓の心の中で何度も何度も響く。

もしその言葉が自分だけのモノになったのなら、どれだけ救われるだろうと楓は思った。

「 あっそ」

「そっけねーな」

神田は飄々と呟く。本当に、何かと必死になって藻掻いているコチラが馬鹿みたいに思えてならなかった。

思えば、昔ながら一癖も二癖もあるような男だった。

幼、小、中と。ウンザリするほど遊ばれた。

適当な嘘で楓を騙すことなんて日常茶飯事。かと言って直接的な騙し方はしないのだ。どうやら神田裕太という男は『どの線を越えれば本気で傷付くか』を弁えているらしく、楓が今まで神田の遊びでダメージを負ったことは一度もなかった。けれどその良く言えば手加減をして、悪く言えばねちねちと仕掛けてくる攻め方は本当にタチが悪い。最近では毎回騙されるコチラもどうかと思うが。

無論、楓も黙っていたわけではない。

だが役者が違うのだ。いつも何故だか行動が先読みされて、待ち伏せを受けて潰される。未だ嘗て楓が神田を出し抜いたことなんて

一度もなかった。

何で、何でこんなヤツなんだろうと楓は思う。

何で。何が楽しくてこんなヤツに惹かれた

「なあ、姫」

「ん？」

「大分、表情良くなったな」

何を言い出すかと思った。

「え？」

「『あれ』以来、姫は死んでたからさ」

「そうかな？」

何だか嬉しくなった。

「ま、相変わらず間抜けヅラなのは変わんねーけど」

前言、撤回。

「酷くない？ それ」

「酷くねー」

笑いながら、神田はワシヤワシヤと楓の頭を撫で回す。

「ちょ、バカ！」

心地が良かった。

心なしか、屋上を撫でる風も柔らかい。

そんな気さえした。

第一六譚 効かない薬ばかり（後書き）

日溜まりは暖かい。人を和ませ、幸せにする。しかし誰も忘れて  
いるのだ。陽があつてこそその日溜まりだと言つことを。そして陽は  
いずれ沈むと言つことを。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第一七譚 そこは暖かくて

神田とはしばらく屋上で他愛のない話をしていたが、三校時終了のチャイムと同時に神田は授業に戻るらしく、屋上を降りていた。

楓はこれからどうすべきか少し悩んだ。

今から授業に出るのも煩わしいだろう。昼休みの喧騒に紛れて帰ることにした。誰も文句は言うまい。本当にサボりが板に付いてきたなと思う。せつせと授業を受けていたころの自分が馬鹿みたいに思えて仕方ない。

それにしても、眠い。

やはり連日深夜の『鬼ごっこ』が祟っているのだろう。何気に限界だったからもう一眠りすることにして、

次に気が付いたら既に昼休みだった。

喧騒が聞こえる。

一伸びして思う。

帰るんだったら今だろう。

階段を飛ぶように下りて、足早に昇降口へと足を進める。擦れ違ふ人たちの怪訝な顔は気にしない。どうでもいい。さっさと通り過ぎてしまえば良いだけのこと。

そして少女は紫衣を纏ふ

と。

楓は眼を細めた。

見知った顔が、正面の雑踏に紛れて一つある事に気付いた。その顔は楓に気付くと楽しそうに駆け寄ってくる。

仕方なかった。

無視するわけにも気付かないフリをするわけにもいかなかった。

楓は出来るだけ笑顔を作って、

「和美」

「久しぶり」

「久しぶり？ 久しぶりって昨日会ったじゃん？」

「それでも久しぶりは久しぶりでしょ？」

まさか廊下でばったり黒城和美と出会うなんて想定外だった。

（帰りたかったのに……）

和美にばれないように溜め息を付いて、

（あっ、そうだった。この廊下は学食への近道だったんだ……）

しばらく学食を利用してなかったからすっかり見落としていた。

和美が購買派ではなくて学食派だったのだ。ある意味致命的な失念かもしれない。

まあ、忘れた自分が悪いのだ。

本当に最近まで、それこそ『あの事件』が起こる直前まで一緒にこの廊下を通って昼は学食で取っていたのに。そんなことすら忘れてしまっていた自分に何だか嫌気が差してくる。理由は、よく分からないけれども。

「ね、今から学食？」

「ん、ああ、うん」

咄嗟に嘘で取り繕って、さり気なく持っていた学生鞆を背中へと隠す。どうやら和美は楓が学生鞆を持っていたことに気付いていなかったらしい。

「じゃあ、久しぶりに今から二人で行かない？」

和美にそう言われて断るわけにもいかず。

楓は素直に頷くことにした。

「むう、混んでるね」

「確かに」

半ば圧倒されたように、学食の食券販売スペースで、食券を調達しながら楓と和美はやや呆然と学食を見渡す。

昼休み真っ直中のこの時間、やっぱりと言うか楓たちの想像を超えて学食は賑やかで混み合っていた。窓側の一角でどつと笑いが起こったと思えば、中央のテーブルではふざけ合って馬鹿みたいに言い合っている姿が見られる。楓が現在ぶち当たっている事態に比べれば、何とまあ本当に平和な一時だなと思う。

（そう言えば『昔』はいつもさっさと来てさっさと帰ってたっけ）  
何だか遠い過去の出来事だったように感じる。

「いこ？」

「あ、うん」

空席でも見つけたのだろうか、少し急ぎ足で和美は喧騒の中を進んでいく。彼女に従って進めば、最も調理場から離れている壁際のテーブルがまるで穴場のようにぽつんと二席空いていた。

「楓と昼食食べるの久しぶり」

和美の正面に座った楓に対して、まるで自分自身に言い聞かせるように呟く。

「うん。ゴメンね、いろいろあったからさ」

「ダイジョウブ、ダイジョウブ。無理しないで良いよ。それよりさ、勉強とか大丈夫なの？」

「うん。何とかね」

流石は優等生と言うべきか。

楓だつたらとてもじゃないが勉強関連の話題を切り出すことは出来ないだろう。昨夜のバラエティー番組の話題を切り出すのが関の山だ。

「家は？」

「とりあえず一人暮らし」

「淋しくない？」

「ちよつと、幼稚園児じゃないんだから！」

「あははははは！」

「笑うな」

「ゴメンゴメン。で、食事とか、どうしてんの？」

「食事？」

「コンビニ？」

「食事はいつも適当にちゃちゃつと。昔ね、ちよつと料理教わったことあるから何とかなってる」

「なーんだ。コンビニ弁当じゃないんだ」

「そんなことしたらすぐ破産しちゃうつて。コンビニ弁当よりも自炊した方がよっぽど安上がりなの。今は何とかお金出してくれてる人が居るから大丈夫だけど、いつそれが止まるかも分からないし。貯金はやつぱり大事」

「へ〜。何か、主婦みたい」

「もうそんな感じかも。一人暮らしもなかなか気楽でいいよ。」

朝起きるのが辛いだけで」

茶化し合うようなテンションでお互い笑い合う。

楽しかった。

久しぶりに『楽しい』と思えた。本当に、心からそう思える。

何もなかった昔に戻ったようにポンポンと会話が弾んでいつて、いつの間にか雑談に夢中になっていった。両親が『蒸発』して以来、まともに笑った記憶もないし、辛いことや悲しいことをすっかり忘れて会話したのはこれが初めてだった。口が止まらない、というのが正直なところで次から次へと言葉が生まれていく。

「元氣そうで良かったよ、ホント」

「元氣じゃないとやってけないしね。割り切った方が良いし、下手に氣遣いされる方が辛かったりするし」

「へ〜。そんなもん？」

「そんなもん」

「ま、良かった。その様子じゃ上手くいってるみたいだしね」

「？」

「神田」

「……………」

「楓？」

「なんでそこに神田が出てくんのか？」

恨めしそうに楓が言えば、当の和美はとても楽しそうに、

「知ってる？ 意外と人気あるんだよ？」

「だから？」

そんなことは百も承知だ。

神田はいつだってクラスの中心だった。そんな神田を放っておくほど周囲は鈍くない。

中学の頃はとつかえひつかえ付き合っていた。まあ、結局みんな長続きしないですぐ別れたらしいのだが、元々軽く備わっているあのルックスが女を引き寄せていたのだ。天然の女たらしかも知れない。

確かに、氣に食わなかった。

けれど、所詮それは『見た目』に群がっているだけで、真に神田を理解しているのは自分だという極めて身勝手な自負があったから何とか汚い気持ちを抑えることができた。

恋敵は、多い。

結局自分は幼馴染でしかない。

ハードルは馬鹿みたいに高い。

どうしてだろうと最近良く思う。

何でこんなハードルが高くて面倒な人に惹かれてしまったんだろ

う。

一応、今のところ神田に一番近いのは自分だ。中学までは女をとつかえひっかえだったが、どうしたことか高校に入学してからは彼女を作らなくなった。だからその座が戻ってきたのだ。かと言って幼馴染みの自分が恋愛対象になつたわけではない。基本的に自分は恋愛対象外。所詮は『北沢楓』なのだ。誰が好き好んで影の薄い亡霊女を好きになるだろうか。

本当に不毛だと楓は深く溜め息を吐いた。

「他の誰かに取られないように応援してるから頑張りなさいってエールなのですよ、楓ちゃん」

「どうでもいいくせに……」

「どーでも良くないって。私にとっても重大な問題なんだから」

「何で？」

「何でもよ」

「？」

言い淀んだかと思えば、直ぐさま和美は二の句を継げた。

「まあ、タイミングってヤツがあるのよ」

和美は遠い目をして、静かに告げる。もしかしてそれは和美の実体験かもしれない。

「タイミング？」

「そ。言うタイミング」

「言うタイミングか……」

「じっくり行けばいいじゃん」

ふと、外を見れば快晴。

和美の声が心地よく耳を打つ。

久しぶりの邪気のない会話を楓は存分に味わっていた。

和美との談笑に触発されたのか、出ないはずの数学の授業に出てしまった。

神田はサボるだろうと高を括っていたらしい。和美と共に教室に姿を見せた楓に驚いていたけれど、してやったりで悪い気はしなかった。ざまあみろ、という感じである。

ちなみに、授業内容はさっぱり意味不明だった。

授業に出ていないから当たり前と言えば当たり前なのだが、少しへこんだ。当てられたらどうしようかと戦々恐々だったけれど、数学教師は楓の事情を少なからず把握していたのか、楓を指名して黒板に問題を解かせる、なんてことはなかった。それはただ授業に出て座っているだけでいい、そんな教師の無言のメッセージのように受け取れなくもなかったけれど、まあ楓にはどうでも良かった。

放課後。

「じゃあ部活かからね」

「うん。じゃあ」

簡単な挨拶をすれば、和美は慌ただしく教室を出て行った。

三年生が引退した今、これからは彼女たちが部活を引っ張っている。たり、後輩の指導に当たったりと何かと忙しそうだ。

（部活、か）

部活。

そのワードに結びついてくるのは描きかけの絵。後少しで完成だというのに、ほっとかかれているのは忍びなく思えてきた楓は、久しぶりに美術室へと行くこうと思った。

第一七譚　そこは暖かくて（後書き）

光があるから闇は生まれる。希望があるから絶望が生まれる。表があるから裏が生まれる。真実があるから偽りが生まれる。全ては表裏一体、コインの表裏。そしてそれらを分かつ境界は、非情なまでも淡く、脆いのだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第一八譚 現実と偽りの差

美術室は第三校舎の三階にある。

第三校舎は別名『オバケ屋敷』と呼ばれ、基本的には誰も近付かない。それに『利用率が低い特別教室』を集めていることも手伝って、ひっそりと淋しい感じの校舎である。

楓が思うに、第三校舎の階段はボロい。

所々塗装は剥げ落ち、天井にぶら下がっている『何だか白くてポロポロした物』は（あくまで楓の推測だが）アスベスト。そろそろあらゆる観点から考えて、建て替えた方が良いのでは、と楓は思いながら一人階段を登っていく。

それにしても静かだ。

楓の靴音しか聞こえてこない。

ここまで静まりかえるのもどうかと思う。そこまで七不思議が怖いのだろうか。

楓だって七不思議を気にしていないわけではない。

入学した当初はこの第三校舎に纏わるいろいろな噂を耳にして、おっかなびっくり美術室に通う毎日だったけれど直に慣れてしまった。それでも一応、廊下の電気は常に付けているし、出来るだけ暗くならないうちに美術室から出るようにしている。その甲斐あってかこの二年間、一度も七不思議にあるような光景（踊り場の天井から血が降ってくる等）には遭遇したことがない。

（怖いと言えば、怖いんだけど……）

怖いと言うよりは、不安だろう。

得体の知れない物に対する不安と言うモノは、なかなか払拭することが難しいのだ。

今はもし何かあったら『紫衣』という対抗手段があるけれど、果

そして少女は紫衣を纏ふ

そして少女は紫衣を纏ふ

たして幽霊なんてモノに物理攻撃が利くのだろうか。多分、俗説から考えてみればスカツとなるだろうから頼りに出来ない。楓は今日も早く帰ろうと心に決めて、

(?)

二階と三階、その間に設けられている踊り場でふと止まる。

「い……の……」

「……いの。どう……誰……来ない……って……」

(……声?)

思わず息を殺す。

気配を消し、念のため手の中に最小化させた大鎌をスタンバイ。不測の事態に備える。まさかこんなところで『鬼ごっこ』で培われたスキルが活躍するとは思わなかった。

普段生徒があまり立ち入ることがない第三校舎だ。

なのに声が反響している。

二人分、しかも耳にしたことがあるようでないような、そんな声。そりゃ校舎なんだから人が居たってなんら不思議はない。が、第三校舎に通い慣れているからこそ、不審に思う。

一体、誰だろうか。

息を殺し、感覚を研ぎ澄まして、

(ああ)

一気に脱力した。

感覚を研ぎ澄ませてみればなんてことのない。

男と女。

どうやら恋人らしい。大方事態は把握できた。

会話の内容は途切れ途切れだったが、聞き取れないこともない。会話内容なんてジグゾーパズルの要領で簡単に予測できる。

(こんな所でイチャつかないでよ……)

楓は思わず肩を落とした。

普段は人気のない第三校舎だが、裏を返せば格好の逢瀬の場となるのだ。

(むづ)

気まづくなるのと同時に、何だか腹が立ってきた。

(これから集中したいのに)

美術室は三階だ。だが厄介なことに三階の廊下でイチャついていられない。堂々と足音を立てて彼らの目の前を通って行けばいいのだが、中途半端に気が引けてしまう。

(どうしよう)

真剣に悩み始めた楓だったが、

その悩みはすぐに消えた。

そして少女は紫衣を纏ふ

「ね……もう……浮気し……ダメ……よ?」

「だ……らア……浮気じゃ……え……。あん……優等生女

……より……の方……ずっと……良いか……」

(え?)

壁に背中を擦るように、階段を出来るだけ音を立てないよう努力

しながら、楓は階段をギリギリ彼らに気付かれないだろう地点まで登れば、会話内容がはつきりと聞こえてくる。

「でも、香奈からデートしてたって聞いたよ」

「だからな、アイツが迫ってきたんだよ。大体さ、冷静になって考えてみるって。俺がお前を置いて二組の黒城なんか走るわけねえだろ」

聞き覚えのある名前に、楓の心が跳ねた。

「ホント？？」

「ああ。誓つよ。だってさアイツ相当ヤバイよ。俺が彼女いるからお前とは付き合えないって言ったら逆ギレしやがってさ、もうマジで焦った。清楚な優等生って思ってたけど相当な猫かぶりだよ、ありゃ」

心が、荒れる。

心臓が、握り締められらような感覚が楓を苛んでいく。

「あゝ。そんな噂聞いたことあるな。実は相当遊び好きらしいっていろんな男とヤツてるらしいし」

「マジかよ……」

「でね、今は同じクラスの神田ってヤツがお気に入りに入りなんだって」

心が、軋んだ。

思わぬ名前だった。

楓は硬直する。

「神田ね」

「知り合い？」

「アイツと中学一緒だったからさ。中学時代からモテてさ」

突如として激しい感情。

熱となって全身を駆け巡る。

それはあまりに激しい感情で、楓は抑える術を知らない。

「噂だとね、神田は乗り気じゃないみたいなんだけどね。何度も黒城さんって言い寄ってるらしいよ」。黒城も結構可愛いからさ、神

田ってヤツもすぐに落ちでしょ」

パキン。

そんな音がしたような気がした。

何かが砕けた。確実に、砕け散った。

自分自身を構成する主要因が『北沢楓』からするりと抜け落ちて

しまったような、膨大な喪失感と虚無感。

あの気遣いは何だったの？

あの言葉は何だったの？

あの笑顔は？

あの言葉の真意は？

「

ッ

！！！！！」

まやかしだったのか。

感じた『楽しい』は、

浸った『心地よさ』は、

全部、和美のお芝居の元で成り立っていたのか。

まやかしの希望だったと言うのだろうか。

崩れる。

崩れて、消えていく。

そんな中、莫然と楓は思う。

どこかで疑っていたのかも知れない、と。

無意識に、潜在的に。

思えば確かにおかしかった。

和美のような文武両道で将来有望な才能溢れる人物が自分と連むのはおかしいのだ。住む世界や人間としてのスペックが根本的に違う二人だ。特別な理由がなければいっしょにいられるはずがない。

本当は分かっていたのかもしれない。

分かっていたのに、盲目的に、根拠のない事実にしがみついで。

今までずっと気付かないフリをしていたのだろう。ずっと直視したくない部分を封印して、勝手に『和美は本当に楓のことを案じてい

る』と決め付けていた。思い込もうとしていた。

楓のことを心配してくれた和美。

それは全部和美が利益を得るために演じていたものだったとしたら。

楓が『黒城和美』だと認識していたのは全部偽物だったとしたら。

「わ、急に抱き付くなって！」

「良かった〜。コウがあんな人でなしに取られなくて〜」  
人でなし。

その言葉がグルグルと楓の頭の中を巡っていく。

すると、壁伝いに楓はへたり込む。

身体を支えていることが辛い。横になってしまいたい。

（人でなし……）

これは、 報い、かも知れない。

今まで楓がクラスメイトを始め、全てを見下していたその行為に、  
神様からの天罰が下ったのかも知れない。

ボンヤリとしか動かない頭の中、楓は自嘲気味に、嗤っていた。

何処からこの嗤いが生まれてくるかなんて分からない。

けれど、生まれてしまったから仕方がない。

嗤う。

嗤っていた。

狂ったように。

声も出さず。

淡々と。

第一八譚 現実と偽りの差（後書き）

もう崩壊は止められない。

そして少女は紫衣を纏ふ

「昨夜『異常因子』を捕捉した。早々に始末して貰おうか」

「場所は？」

「所沢」

「名前は？」

「大月ミナミ。性別は女。年齢は二四。写真はここに置いておく」

「ふうん」

「どうした？」

「いやね、せっかくだし楓ちゃんの教材になつて貰おうかなつて」

「成る程。北沢楓に『追捕使』を見せるか」

「そんなところかな」

「順調か？」

「うん。順風満帆。いざとなつたら強攻策をとるつもりだったんだけど、予想外だよ。やっぱり楓ちゃんはお師匠様の生まれ変わりだけあるよ。天才だ。すぐに『紫衣』を纏えるようになつちやうし、直接的なヒント与えなくても『飛べる』ようになつちやうだし、成長が速いよ。あの様子じゃオレに手が届く日も近いかもね」

「結構なこと。ようやく貴様もお役御免だな」

「その件なんだけどね、オレは楓ちゃんに殺されるつもりはないから」

「な、に？」

「意味はそのままだつて。オレは死なない。誰が何と言おうとオレは死なないよ。オレがもし死んじやったらさ、楓ちゃんと永遠の世を『追捕使』として渡るのがダメになつちやうだろ？」

「貴様、まだそんな妄言を」

「『押領使』の分際でさ、オレに意見しないでよ。『押領使』はた

そして少女は紫衣を纏ふ

だオレに従っていいればいいの」

「しかしだな、」

「うるさいな」。ホントは『押領使』も分かってるでしょ？ オレが楓ちゃんを愛しているように、楓ちゃんだってオレのことを愛してるんだ。愛し合う二人がいつしよになることの何処が悪いわけ？」

「ほう。北沢楓はお前を好いているのか」

「そうだよ。それ以上の理由があるの？」

「確証は得たのか？」

「確証？ そんなのに何の意味があるの？ 楓ちゃんがお師匠様の生まれ変わり。だからオレを想ってくれてるに決まってるじゃん」

「生まれ変わり、か」

「お師匠様は俺を愛してくれた。あの時は自分のことで精一杯だったから気付けなかつたけどさ、オレもお師匠様のことが大好きだった。だからオレが楓ちゃんを愛しているように、楓ちゃんだってオレのことを愛してるんだよ。楓ちゃんはおレを殺すコトなんて望まないよ。オレだって楓ちゃんを殺すことなんてできない。知ってるだろ、それくらい？」

「……、」

「いい？ オレと楓ちゃんは結ばれる運命にあるの。楓ちゃんはオレにとつて運命の人。『追捕使』になって、オレは楓ちゃんを、楓ちゃんはオレを永遠に守り、そして生き続ける。例えどんなことが起ころうとも絶対オレたちの絆に愛は壊せない。そして二人はさ、永遠の絆と愛を持って、この世を永遠に渡り、踊るんだ」

「……それは、誠か？」

「本当さ。オレの想いを楓ちゃんは受け止めてくれる。絶対ね。楓ちゃんがまだ素っ気ないのは自分の本当の気持ちに気付いていないだけ。オレの想い全部をまだ知らないだけさ」

「しかしな、北沢楓の一族を手にかけたのは他ならぬお前だぞ？

一族の仇であるお前に愛なんて抱けるものか？」

「そんなの知らないよ。楓ちゃんの家系の生死とか誰が殺したとか

殺さなかったこととかホントどうでもいい。そんなことでオレたちの愛と絆は壊れない。大体ね、楓ちゃんはそんな家族を殺されたくらいじゃオレのことを嫌いになったりはしないよ。楓ちゃんはオレがいるだけで幸せなんだ。相思相愛なの！寧ろ感謝してるんじゃないかな。オレの愛を、俺に対する楓ちゃんの愛に気付かせてくれた、それは家族が死んだおかげだって」

「そこまで言うのなら、お前に一任しよう」

「へへ。ありがとう！」

「ところで、だ」

「？」

「あのような出費をして良かったのか？」

「出費？　ああ、テレビのこと？」

「貴様が受け継いできた金をどのように使うかは勝手だが、そろそろ残金を考えることだな」

「確かに。……そろそろマズイかな。楓ちゃん的生活費もオレが出してるし」

「補充するの？」

「そうだね。二〇〇万くらいでいいや。手配して、あ。そうだ」

「どうした？」

「良いこと思い付いちゃった」

「何をしでかすつもりだ？」

「お金の補填の仕方を教えて上げようと思ってさ」

「確かにそれは重要なことだが、今は『異常因子』追討が最優先だ」

「そんなこと言うなよ」

「『追捕使』の使命は『異常因子』の抹殺だ」

「まあ確かにそうだけど、後進の指導も大切だと思わない？」

異常とは、果たして誰が決めるモノだろうか。  
異常とは、何だろうか。

異常。

正常と異なるもの。

では、果たして正常とは？

正常と異常。

この二つ、果たして差はあるのだろうか。

あったとしたら、どんな差なのだろう。

もし、この二つに差があったとして、一体誰がその『差』を分かつのだろうか。

一人の少年と一人の少女は動き始めた。

正常な方向へか、はたまた異常な方向へか。

決めるのは、一体誰なのだろうか。

そして少女は紫衣を纏ふ

行間 二(後書き)

現実逃避はもう終わり。

## 第一九譚　そして少年は愛を謳った

恐らく、世界で最も壮大で自由な鬼ごっこ。

本格的に『紫衣』を纏えるようになって二週間あまりが過ぎた。十二月も半ばに差し掛かり、そろそろ本格的に寒くなってくる。二週間という時間はかなり大きい。

出来ないことが当たり前のようになって出来るようになって、心を落ち着かせることができるようになっていたりする。

大分、飛ぶことにも慣れてきた。

だからといって、まだまだ少年には届かない。

だからといって、諦めるつもりは毛頭なかった。

「つやあッ!」

深夜。

闇より深い黒い影二つが、高層ビルの屋上を縦横無尽に飛び回る。

影の一方、少女は身の丈ほどの大鎌を振り抜く。

対してもう一方の影が大鎌の餌食となることはない。瞬時にそして最小限の動作で。易々と大鎌を躲し続け、そして別のビルに飛び移る。

(ち、)

少女は舌打ちせずにはいられないが、同時に追撃するか一端退くか、考察する。

(よし)

蹴る。

一瞬で少年の間合いに侵入し、大鎌で薙ぎ払う。

大鎌が風を伴って唸る。

湾曲した戦慄の刃が、月華に照らされて一瞬煌めいた。

が、大鎌はもう少しの所で標的を逃がし、淋しく空を切った。

そして少女は紫衣を纏ふ

少女は身の丈ほどの大鎌を振り、手元に戻す。そのまま少年の姿を感覚で察知し、即座に追撃に移るためにその場を力強く踏み切った。

少年もただそんな少女の様子を静観しているわけではない。発見されたと理解したや否や、人間とは思えないような跳躍力で少女の追撃を華麗に躲していく。

（ちっ！）

この局面、この攻防。

斬撃は空を切り続け、尚かつ少年に追いつくことすら叶わない。少女の完敗だったが、諦めない。屋上に設置されている設備で身を隠しながら、少年の気配を探る。今の今まで、人間離れた超人的な速度で駆け回っていたというのに、一片の呼吸の乱れはなかった。（っ！）

見つけた。

瞬間的に把握した少女だが、その表情は即座に戦慄に染まった。

瞬間、腹から突き上げるような衝撃。

少女が回避行動を取るより早く、爆音が彼女のいる屋上を覆い尽くした。

「く、痛ッ」

ゴロゴロと地面を転がって、何とか爆風と衝撃から最低限逃れた。咄嗟に大鎌で急所を守ったけれど、衝撃から身を庇い切れることはできなかった。ズキンと左肩に右脚が痛む。鎌を振る利き腕を守れたことは大きな収穫だが、利き足がやられたのは大きなマイナスだ。これでは大幅に移動性が落ちてしまう。

しかし、少女は前を向く。

飛び込んできたのは炎上する屋上施設とその残骸、そして炎上する残骸に立つ一人の少年。敵から目を離さない。ここ数日の『レスン』で学んだこと。経験則だ。

だが、少女は思わず目を疑う。

「ちよ、なんでアンタがそれ持ってるのよ！ ルールじゃ『紫衣』

そして少女は紫衣を纏ふ

は私だけ解禁されてるはずでしょ！」

痛みを堪えながら、少女は声を張り上げた。

すると少年は自分の手元を一瞥して、

「そうだけども、いい加減避けるだけじゃつまんなくなっちゃってさ」

「ふざけないで！」

フラフラと立ち上がり、少女は大鎌を構えた。

「大丈夫だって。ちゃんと手加減するからね。それに楓ちゃんはもうオレが『紫衣』を使ってもいいレベルに来てる。実践を学ぶには模擬戦じゃなくて実戦が一番つてね」

少年は見せつけるように銀を煌めかせ、音もなく飛んだ。

（ホント、自分勝手なんだからッ！）  
上。

少女はギリギリまで落下してくる気配を引き付けて、バックステップで躲せば、少年はコンクリートをまき散らせ、やや崩れた体勢で着地、

（崩れた！）

好機と見た少女は一気に少年との間合いを詰め、全力で大鎌を振り下ろした。

渾身の一撃。

闇夜に甲高い金属音が鳴り響く。

「さすが」

その声に少女はやや驚く。

振り下ろした大鎌の下、湾曲し、首を刈り取るうとしていた大鎌の軌道は見事に刀によって阻まれていた。少女は今の一撃がほぼ自分が出せる全力だったが、少年との実力差を考慮すれば予想通りと言ったところではあるのだが。

たらりと唾然としている少女の額から、汗が垂れ落ちる。

「でも、まだ軽いかな」

直後、ぐわんと膨大な力の流れが少女を飲み込んだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

「あ、わ」

気付いた時には既に宙を舞っていた。追って、少女は先程の力が自分の身体を宙に投げ出させた、という事実を把握し、最終的に敵の攻撃がこの程度で終わってしまうわけがないと結論づける。だから迎撃態勢を

「あ」

刹那、天籟。

直後、前方に影、出現。

影、その手には銀の刃、それ即ち、刀。

「くっ……」

空中では流石に身動きが取れない。

ジリジリと耳障りな目覚まし時計の音が部屋いっぱいに響き渡った。

(朝、か)

楓は目覚ましの音に顔を引きつらせながら、手探りで枕元の目覚まし時計を発見し、目覚まし時計の上部を叩く。

(あゝ、これは『最初』だった)

音が止んでホツと一息付いている場合ではない。楓はむっくり身を起こすと、唐突に身体の節々や筋肉がズキズキと痛み出した。

(ん)

原因は簡単に思い浮かぶ。

昨晚肉体を酷使したことで、あの峰打ちだ。原因はそれしかない。

(まだ、身体が慣れてないのか……)

呆然と楓は思う。少年曰く、身体が徐々に適応して長時間あの異常な運動量でも全く問題なくなるというが、まだその兆候は見られ

そして少女は紫衣を纏ふ

ない。楓はあの少年をいまいち信用できないから尚更である。

部屋中至る所にセットしてある目覚まし時計を切っていく。一度『彼ら』が動き出せば、近所迷惑の何物でもない轟音が覆い尽くしてしまう。やっぱり、騒音問題で近所さんたちから村八分にされるのはなかなかご勘弁願いたいモノなのだ。

「はあああ~~~~~」

欠伸を一つ。

重たい身体を引きずる様にして、楓はクローゼットに向かった。

学校に行くつもりはなかった。

「ねえ、楓ちゃん」

楓が作った朝食セット（純和風）を突きながら、少年が言う。

いつからか、この『追捕使』の少年と寝食を共にすることになれてしまった。一族の仇であるにも拘わらず、だ。ちなみに少年は楓という『異常因子』を見つけた時点で、居候するつもりだったらしい。

そもそも『追捕使』という存在は社会から、万物を統制しているアカシックレコードからも完全に外れた究極のアウトローだ。この世界に一片の居場所もないから、定住はせずに『異常因子』を求めて世界中を放浪しているらしい。だから宿探しも酷く力尽くな手法を取るそうだ。この少年の話によると、まず『異常因子』を発見し、殺す。そしてその『異常因子』の家を乗っ取り、次の『異常因子』を発見までその家を拠点に待機する、という手段を取っているらしい。明らかに犯罪行為で、警察に検挙されそうなものだが、どうやらその辺にもいろいろカラクリがありそうである。

「楓ちゃん、聞いてる？」



られたテレビは意外なことに彼によって弁償された。それも前のようなブラウン管テレビじゃなくて、五〇インチもの最新式ワンセグ対応のプラズマテレビ。恐らく定価数十万円するだろうこのテレビを少年が最初に持ってきたときは本当に驚いた。一体全体何処にそんな金を持っているのかさっぱりだったし、この少年のことだからもしかしたら何処かで強奪してきた盗品なのかもしれない。当初は何だか薄気味悪くて使うのに躊躇われたが、今は使わなければ損、という考えが先行してしまっている。そんなわけで今では逆に無下に少年を追及することは躊躇われている有り様だった。

(まあ、うん。テレビなんて買えなかったし……)

北沢家には残念ながら貯金がない。

それは北沢家の台所事情は借金塗れの火の車だから当たり前と言えは当たり前だったが、しかし事態はそんなに『借金どうしようかな』と呑気に考えているほど余裕はなかった。何せ生活費がないのだ。テレビどころか食べていけない。光熱費だって危うい。一時期はどうせ一人暮らしみたいなものだから学校が終わってからバイトでもすれば生活費ぐらい何とかなるだろうと樂觀視していたのだが、毎晩の『レッスン』がそれを木っ端微塵に打ち砕いた。想像以上に『レッスン』はハードだった。なので学業、バイト『レッスン』を並行するプランは現実味に欠けた。

そんなどうしようもない現実から救ってくれたのは、他ならぬこの少年だ。

今、楓が金銭問題を気にせずに日常生活を支障なく生活を送れているのは、この少年が援助があるからこそである。仇である人間に養ってもらっているのは何だか釈然としないが、こればかりは仕方なかった。

(どこからそんな金が……)

ふと、疑問が湧く。

少年を見遣れば、焼き魚に夢中になっている。

(はあ)

そして少女は紫衣を纏ふ

世の中、分からないことだらけだ。  
強引にそう結論づけて、楓はみそ汁を啜る。

第一九譚　そして少年は愛を謳った（後書き）

い。邪魔ならば排除すればいい。気に入らないのなら壊してしまえばいい。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第二〇譚 サークスの入場券

ケチャップがない。

外出したのはそんな理由だった。

(寒む……)

全く何が楽しくてこの寒い中、ケチャップを買いに最寄りのスーパーまで行かなくてはいけないのだろうか。      と軽く悲劇のヒロインを気取って嘆いてみるが、答えは分かりきっている。どうしてもオムライスが食べたくなつたから。他にもない、楓自身が。と言っわけ悲劇でも何でもなし。

それにしても、寒い。非常に寒い。

マフラーに顔を埋め、楓は誰一人歩いていない真っ昼間の路地を歩く。

(確かに、晴れるけど寒い、ね)

容赦なく吹き付けてくる北風に身体を震わせながら、楓は今朝少年がグチャグチャ言っていたことをふと思い起こした。軽く歩きながら空を見上げれば、太陽がやんわりと楓を照らしている。

(どうせろくな『面白いこと』じゃないんだろうし)

ケチャップ一本しか入っていないビニール袋の取っ手が指に食い込んできて、普通に痛い。そろそろ、限界だ。手袋をしてくれば良かったと楓は少し後悔して、

(さっさと帰ろ)

早く帰って、ストーブでも焚こう。

そう誓って、足早に路地を進んでいく。

家はもうすぐ先だ。

楓の家の前に一台の黒塗りの車が乗り付けてあった。

沸き上がったのは恐怖と言うより、呆然だった。高級住宅街でもない、平凡なこの町内には場違いにも程がある。近付いてよくその一台を詮索してみれば、外国製の高級車だということは簡単に分かった。だが問題は誰がこの車を乗り付けてきたのか、である。

( 、 、 )

しばらく考えてみたものの、それらしい該当者は頭の中にはない。楓はもう一度高級車を覗き込む。

何度見ても車の中はもぬけの殻。まだほんのりとボンネットは暖かかったからエンジンを切ってあまり時間が経ってないようだ。

(とりあえず、入ってみれば分かるか)

家からは物騒な音はしない。玄関の扉を触ってみてもなんら異常は感じない。至って普通だ。まあ、玄関が正常というだけで家が正常と思い込むのはおかしいな、そう自嘲気味にドアを開ければ、

「あ、意外と遅かったね。お帰りなさい」

思わず、目を疑った。

「な……………」

凄惨な、現場が目飛び込んできた。

「ゴメンね。後でちゃんと掃除するからさ」

そして少女は紫衣を纏ふ

淡々と告げる少年の足下には遺体らしき物体が血溜まりの中に二つ転がっていた。

何かと少年から『レックス』を受けている今だから分かる。斬殺されていた。しかも見事に一刀の元に斬り捨てられている。この有り様ならこの二人は痛みを感じず、訳も解らず息絶えたことだろう。

「何、してるの？」

「ん、殺し」

不思議と『前回』のような強烈な不快感はなかった。

確かに死体を見て気分が良い訳なんてない。

現に今、少し気持ち悪くなってきたし、キリキリと胸が痛む。しかし何故だか客観的に見ることが出来る。言うなれば場慣れしてきた新米刑事とでも言ったところだろうか。それに、もしかしたら身内が殺されることと見ず知らずの他人が殺されることは同じ『殺し』でも『死体』でも差があるのかも知れない。

と、そこまで考えて、思った。

(随分、冷静になったな……)

果たしてそれは良いことなのか、悪いことなのか。

いまいち楓にはその判別が付かないが、今はそんなことはどうでも良かった。

「殺して、アンタね……」

「だってさ、うるさかったんだよね。それにこの人たちね、取り立ての人みたいだよ」

言うつと、少年は傍らに落ちていた鞆を拾い、血塗れの鞆に手を突っ込んであさり始めた。

「なんで、分かるの？」

「楓ちゃんが帰ってくるほんの少し前にね、この人たちがいきなり押しかけてきてさ。借金返せ、返さなきゃ殺すぞってオレの胸ぐら掴んでさ」

鞆をひっくり返ししながら、淡々と語る。

「で、……斬つたの？」

「うん。でもね、あっさり斬つてあげたから苦痛はなかったと思うよ?。」

見事なまでに論点が実にずれていた。  
何よりいくら非合法の取り立てだとしても殺すことはない。やり過ぎだ。人間的におかしい。楓は頭が痛くなってきた。原因は死体を目の当たりにしているだけではないような気がする。

「お。手帳」

ペラペラと紙を捲る音がする。

「……人でしょ?。」

「うん」

しゃがみ込んでいる少年の足下には鞆の中身が無造作に転がっていた。煙草、百均ライター、何かのリストらしい書類。彼はそんな中身から手帳を発見したらしい。

「何か書いてあるの?。」

「そーだね、何も書いてない」

ポイツと用済みになった手帳は後ろに投げ捨てられ、次に少年の興味が移ったのはリストらしい書類の束だった。彼はそれをペラペラと捲っていく。

「何のリスト?。」

「ん〜、多分顧客リストだと思うな」

「顧客リスト?。」

「多分、楓ちゃんみたいはこのヤミ金から借金してる人のリストだと思うよ。ほらだつてここ、北沢悠つて名前あるし、隣に書いてある住所だつてここでしょ?。」

言われてリストを覗き込めば、確かに父親の名前とこの家の住所がリストアップされていた。どうやら間違いなくこの金融会社の顧客リストのようだ。となれば、このリストに載っている全員に取り立てをするつもりだつたのだろうか。

（　なわけないか　）

すぐに楓は否定した。

リストは表裏印刷の一〇数枚あり、びっしりと文字で埋まっている。いくらなんでも一日でこの量をこなせるわけがない。物理的に考えればすぐに分かることだ。

「楓ちゃん、多分ね、この人たち暴力団に繋がりがああるよ」

「……それくらい分かるって」

「そつか。じゃあこれからどんなことが起こるか予想できる?」

ヤミ金。

男二人。

非合法な取り立て。

彼らを殺した。

暴力団に繋がりがあある。

「 報復?」

弾き出されたのは、そんな簡単な答えだった。

「うん。仲間が殺されたんだから黙ってないだろうね」

「じゃあ」

「逃げないよ?」

先読みされた。楓の声に被せるようにして、少年は微笑んでいた。

「楓ちゃんは予防って言葉知ってる?」

「……知ってるに、決まってるでしょ?」

押し殺すように、楓は呟いた。

「知ってるなら話は早いよ。ここで迎え撃つにはちよつと地の利が悪すぎる。住宅時で刃傷沙汰は人目に付くから避けたいしね。けどその点コイツらの本拠地でやれば後始末もしなくて良いし、人目を心配する必要もない。まさに一石二鳥つてところだね。と言うことでき、楓ちゃんはここで待って。すぐ済ませてくるから」

謳うように、軽々と少年は告げた。

「ちよつと、それってヤクザ皆殺しに行くってこと?」

「正確には暴力団の下部組織の一つみたいだよ。何はともあれ、楓ちゃんを脅かす悪は払っておかないとね。のちのち面倒なことになるんだつたら事は早いほうが絶対良い」

「でも、」

「心配ないよ。今夜一〇時にこの業者の上部組織の幹部たちが盛大な『パーティー』やるみたいでさ。丁度良いよ。そこ潰しに行く予定だし」

莫然としか楓はその意味を掴めない。

けれどもそれが危険だと言っただけは分かる。

楓は理解していた。

危険なのは暴力団ではなくてこの少年だ、と言っことを。

「なんで……」

「お金なくなっちゃったんだよね。プラズマテレビ高くなってさ」  
軽く笑う、少年。

「どうせ暴力団のお金だよ。少しぐらい拝借したって問題はないと思わない？」

第二〇譚 サークスの入場券（後書き）

呼吸を止めることは出来ない。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第二一譚 生態

月明かりに照らされている埠頭に、一隻の豪華客船が繫留されている。

絶壁のように聳え立っている船体は白く磨き上げられ、煌々と輝く電飾によって美しくその姿を月と共に水面に映していた。

時より穏やかに吹き付ける風によって甲板からは美しい音楽が港に流れてくるけれど、その音を耳に出来るのはポツポツと波止場を照らす疎らな街灯と、明らかに場違いな自分たちだけ。

「楓ちゃんは知らないだろうから、一応予備知識ね。金衛会キンエイカイはね、新宿とか池袋で麻薬密売とか改造拳銃の密売を手広くやっててね、ここらじゃ結構有名な組織で、さっき潰してきた『業者』の親玉なんだよね」

金衛会。

「楓は知らなかったが『その手の世界』においてはそれなりに名の知れた組織らしい。

「で?。」

「金衛会が今夜ここで中国のマフィアと大きな取引するんだって」

「あっそ」

「今日の取引さ、大がかりなヤツらしくてさ。オレたちはその大金を頂戴しようって寸法」

「……泥棒じゃん」

「貰っちゃうのは非合法なお金だよ? それに『追捕使』は世界中を『異常因子』を追って旅しないといけないから何かと費用がかかるんだよね。飛行機代とか電車賃とか。代々引き継いできた口座があるんだけどさ、そればつかりに頼ってちゃいけないでしょ? だから定期的にこうやって資金調達しなきゃいけないんだよ」

そして少女は紫衣を纏ふ

そして少女は紫衣を纏ふ

「日本の警察って結構優秀なだけけど？」

「警察には捕まらないよ。オレみたいな『追捕使』はアカシックレコードにも戸籍にも記されていないし、根本的に住む世界が違うから絶対に捕まることはないし、警察がオレを認識できたら大したもんだよ。万が一ドジ踏んで捕まりそうになったら強行突破しちゃえばいいだけなんだけど」

そんな会話をしながら楓たちは波止場倉庫街の狭間に行く。

少し歩いていくと、やがて正面に一際目立つ建物が見えてきた。

レンガ張りの外壁はあちこちが剥がれ落ち、鉄筋がむき出しになっている箇所が何十カ所もある。窓という窓は一つ残らず割れ、駐車場だと思われる建物正面の敷地は枯れた雑草が生い茂って荒れ放題もいいところだった。

「ここに？」

「うん。この倉庫は商社が保有していたんだけどね、その商社が潰れちゃったんだって」

不気味なほどの静まりかえっている倉庫を前にして、少年は語る。「銀行は何かお金を回収しようと手当たり次第に会社の土地とか事務所とか、とにかくお金になる物を根刮ぎ売り払ったみたいなんだけどね、倉庫ぐらは資産価値がなかったみたいで売りに出されるどころか解体にもお金がかかるから放置されてるんだって」

どこからそんな情報を仕入れてきたのだろうか。やはり裏で繋がりがあろうか。

沈黙考している楓を余所に、少年は一息付くと躊躇することなく敷地内を進んで行った。慌てて楓も少年の後を追って敷地内に足を踏み入れる。

「うわ」

倉庫入り口までの道は獣道状態。草木はこれでもかといひ生い茂り、さながら雑木林を進んでいる気分だった。そんな獣道を進めば、ようやく入り口らしき金属製の扉が見えてきた。

扉は酷く錆び付いているらしい。どうやら引き戸式だったみたい

だが、少年が引いてもガタガタと音を立てるのみで一向に開く様子はない。

「別の入り口があるんじゃないの？」

「そうみたいだね」

そうは言うものの、少年は対して表情を変えずに古ぼけた金属製のドアを邪魔だと蹴り倒した。ガランガランと扉が派手な音を立てて転がっていく。

「さ、行こ？」

中は、闇。

放置されて数年が経過していて、電気なんて通っているはずもないのだが、少し怖い。何だかオバケ屋敷に入場するような心持ちだが、とりあえず少年の後に続く。

上手く視界が利かないものの、どうやら外観より内部は意外と広いようだ。

「ねえ、ライトは？」

「ないよ。すぐ慣れるから大丈夫だって」

言い回しは非常に適当だ。今ひとつ信用できなかつたのだが、ほんの数秒したら目が闇に慣れてきた。何だか、少し悔しい。

改めて周囲を窺う。

そこは朽ち果てた資料室のような空間だった。

見渡す限りに図書館の本棚のような、空の棚が並んでいる。

並び方は酷く適当で、乱雑に並んであったと思えば倒れて将棋倒しに倒れていたと思えば整然と並んでいる箇所もある。その本棚は全て同規格であるから、商社が使用していた棚だろう。どうやら商社がこの倉庫を放置したまま手付かずの状態らしい。

もう既に倉庫内部に入ってから五分程度経つただろうか。

最近の『レススン』のおかげか、近頃やけに人の気配には敏感なってきた。

だが、いくら周囲の気配を探っても人の気配を見つけられなかった。取引前ってこんなに静かなのだろうか。些か不安になってきた。

そして少女は紫衣を纏ふ

「ね、本当にここであつたるの？」  
「多分ね。良く分かんない」  
ある種の諦めがついた楓だった。

ふと、開けた場所に出た。  
そしてそこには大型ライトが三台。  
「ガキ、こんなとこで何してんだ？」  
ライトの下で大量の紙幣とトランプに灰皿と煙草を広げている強面の男性五名。

全員、三十代だろうか。格好はいわゆるヤクザ風で、その内の啜え煙草の男がリーダー格らしく、ドスの利いた声で寡黙に告げれば、残りの四人も相次いで顔を上げ、楓と少年をギリッと睨んできた。

「じゃま」  
楓の前で少年が凜と呟く。  
数秒の沈黙が支配する。空気が、重い。

「オイ」  
ふと、空気が動いた。  
啜え煙草の男が目配すると、残りのメンバーも鬱陶しそうに動いた。

「さつさと帰んな」  
啜え煙草の男がゆったりと少年の前で、

「あ？」  
「あ？」

そして少女は紫衣を纏ふ

それは啞え煙草の男が発した声。

そして、空気が、揺れた。

(え、……)

状況が把握できなかった。

「あ？」

絶叫はない。

ただ呆然と、無くなった『らしい』腕を啞え煙草の男、周囲の男たち、楓の三者はぼんやりと眺めていた。

「じゃま」

刹那、啞え煙草の男が裂けた。

胸を真つ二つに、上半身と下半身を別けるように。

びちゃびちゃと生々しい音、そして広げてあったトランプやら紙幣やらが深紅に染まる。

「ッ！」

最初に状況を把握したのは恐らく楓だろう。

慌てて楓は視線を少年の手元に送る。

握られている鮮血が滴り落ちる一振りの刀が、大型ライトによって鮮やかに浮かび上がっている。いつ抜刀したのか、いつ男を斬ったのか、全く見えなかった。

ゴクツと楓の喉が鳴る。

気を抜けば、今にも吐きそうだった。

死体を見るのはもう慣れた。非常に利己的な事実だけれども、自分の知り合いではない人間の死体にはあまり感情が弾けず、嘔吐することもない、そう理解していた。

けれど『殺しの現場』は初めてだった。

今まさに楓の目の前で死ぬ。息絶える。

そして少女は紫衣を纏ふ

父親でさえ、リビングの中で伏していたから断末魔は聞けても『映像』はなかった。

「か、門脇さ」

男の声は儂く途切れた。

ぐしゃっ、びちゃびちゃと。

その男は、重い砂入りのスーパールの袋を落としたような音を残して転がった。啞え煙草の男と同様に、上半身と下半身を分かつ形で大量の血を撒き散らしながら。

事切れた二人は、恐らく何が起こって、またはどんな方法を用いて自分が殺されたか分かっていないだろう。殺気も通牒もなく、唐突に胸が真つ二つ。意識を含めて何もかもが消え落ちた、そんな感じなのだろうか。そんな殺され方を経験したことがないから楓には分からないが、言いようによれば超人的な楓でさえ、少年の剣筋を捉えることが出来なかったのだ。理屈でなら少年の動きを掴むことは出来るかも知れない。が、対応できるかと問われれば確実にノーだった。

楓はゆっくりと少年を見た。

俗に言う『殺気』も『憎悪』も感じられない。

それはまるで呼吸をするような『生態』で人の命を奪っている、  
と言えれば最も適当かも知れない。

「く、」

「てめえら……」

これだけ陰惨な現場を目の当たりにしても、二人は逃げようとしなかった。アウトローな世界に身を置く者としてのプライドだろうか。さっさと逃げた方がいいのに、楓が零したその一言は、自分が発したのに信じられないくらい冷酷で残忍な声色だった。

（ 冷静だな ）

とは言っても、不快感が腹の中で渦巻いている。

しかし、事実として楓は冷静に事態を把握しようとして努めていたことに今更ながら気付く。

(人でなし、か)

頭の中に甦るワード。時よりそのワードを否定したくなるけれど、肯定する材料はそこら中に転がっていた。今だって、残虐に人の命を狩り殺している少年にやめるの一言も言えていないし、言う気も起さない。それが良い証拠だ。

びしゃ。

生温い液体が頬を打ち、楓は我に返る。

眼前。血の海、と言えば大袈裟過ぎるだろうか。

いつの間にか、あの二人の姿は見えない。自分の世界に没頭している内に少年に殺されたのだろう。この場で『姿が見えない』とはそう言うことだ。

何となく気になった楓は周囲を軽く見渡せば、すぐ近くに『それらしき』四つの亡き骸、八つの肉塊が転がっていた。

「楓ちゃん？ 大丈夫？」

三基の大型ライトに照らされた深紅の中央で、少年はゆっくりと刀を鞘に戻していた。これだけ派手に斬殺したのに、返り血一つ浴びず、平然とした表情はやっぱり異常と言わざるを得ない。

「アンタほどじゃない」

「良かった。ん、楓ちゃん、頬に血糊付いてるよ？」

ふと、少年は自分の頬に手をやる。

「ん、血も滴る良い女。カワイイよ」

戯れ言を聞き流して、楓は指先で血糊を払った。ねっとりとした血糊は指について、気持ち悪かった。

## 第二一譚 生態（後書き）

一度麻痺してしまえばもう戻らない。身体がそうであるように、心もそうなのかも知れない。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第三二譚 トラジコメディー

銃声が響く。

それは決して一つではなかった。連続して木霊する発砲音。

素人である楓が一目見ただけで『大きな取引』と分かるくらいのモノを前にして。

この取引が成功するかもしれないかで彼らの組の盛衰が決まる、そんな大切な取引の準備中に侵入者だ。即座に取引を主導していたらしい男たちは、取り巻きに侵入者の殺害を命じた。もし楓が主導する男たちの立場だったら、間違いなく同じ事を命じるだろうからその命令には動じることがなかった。

彼らはこのまま警察署に逃げ込まれることを恐れたのか、それとも他の組織の暗殺者だと踏んだのか。とにかく、ガラの悪い男たちは一斉に武器を抜いた。その動きは躊躇いがない。どうやら忠実な護衛兵らしい。ここで発砲すれば流石に目立つのでは、とも思うがこの広い敷地を持つ倉庫は港の外れにあり、尚かつ中も相当広いから外に銃声が漏れることもないかも知れない。

ちなみに、だ。

『武器を抜いた男たちのターゲット』が殺害されることはなかった。そればかりか、重なり合い、連続して響く銃声は次第に当初の勢いを失っていき　代わりに台頭する阿鼻叫喚。

最後の銃声が途切れた時、残されたのは主要メンバー（らしき）五名ほど。

まさに地獄絵図と言える凄惨な現場だった。

武装していた非合法の護衛兵たちは皆揃って一刀の元に斬り捨てられ、無惨な亡き骸となってそこら中に転がっている。彼の行く手を妨害した者で生き残っている者などいなかった。

そして少女は紫衣を纏ふ

そして少女は紫衣を纏ふ

「さて、と」

鮮血滴り落ちる刀身を揺らして、返り血一つ浴びていない少年は一息付いた。

「な、てめえドコの……」

今のところ生き残っているメンバー五人は、恐らく弱肉強食の裏世界を生きて、そして大がかりな取引を主導できる立場までのし上がってきた者たちなのだろう。貫禄があると言つか、こんな状況に陥ってさえも逃げようせず、精一杯の虚勢とも取れる強気な姿勢は崩さないでいるどころか、懐から拳銃を抜いて少年に照準を合わせていた。まあ、侵入者には効果がないと護衛兵との戦闘で重々理解しているだろうに何と哀れなことかと、楓は遠巻きにその様子を静観していた。

「あのね、そのお金が欲しいんだ。プラズマテレビ買ったからさ、お金なくって」

「な、なら……」  
ふっと。

一瞬だけ緩みかけた空気は、少年の制裁と舞い踊る鮮血によって再び引き締められた。

「楓ちゃん」

少年は四人に減ってしまったメンバーたちに背を向け、楓を呼ぶ。無論、愚かにもその隙を付こうとした二人に制裁を加えることを忘れない。血が、舞う。

「パソコン持つてくれる？」

感覚が見事に麻痺してしまっていた。

床に転がっている亡骸に拳銃、そして派手に飛び散り、堪っている血、空気を腐らすような異臭にも心は動かない。淡々と有りの儘受け入れようとしているのだ。それが当たり前のように。

「ま、待てよ、そのパソコンは」  
「うるさいな」

断末魔も無しに、崩れ落ちた。

(今は、見えた)

今のは左肩から右脇にかけて一閃、つまり袈裟斬りだった。答え合わせをするような感覚で男をみれば案の定。密かに楓は自身自身の成長を感じながら、その反面、今は手加減したのかもしれないと自分自身に反論しながらも、指示された通りに中央に置かれていたノートパソコンを持つ。

「ちよつと持つてて」

「……何する気？」

「このパソコン使つて送金するんだと思うだよね。ねえ、そうでしょ？」

一人残った男に少年が問えば、ぎこちない動きで頷く。

「ほら、よく映画でテロ組織が取引でパソコン弄つてミサイルとか細菌兵器とか取引してるでしょ？ 最近の『商売』はハイテクでさ、ホント旧時代の人間は付いていけないよ。で、そのアンタ、この網膜認証、誰の？」

「それは、おれ……」

そこで途切れた意味が楓には分からなかった。

楓は男を見るが、男に何ら変化はない。少年も刀を振っていないし、血飛沫もない。ならば、なぜこの男は声を詰まらせたのだろうか。

「楓ちゃん、パソコン床に置いて」

「どこ？」

「うん。ありがとう」

無造作に少年は男の頭髪を掴み、首を刈り斬ると床に置かれていたパソコンに首を押し付けた。パソコンに赤黒い血が撒き散らされる。精密機械に血液すいぶんは厳禁じゃないのかなあとと思うが、当のパソコンは正常に動いていた。もしかしたら防水加工でもされているのかも知れない。

と、ふと合点がいった。

首を刈り取られた男は『こうなる』ことを恐れていたのだ。パソ

コンを動かす鍵は自分だと分かれば、裏社会の人間は容赦しない。指紋認証システムだったら指を切り取られるだろうし、声紋認証だったら拷問も辞さないだろう。だから彼は認証を解くために首を切り離れた。所詮、それだけなのだ。

まもなく、ピーとパソコンから電子音が鳴った。

するとやっぱり生首は用済みになった。

少年はそのまま遠くに投げ捨て、納刀するとキーボードを軽快に叩く。全てが終わった今、キーボードを軽快に叩く音のみが空間に響いていた。

楓は画面を覗き込む。

画面には沢山のウィンドウが表示され、次々と現れては消えていく。内容は、恐らく一般人が触れるようなシロモノではないだろう。何かのリストやら、報告書やら、見ているだけでどうでも良くなってくる楓だったが、この少年にとっては有用なデータなのかもしれない。さっきまで『旧時代の人間はついていけない』とか何だか言っていたけれども、パソコンの扱いは明らかに慣れたもので、楓には何を行っているのかさっぱり理解できない。何だか逆に馬鹿にされたような気さえしてくる。

(つてか、そもそも『旧時代』っていつなのよ)

面白くないから心の中で毒気付く。

(昭和、大正？ ま、何でもありの『追捕使』じゃ永遠の命つても充分に有り得るかも)

適当に思いながら、少し笑う。

「あ、あったあつた」

その声に合わせて画面を覗き込めば、さっきまでいくつも展開していたウィンドウは一つに絞られており、その大きく表示されているウィンドウには英語と数字が羅列していた。内容を理解しようと努めるけれど、すぐに諦め、最も楽な方法をとることにした。

「なに、これ？」

「口座だよ。金衛会の全財産って言うってもいいかな」



そして少女は紫衣を纏ふ

何の躊躇いもなく、武器を携帯している集団に一振りの刀のみで突っ込み、無傷で、一滴の返り血も浴びず、芸術的に『制圧』してみせたあの圧倒的な武力に、人を殺したって動じることない壊れた精神。この少年なら嗤いながら大統領官邸の正面玄関から侵入して、警報が鳴り響く中、山のような死体を残し、大統領の首を片手に嗤いながら帰ってくるだろう。

想像できる。

思わず、楓は唾を飲み込んだ。

「楓ちゃん、行くよ」

「……ん」

と。

ピリっと。

気配が、うるさい。

「楓ちゃん、ちよっとパソコン（これ）持っててくれる？」

少年は怠そうに楓にパソコンを投げ渡す。が、言葉とは裏腹に横顔には悦楽とした表情が彩っていた。その様子は、人間として、明らかに、おかしい。

「どうやら取引相手が来ちゃったみたい。ゴタゴタは面倒だからさつさと引き上げようと思ったんだけど、まあいいや」

黒衣を捲って、ゆったりとした動作で再び刀身を外気に晒す。

「楓ちゃんは外に出てて」

ドクンツ、と。

そして少女は紫衣を纏ふ

楓の胸が高鳴った。

間違っても思慕の情ではない。

怖い、怖いのだ。

絶対的な狂気が、ここにあった。

この『追捕使』の少年は楓の仇敵だ。

楓が『レッスン』を受けているのも、全てこの少年を楓自信の手で殺すためだ。別に楓は『追捕使』に成りたいがために『レッスン』を受けているわけではない。あくまで楓の目的は両親の、一族の仇討ちをするためであり、『追捕使』になるのはその副産物に過ぎないのだ。

父親が殺される寸前、楓は少年と戦った。

あの時は、ただ少年に遊ばれるだけに終わった。自分との実力の差を知った。

だから、この少年を殺すために楓は『レッスン』を受けた。

彼以上の技術を身に着け、絶対に殺すことを誓って。

だが。

「万が一、敵に会ったら武器を奪って無力化しちゃえばいいから指示が耳に入っているように入っていかない。

今はそんな指示より、目の前に佇んでいる絶対的な恐怖に、楓は心奪われていた。

やがて。

声と共に一団が雪崩れ込んできた。

そして少女は紫衣を纏ふ

前の部屋の惨状を目の当たりにして警戒しているのか、皆拳銃を携帯しているようだ。

「じゃ、楓ちゃんは上手く逃げてね」

悪魔は、相変わらず嗤っていた。

楽しそうに、楽しそうに。

第三譚 トラジコメディー（後書き）

やがて少女の夜が始まる。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第二三譚 おやすみなさい

現れた取引相手（一団と呼べる人数だった）はどうやら日本人ではないようだった。

一瞬耳に入ってきた言葉から、何となく楓は中国語を連想した。俗に言うチャイニーズマフィアというヤツだろうか。そう言えば、倉庫に侵入する前に少年がチャイニーズマフィアと金衛会が取引するとか何とか言っていたような気もするが、今となってはそんなことはどうだっていい。

何にせよ、今回の戦闘も呆気なく終わった。

そしてまもなく虐殺が始まった。

今だ散発的な銃声が聞こえるけれど、それは戦闘での銃声ではない。

最期の悪足掻き。

断末魔の一コマなのだ。

（ふう）

渡されたノートパソコンを抱えながら、楓は身を隠しながら出口に向かって急いでいた。

（銃声に、気配……。まだ、ダメ）

緊張感が楓を苛むも、冷静になろうと試みる。

静かに深呼吸して、気配を探る。

毎晩行われる『レッスン』のおかげで、人の気配には敏感になっている。

まあ『レッスン』を受ければ、誰だって否応なしに感覚が鋭敏になると思っが、とにかくだ。楓の目的は散発的な戦闘が続くこの倉庫から脱出することであって、戦いに身を投じることではない。従って敵に見つからない方がいいのだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

そして少女は紫衣を纏ふ

銃声が響く。

響いたと思えば、はたと止む。まるで一つずつ丁寧に摘み取るようにして。

(そろそろ、終わりかな)

始まってからまだ一五分も経ってないが、そろそろ終結だろう。あの少年は集団をも蹂躪できる力を持っている。今ここで起こっていることを現実<sup>に</sup>当て嵌めてはいけない。

(まあいいや)

今は脱出することだけを考えようと楓は思う。

だが、

(あれが、『追捕使』)

どうしても、脳裏にあの圧倒的な力が甦ってくる。

(私は、アレを殺す?)

殺せるのだろうか。楓は思う。圧倒的<sup>とし</sup>か言えない力を振り翳して、拳銃で武装した集団相手を嗤いながら蹂躪するあの『追捕使』<sup>しゅつぷし</sup>を果たして楓は殺せるのだろうか。

(……、私は)

殺せる自信は、ない。なくなった。

打ち砕かれた。

殺すどころか、殺される可能性の方が高い。

(怖い)

どうしようもなく、あの少年が怖くなった。

刀を握って、圧倒的な力を振り翳して。

(己惚れてたんだ……)

楓は思い知る。

毎晩繰り返しられる『レッスン』で、日に日に楓は力を付けていった。それは少年の認めるところがあるし、自分でも手応えを掴んでいる。初めて『紫衣』を振り回した時から考えれば、格段に強くなった。

(もしかしたら、アイツと同格かもしれないって)

そして少女は紫衣を纏ふ

そう、思っていなかったと言えば嘘になるかも知れない。

(もうアイツと同じくらいの実力があるって錯覚してた?)

少年の『本気』を見たことすらなかったクセに。

自分自身を叱咤する。

とんだ大馬鹿者だと。

身の程を知れ、と。

(そもそも、アイツは……)

一体全体、何物だろうか。

考えてみれば、楓はあの少年についての知識を持ち合わせていない。楓が持っている知識なんてせいぜい『少年が「追捕使」である』という程度で、それ以外は酷く曖昧だということに気付く。

(私は )

得体の知れない者を相手にしようとしていたのか。

(私は、)

得体の知れない恐怖だった。

(私はアイツを)

そこまで考えて、

楓の考えは遮断された。

(ッ！)

ふいに大きな音を立て、楓に向かって倒れてきた棚によって。

率直な楓の感想と言えば、

(運が良かったみたい)  
である。

勿論、それは不意に倒れてきた棚を咄嗟に避けることが出来た自分自身への感想ではない。

「は……、ひゃ」

棚はこの一室に密集して並んでいた。

となれば、一つ倒ればどうなるか、予想することは容易いだらう。

並んでいた棚は見事に連鎖的に倒れ、倒れ、倒れた。所謂、ドミノ倒しである。

だが、肝心なのはドミノ倒しではない。

楓はドミノ倒しによって出来た独特の棚と棚の隙間にいた。

おかげで直撃を避けられた。と言うか、無傷だった。

「ラッキーってことで……」

まるで秘密基地のような空間から這い出て、楓はドミノ倒しになった元凶に視線を向けた。

物凄い勢いで突っ込んできたらしい。元凶は男だ。二〇代ぐらいだろうか、若い。雰囲気的に日本人とは思えないけれどもアジア系、中国か台湾辺りだろうか、手には黒光りしている一丁の拳銃がしっかりと握り締められている。間違いなく取引相手の一団の関係者だろう。ならば中国人か。

どうやら、運良く『追捕使』の少年の凶刃から逃れられたらしいが、植え付けられた恐怖は半端じゃないようだったようだ。先程から何か必死に伝えようと(尤も、日本語や英語以外だったら殆ど楓には伝わらないのだが)声を出そうとしているけれど、口が全く回っていないのは勿論、ガタガタと小刻みに震えて、表情も恐怖一色



手の痛みすら吹き飛んでいるのか、呆然と男は呆ける。

(よし、上出来)

鎌を握っている手を解けば、自然と楓の『紫衣』は虚空に消えた。「逃げた方がいいよ？」

通じないと分かっているにしても、楓は言うべきだと思った。ニユアンスで通じたかも知れないが。

(ま、これで義務は果たしたと言うことで)

これ以上危険はないだろうと判断した楓は呆けたままの男に背を向ける。

(今は時間ロスだったな)

楓のやるべき事は殺人ではない。

脱出することだ。

腕の中のパソコンが多少心配になりながらも、楓はドミノ倒しになっっている棚の群れを軽快に飛び越えながら、外へと向かう。

奇声を発する男に構わず。

(壊れたかな)

少年が見せた絶対的な恐怖に、楓が見せた摩訶不思議な出来事。

いくらアウトローの人間だろうと、ここまで悪しき方向へぶっ飛んだ光景を見せられたら、とてもじゃないが平常心を保つてはられないと思う。特に前者は絶対だ。楓の『紫衣』に冠しては『夢だつた』で終わらせられる程度だったかもしれないが、少年は別格だ。あの場にいたから分かる。あの異常性と残虐性は夢でもお目にかかれないだろう。

「ひあ……」

哀れなってきた。

何気なく楓は振り返れば、

拳銃を握っている男。

「へ？」

拳銃はさつき破壊したのに、何故。

(まさか、もう一丁　　)  
かちや。

男の拳銃が鳴った。

男は完璧に壊れていた。

口元から唾液が垂れ流されている。

目は完全にイッていた。

良くも悪くも吹っ切れたのだろう。

「ひあ、」

口元が、緩んだ気がする。

「あ、あ、ああああああああああああああああああああ  
ッ！」

絶叫。

それは男のモノ。

そして。

楓の目の前で、確かに引き金が絞られた。

第三編 おやすみなさい（後書き）

長い朝が始まる。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第二四譚 おはよう

「はは、」

半笑い。

ツーツと、楓の頬から朱が落ちる。

「は、」

楓はペタリと尻餅を付いていた。

「はは、はは……」

空笑いが零れて仕様がなない。

尻餅を付いた時にパソコンが床に落ちたけれど、今はそんなことなんてどうでもいい。

助かった。

拳銃の引き金が絞られたその瞬間、流石に楓は死を覚悟した。しかし。

奇跡と言っても良い。

男が拳銃を絞った瞬間、恐らく手元が狂ったのだろう。男の手がブレた。とにかく照準が狂ったのだ。そのまま引き金が引かれ、銃弾は楓の頬を掠めて天井に着弾し、男はまるで電池が切れたように崩れ落ちた。全く奇跡以外の何物でもない。一生分の幸運をあの間に使い果たしてしまったかと思う。

(ホント、奇跡)

感謝した。

それは特定の誰かじゃなくて、とりあえず自分を救ってくれた偶然全てに。

「あ」

と。

そこで、楓は唐突に我に返った。

そして少女は紫衣を纏ふ

(え、あ?)

手に、確かな感触がある。

それは妙にしっくり来る物で、まるで長年愛用していた絵筆のような、感覚で。

そして次の瞬間。

一瞬だがしかし確実に楓の心臓が、止まった。

(うそ)

刹那。

全てを悟った。

自分が握っている物の正体も、そして何より『何故、弾が逸れたか』をも、何もかも。

だがその瞬間。

悟った瞬間に、楓は全否定した。

嫌な汗が噴き出す。身体をジトツと濡らしていく。

ありえない。

ありえるはずが、ない。

こんなことが起こってはいけない。

そう、恐怖にも絶望にも共通する突発的な感情で、嚴重に『悟った』という事自体と『悟った事実』を雁字搦めにして心の深淵へと封じ込める。

(違う、あ、ああ、ありえない、ああああ……)

脅えた。

たった今封印したはずなのに、封印が揺らぎ、漏れ出す。

ダメだ、そう思っただけでも溢れ出した『ソレ』は楓を揺らし、揺らし、揺らす。

(ッ!)

ぴちゃん。

確かにそんな音がした。

それは楓のすぐ近くから聞こえた音で、まるで雫が落ちたような音。

(ああ、あああ、ああ、……)  
ギリギリと楓は油が切れた扉のようにぎこちなく首を動かした。  
止まれと心に叫ぶも、身体は言うことを聞かない。  
直後、楓は絶句する。

握っていたのは血染めの太刀、それは他ならぬ楓の『紫衣』で。  
その先に見えたのは、事切れた男の残骸だった。

(あ、こ、ここの殺した)

誰が。

そう思った。

誰がこの男を殺したのか。

だが、そんな想いはすぐに自分自身の現実逃避だと言うことに楓は気付く。

(わ、わたしが)

殺したのだ。

誰でもない、他でもなく自分自身が、彼を殺めた。

現場は、一目瞭然だ。

この場には楓と男しかいない。

そして男は死に、楓は血塗られた太刀を握っている。しかも凶器となったその太刀は楓の『紫衣』であり、それは楓以外に犯人がないことを何よりも雄弁に語っていた。

(ひと、ごろし)

虫を殺したわけではない。

そして少女は紫衣を纏ふ

自分と同じ形をした同じ種族。

そんな彼を、殺した。

殺人、それは殺人だ。あの少年と同じ事を今この瞬間楓はしでかしてしまったのだ。この男を殺した。全てをあの瞬間に楓自身が自分自身のためだけに、奪った。永遠に、奪い去ってしまった。彼の全可能性と、彼を知っていた全ての者から男自身を、一切合切、何もかも。

「ああ……」

彼にもし肉親がいたら。

彼に婚約者がいたら。

彼に子供がいたら。

奪ったのだ、北沢楓は。

この男の未来を。

そして彼に関わってきた全ての人物から、他ならぬこの男を、楓は奪い去ってしまった。

金属音が、鳴る。

音がした方を見れば、あの血塗られた大鎌が床に転がっていた。

「だからそんなに顔色悪いんだね」

一通り、事情を報告し終えた楓はバチバチと音を立てて燃えている例の倉庫を遠目にして俯いた。

「まあね、仕方ないよ」

俯く楓に黒衣の少年は淡々と言葉を連ねていく。

「仕方ないことなんだよ、楓ちゃん。殺したくないって気持ちは良く分かる。オレも最初はそうだったんだよね。覚えてるかな、お師匠様にいきなりオレの存在を否定されてさ、生き残る道を示され

て、そしてオレはこの刀を手に入れた」

顔を上げれば、少年は腰に差している刀の柄を撫でていた。

「オレがね、初めて斬ったのは巷を恐怖のどん底に突き落としていた辻斬りだった。あの時は同心が三人すでに殺されててね、お師匠様が見過ごせないからって、オレの鍛錬も兼ねてね、二人で夜警することにしたんだ。で。やっぱり辻斬りは現れてさ、お師匠様に斬りかかってきた」

少年は純粹に過去を懐かしんでいた。

「いくら辻斬りだって、人間だよ。普通のアカシックレコードに記されたドコにでもいるような人間だったから修行中だったオレでもまあ、道場の門下生だったから刀の扱いには慣れてたし、楽勝だった。こんなバカみたいに弱い人間に同心三人も斬り捨てられた、なんて信じられないくらいにさ」

「 殺したの？ 」

「 殺したよ。お師匠様がオレに殺せ、殺すのも『 追捕使 』として生きていくためには絶対に必要な能力だって言ってたし、それにオレには生きる術がこれしかなかったんだよ。兄弟に見下されて、両親に嫌われてたあの惨めな生活には戻りたくなかったし、殺すことでそれから逃れられるんだから。だから迷いなくオレは斬ったよ。けどね、襲ってきたのはどうしようもない罪悪感だったんだ。丁度、今の楓ちゃんみたいな感じだよ 」

嘘だと思った。

作り話だ、と。

いくら無法者とは言え、暴力団やその取引相手であるマフィアを無慈悲に、それも『 人を斬る 』という行為自体を楽しんでいたかのような振る舞いを楓は確かに目にしている。だから、この少年が人を殺して罪悪感に苛まれるような人間には思えないのだ。

百歩譲って、少年が『 追捕使 』だから殺すという行為が必然だとしよう。

けれど、今彼が斬ったのはアカシックレコードに普通に記されて

いる普通の人間だ。いくら悪事に手を染めていようと、違法行為を平気で行おうと、彼らを斬る意味はまず見当たらない。寧ろ斬らなくて良い存在だったはずだ。

なのに、黒衣の少年は躊躇いなく斬った。

斬って斬って、斬り捨てた。

屍の山を、築いて見せた。

何が、罪悪感だ。

「楓ちゃんはさ、オレがそんな人間なわけないって思ってるでしょ？」

「だってそうでしょ？」

だから楓は重厚な口ぶりで、

「アンタは、殺した。暴力団とか、マフィアとか。何より、私の家族も」

少年は楓の家族を殺した。楓は『異常因子』という『追捕使』にとって討伐対象だろうが、家族は対象外だったはずだ。

なのに彼は殺した。

殺したのだ。楓の家族を。罪もない、家族を。

「そんなこと？」

「そんな、ことって……」

「そんなことだよ。前言わなかったっけ？ 家族がいれば自由に『レスン』できない、それに『紫衣』を纏えそうな逸材は貴重だからね。無駄にすることは出来ないし、纏うにはそれ相応の強い感情が必要なんだ。知ってる？ 人間が抱く最も強い感情は憎しみと絶望だよ？」

「アンタ、何様のつもりで」

「オレにとって楓ちゃんの家族はどうでもいいよ。オレが大切なのは楓ちゃん自身だ」

「なっ」

思わぬ言葉に楓は絶句する。

「別に他意はないよ。『そのままの意味』だから。楓ちゃんは『追

捕使』の素質を充分に持つてる最高の素材だ。もしかしたらオレ以上の素質かもね。オレにとつて楓ちゃん以外はどうでもいい。斬つて捨てたつて別に後悔はない」

恐怖さえ、覚える。

楓は、確かに見た。

この少年の心の内に渦巻いている、絶対的な『何か』を。

その『何か』が何だか正確に把握できないけれど、確かに大前提たる『何か』を、楓は感じた。

楓も持っている、その何か。

「さ、楓ちゃん。帰ろ？ そろそろ消防が嗅ぎ付けてくる」

言われれば、確かに消防車のサイレンが近付いてくるような気がした。

「一応隠蔽工作で燃やしてるんだけど、現場検証すれば嫌でも死体がいつぱい出てくるからさ、さつさと引き上げよ？ 楓ちゃんだつて警察と一戦交えたくないでしょ？」

笑っていた。

楽しそうに、楽しそうに。

第二四譚 おはよう(後書き)

溶け出す憎悪は美しい。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第二五譚 悪役は嘲笑う

そこは、間違いなくカミサマが住んでいる池だったのかもしれない。

近所の雑木林。

幼い頃、よく幼馴染みとその雑木林に遊びに出掛けた。

春は花見、夏には秘密基地を作った。秋には栗拾いもしたし、冬は雪が足りなくて泥まみれの雪だるまを作った。

今となつては住宅街に変貌しているのだが、当時はまだそれほど宅地化されておらず、家の周囲に田んぼや雑木林が真新しい住宅に混じっていた。

そんな雑木林の奥には、用水用の溜め池があった。

何回か、その溜め池を見に行ったことがある。

近所に住んでいたお爺さんは、その溜め池を『神賀池』<sup>かんがいけ</sup>と呼び、神様が住んでいるんだと教えてくれた。まあ、神様なんて存在は信じられなかったけれど。

そう。

あれは、確か小一の夏休みだっただろうか。

家で昼ご飯を食べていると突然『アイツ』はやってきて、あの神賀池に行こうと誘ってきた。それはいきなりでびっくりしたけれど、断る理由もなかったからついて行った。

神賀池までの道のりはともかく大変だった。

普段は誰も近づかない場所に神賀池はあったから道無き道を、草木を押し退けて歩いた。歩くことで精一杯だったからどんな道を通ったから覚えていないけれど、今手元に残っている断片的な記憶を繋いで考えてみれば、無茶な行軍だったと思う。

だいぶ歩いた。二人ともへとへとになるぐらい。

そして少女は紫衣を纏ふ

着いたときには綺麗な夕焼けが木々の隙間から神賀池に降り注いでいた。

水面に夕焼けの淡い橙色が反射して、圧倒的な存在感と共に眩いばかりに目に飛び込んでくる。湛える清水は浄妙さを極めていた。

「きれい」

疲れも忘れて、その光景に見とれて立ち尽くしていた。

「ねえ」

その声がした方向へ、向く。

そこには小さな男の子が居て、

「また、ここにこようね」

「うん」

頭を撫でてくれるその手が、妙に心地良くて、

「さらさらしてる」

「え？」

「きれいなかみのけ」

「きれい？」

「うん。きれい」

その言葉は妙に心に染み渡った。

一夜明けた。

早速、今朝のワイドショーに例の倉庫火災跡から大量の遺体が見つかったということが報道されていた。どのテレビ局も挙って大々的に取り上げられている。確かに今最も旬の話題だ。豪華客船が停泊するような港の外れで、半ば放置されていた人気のない倉庫が一夜にして炎上し、いざ警察と消防が現場検証してみれば大量の遺体がワラワラと出てきた。インパクトがある。カルト教団絡みの集団

自殺や、何らかのカルト的儀式、外国の諜報機関が行った証拠隠滅説に陰謀説、そして非合法組織同士の派手な抗争説など。様々な説が画面上で報じられており、如何にもワイドショーや週刊誌ネタにはまり役な事件、という様相を見せていた。

尤もそれは世間的に、であるが。

閑話休題。

案の定、警察は事件性があると判断したようで、近くの警察署に捜査本部が設置されることだったが、遺留品が少なく、目立った目撃証言も得られていないことから、元警察幹部という肩書きを持った五〇代程度のコメンテーターは難しい捜査になると解説していた。

何れにせよ、事件の真相を知っていて、しかも当人であるだけに、楓は不思議な気分だった。

世間や警察が知りたがっている事実を完全無欠に把握している、というのは妙な気分なのだ。優越感と言うべきか、はたまた孤独感と言うべきか。普段味わったことがないような気分であることは間違いない。

「で、大丈夫なの?」

最新式のプラズマテレビに映っているニュースキャスターから視線を外さず、あくまで『興味本位として』楓はソファに寝ころんでいる少年に告げる。

「大丈夫って、何が?」

「警察」

「さあね。もし刑事さんが令状持ってきたら逃げればいい」

「殺して?」

「もちろん」

至極当然という口ぶりだった。

ここまで来ると、驚きを通り越して呆れてしまう。

「楓ちゃんこそ、大丈夫なの?」

「……何が?」

「殺し。昨日が初めてだったんでしょ？」

普通人殺しなんて経験がある方がおかしいでしょ、と口から出かかったもののその台詞を楓は飲み込む。言ったところで意味がないのだ。楓の常識は勿論、俗に言う『世間の常識』はこの少年に通用しない。この『追捕使』の少年に接する時に最低限必要な大前提なのである。

「何とか」

「そっか。分かっているとと思うけどさ、オレら『追捕使』は『異常因子』を殺すことが使命であり存在意義なんだよね。だから殺しに動揺しちやいけないよ。寧ろさ、殺すことを生き甲斐に感じなきゃ」不思議と、少年の忠告は楓の頭に溶けていく。

(殺すことが、生き甲斐……)

精神鑑定にかけられる快樂殺人犯の台詞か、と楓は思わずにはいられない。

その上で、

「『追捕使』は『異常因子』を殺す……」

無意識に言葉が漏れた。

「……楓ちゃん？」

「アカシックレコードに記載されていない存在だから『異常因子』。それをただ追い殺すことだけが存在意義である『追捕使』。どっちが『異常』なのか、アンタは一度でも考えたことある？」

本当に、この少年の告げるように『追捕使』がそれだけの存在だったならば。

楓は思わず問い糾す。

(だから……)

ある種、楓は確信していた。  
人を殺した。

全てに叛いたその禁断の行為を為してしまった今だからこそ、理解出来たのかも知れない。

何故、楓の常識は勿論、俗に言う『世間の常識』は『追捕使』の

彼に少年に通用しないのか。

その、根本的な部分を。

(だから……)

そして。

その『乾き』を、とつくの昔に失ってしまったモノを取り戻そうと。

必死で『隙間』を埋めるように

「あ」

と。

想った。

思い付いてしまった。

どす黒い。

正真正銘の悪魔を。

壊れ物を更に叩き壊す悪魔の方法を。

思い付いてしまった。

この瞬間。

確かに。

確実に。

そして少女は紫衣を纏ふ

「楓ちゃん。そんなこと考えるだけのことかな？ 『異常因子』は放っておくとアカシックレコードに害になる。プログラムにバグがあつたら発見次第修正するでしょ？ あれといっしょ」

「だからって、関係ない人まで殺すことはない」

楓は平然と、真つ直ぐに。

「あの暴力団の男たちにも家族とか友達とかいるはずなのに、みんな『異常因子』じゃないでしょ？なんでそう簡単にホイホイ人を斬れるの？」

確信を得ようと、必死に。

「『追捕使』が考えなきやいけないことはアカシックレコードただ一つだよ。『追捕使』はアカシックレコードさえ無事であればそれでいい。アカシックレコードのためならいくらでも人を殺したつて構わないんだよ」

「ふざけないで」

「ふざけてなんかないよ、楓ちゃん。そもそもさ、楓ちゃんだつて人を殺したじゃん？人のことと言える立場なの？」

「だからこそ！人を殺すつて事がどれだけつて重い事かつて思い知つたから！！」

「だから？」

ギリッと、楓は少年を睨む。

「アンタは間違つてる」

毅然と、冷静に吐き捨てた。

「関係ない人まで殺すなんて、絶対におかしい」

「相違の違いだよ。オレはこのやり方が正しいと思つてる。だから殺すことだつて躊躇わない」

ピリピリとした空気が場を覆う。

テレビから聞こえるニュースキャスターとコメンテーターとの遣り取りが酷く呑気に聞こえてくる。

「じゃあさ、楓ちゃん」

そんな空気を打破したのは少年だつた。

そして少女は紫衣を纏ふ

「楓ちゃんはさ、本来の『追捕使』の使命や存在意義以外で人を殺すのがおかしいって言うんでしょ？」

少年はソファアールから立ち上がり、楓と向き合う。

「じゃあさ、考えてよ。楓ちゃんの『仇であるオレを殺すこと』は『追捕使』の使命でも存在意義でもないよ？」

打算が働いているのか、少年はほんの僅か微笑気味に言った。

楓は『異常因子』以外の人間を殺すことを間違っていると聞いた。対して少年は楓の仇である『追捕使』の少年を殺すこと』は私怨だから『追捕使』の使命でも存在意義でもない、つまり楓の目的である家族の仇を討つことは間違っている。そう言いたいのだろう。

「だからどうしたの？」

考察した上で、楓は凜とした声を放った。  
放つと同時に、

踏み込んだ。

手には大鎌、眼前には刀で漆黒を受け止めている少年の姿がアツプで映る。

「驚いた？」

楓は目の前に驚愕している少年を前にして、

「上手くなつたでしょ？ 『紫衣』も『飛ぶ』力も」

快感に荒ぶる心を持って余しながらも、僅かにでも得られた『手がかかり』を並べていく。

「はつきりしたの。あの男を殺した時、何でアンタが人を殺すかつ

てこと」

自分でも驚くほど甘く、妖艶な声が出た。

「人間って、結構簡単に壊れちゃうのよ」

自分が、ここにいる北沢楓が良い例だ。

「アンタは、壊れてる。私も人のこと言えないけど」

「楓、ちゃん？」

「確かに、人は殺しちゃいけない」

「正論だね」

「分かってる。人を殺して、私は分かった。アンタが何でそんなに人を殺すのか」

シユンツと、楓の手から大鎌が消えた。

「アンタは自分の『乾き』を癒したいだけ。そうでしょ？」

少年の瞳が揺れた。

年相応に、迷子の子供のように。

楓は抜き身の刃へと手を伸ばす。

「淋しいでしょ？」  
痛い。

ぴりつとした痛みが駆け回り、刀身が指に食い込むけれど、楓は気に止めなかった。

楓は少年の刃を手で掴んだまま、

「殺すことだけに生き甲斐を見出すなんて、そんなの悲しすぎる」

楓は首に手を絡める。

「殺すことで癒せない『乾き』を持ち続けるなんて、そんなの間違ってるよ」

楓の行動が予想外だったのだろう。少年の身体が不自然に跳ねた。

「だから、泣かないで」

楓は告げた。

しつかりと、哀れな少年を抱き締めたまま。

（鬼ごっこ、私の勝ちってことで……）

哀れな少年を腕の中に閉じこめ、鬼は静かに嗤う。

第二五譚 悪役は嘲笑う（後書き）

所詮口先だけだったのだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第二六譚 抗う羊

「北沢。お前、これからどうするつもりなんだ？」

何かと思えば、そんなことだった。

一週間も経てば、例の倉庫事件はという話題は吹き飛んでいた。

ちなみに吹き飛ばしたのは地方の講演会で厚生相の発した人権を侵害するような一言、つまり『不適切な発言』である。なお、発言に激怒した人権団体が揃って猛抗議、同時にここぞとばかりに野党が辞任しろとの大合唱<sup>ラウ・コール</sup>。どうやら首相の助勢も虚しく、発言後に急落した内閣支持率の観点からも更迭は免れないようである。

「……これからって？」

そんなニュースキャスターとコメンテーターの遣り取りを傍視していると、久方ぶりに家の電話が鳴った。

「今後のことだ。先生はまだ何も訊いてないんだよ。お前の進路とかな」

連絡してきたのは楓の担任教師で、曰く、今後のことではいろいろ話したいことがあるから、授業を受けなくても構わないからとにかく顔を見せる、とのことだった。

正直言って、物凄く気が進まなかったが、担任はしつこかった。

どうしても直接顔を合わせて話が出たかったらしい。仕方がないから楓は久しぶり（日時に換算すれば三週間程度である）に制服を身に纏って、登校し、職員室に顔を出したのである。ちなみに担任教師の『ご厚意』に甘えて授業に出る気は（寧ろクラスに顔を出す気は）毛頭ない。用が済めばさっさと帰るつもりである。

何だかんだで美術室に放置してある描きかけの絵が気になる。回収しようかとも思う。あのまま放置していて、心ないクソヤロウに悪戯されたら堪ったものじゃない。

「お前の進路をまだ聞いてなかったからな。具体的にはどうするつもりなんだ？」

「進路、ですか？」

「あと四ヶ月で三年になる。受験なんだぞ？」

受験と言われても。

どうでもいいのだ。

結局。

だから、

「進路は考えてます、一応」

適当に答えることにした。

(まあ、嘘じゃないし)

事実であることには変わりない。理解されることは、まずないだろうが。

「そうか」

意味深な声色に楓は思った。

(学校に来いって?)

「ところで、家で何してる？」

(……はずれ)

自虐的に心中で呟く。

「いえ、とくには……」

「やっぱり調子悪いのか？」

「……まあ」

「学校嫌なのか？」

少なくとも好きではない。絶対に。

「このままだと、授業に追い付けなくなるってことはもう分かるな？」

頷いた。

「明日、終業式があるから、来れたら来い」

担任はこういったパターンには慣れてないのだろう。

担任教師は動揺しきった声で、けれども単刀直入に言う。だが、

そして少女は紫衣を纏ふ

担任教師のキャリアを考えてみれば妥当な反応かも知れないし、若い彼に落第点を与えるのは酷なのかも知れない。そう適当に楓は担任教師を評価しつつ、

「努力します」

上っ面だけの返答を返した。

無論、上っ面だけの返答であるからして、

(明日は一〇時まで寝てられるな)

「良かった」

思わず楓の口から安堵の声が漏れた。

担任から美術室の鍵を借り受け、自分の絵を探してみれば三週間前と変わらぬ姿でそこに置かれていた。尤もうつすらと埃が被って汚れていたわけで、多少不快感があるが、人為的に絵が汚された形跡は見当たらなかった。悪戯で汚されると言うことよりも遙かにマシである。埃は丁寧に払えばいいのだ。

(……………)

さて、どうやって絵を運び出そうか、楓は考えてみる。

(抱えていく? ……汚れそうだし、人に見せられるような物じゃないし、何か包む物があれば……………)

そう考えたところで、楓は美術室を見渡してみた。

( …… ない )

ざっと眺めてみただけでしかなかったけれど、この絵を包めそうな袋の類は見当たらなかった。

( んんん…………… )

今持って帰らない、という選択肢もある。

だが、出来れば悪戯の標的にならないうちに撤収させたい楓であ

そして少女は紫衣を纏ふ

る。叶うことなら今すぐにも持って帰りたい気分なのだが、大切な絵を保護するための袋もなければ（美術室のクセに）包装紙代わりになりそうな紙すら見当たらない。

（気付かない私がバカだった）

自分の無計画さに呆れてしまう。

自己嫌悪に陥りつつも、絵が傷付くことを承知で強引に持って帰るか、それとも後日万全の体制を整えて改めて回収に赴くか、二つの案を天秤に掛け、しばらくして楓は決断した。

（今日は辞めて、また後でにしよう）

「良かった」

思わず楓の目が点になった。

美術室の鍵を閉めて、職員室に鍵を返しに行こうとした矢先だった。

「もう帰ったかと思っただけど、幼馴染みの勘は伊達じゃねえな」

ニツカリと笑う神田裕太が、廊下に寄っ掛かっていた。

「久しぶりじゃん。元気？」

「……まあ」

美術室の鍵を手中で弄びながら楓は平淡に言ってみせた。

だが、頬が熱い。身体中がほてって仕方が無かった。薄暗い校舎が本当に有り難い。

「部活？」

「絵、悪戯されてないか見に来てだけ」

冷静を、普段通りを装って楓は答えるも、心が慌ただしく揺れ動いていた。何だかくらくらしに来た。風邪でも引いたかも知れない。そう、わざと無粋でデタラメで酷くありがちな感想を抱いてみる。

ちよつとは気が紛れるかと思つての考えだったが、効果はないように楓は本格的に困つた。

「で？」

「？」

「イタズラされてた？」

「大丈夫みたい」

「で？」

「？」

神田のイントネーションは明らかに疑問系だったが、何を疑問に思つているのか楓は理解できなかった。そのまま何をすべきか見当も付かずにただぼんやりとしていれば、

「今度の土曜、ヒマ？」

「へ？」

思わず間抜けな声が出てしまった。

会話の流れからして、少し違和感を覚える。誰が絵の話から休日の話にシフトさせることを予測できようか、いや出来ない。

支離滅裂とまではいかないものの、やっぱり理不尽に楓は感じてしまう。少なくとも自分にはこの展開を読むことは無理だ。一応神田とは幼馴染みの間柄であつて、かなり気心の知れた中（とだけ言つておく）だ。けれども『指示語のみで膨大な本の中から少年が欲しい本を一冊選び出せる主人公の少女』的なお約束な展開は無理がある。

「土曜日？」

単純に考えて、今日が木曜日であるからして三日後だった。

ちなみに、明日が終業式。つまり冬休みに入るのだ。

「土曜日？」

もう一度楓は訊ねる。

「そ。土曜日」

予定はない。

少なくとも、現段階では。

そして少女は紫衣を纏ふ

「ないけど?」

「じゃあさ、どっか行こ?」

「誰と?」

「俺と」

「後は?」

それは反射的な一言だった。

何も考えず、突発的に出た一言。

「いいや。二人だけで」

直後。

爆弾が炸裂したような気がした。

夕焼けが眩しい。

そんな中、楓は何とはなしに思う。

(病気かも知れない)

だが病気じゃないということくらい、当の楓はしっかりと理解していた。矛盾していることくらいは分かっている。充分すぎるくらいに。

楓は何故だかむっとしながらも、帰り道を急ぐ。

未だに胸が潰れそうに緊張している。気を抜いてしまえばへなへなと倒れ込んでしまいそうな気さえしてきた。

今度の土曜日。

やられた。

よく考えてみれば、今度の土曜日は二月二四日、つまりクリスマススイヴだった。

クリスマススイヴ。

二人で出掛ける。

自然と『デート』という単語を連想してしまう。

(むう……)

経緯はどうあれ、そういった形で顔を会わせるんだと思っただけで、何だか妙に心配になってくる。何故だか分からないけれど、今度神田に会ったりしたら、死んでしまいそうだ。

(何か……)

と、既視感。

このような展開を、昔何処かで見たような気がしてきた。

(何だっけ)

少しでも気を紛らわせようと楓は集中する。

だが、元々『紛らわそうとしている物事』から派生したお話だから、紛らわすなんて無理なのだ。だが、例えそうだと分かっていたとしても、楓は必死になって(もしかしいたらムキになってかもしれないがとにかく)紛らわせようと努力していた。

(昔買った文庫本……、こんな展開があったような)

アレは確か『<sup>カエデウタ</sup>楓詩』という小説だったはずだ。

何気に自分の名前と同じ漢字のタイトルに引かれて、行き付けの書店で衝動買いしてしまった恋愛小説。ストーリーは平安時代、父親が左大臣であるプレイボーイの有力貴族の三男坊が、偶然通りかかった七条に小さな屋敷を構えていた身分違いにも程がある国司の姫君・楓に恋をするという話だった。主人公が恋する姫君の名前が自分と一緒にだったから、割と記憶に残っている一作の一つだ。

(何度も主人公が楓の屋敷に文を送り続けて、だけど楓はちらちらとした主人公が嫌いなんだけど)

熱心に口説き落とされ、知らず知らずのうちに芽生えていた恋心に楓が気付く、十五夜の日にあい約束をするが、

(だけれど主人公の父親が婚姻に猛反対)

主人公は父親を説得しようと画策するけれど、父親は聞く気を持たず、主人公を屋敷に閉じこめるが、

(十五夜の日、主人公は楓との約束を果たすために昔からの従者の

手を借りて屋敷から抜け出して)

二人は何日かぶりの再会を果たし、幸福を噛み締めていたその時  
(主人公の脱出を察知した父親が兵を連れて楓の屋敷に押しかける  
んだけど)

二人の美しいまでの強い絆に心撃たれた父親は遂に二人の婚約を  
承認し、

(ハッピーエンドでめでたしめでたし)

という話だった。

内容としては、多少ご都合主義な感じは否めなかったが、それ  
も何だか魔力的な面白さがあった。確かベストセラーだったような  
気がする。

(はあ。なんで思い出したんだろ)

全く、現在の境遇と小説の内容は似ても似つかない。強いて共通  
点を上げるならばヒロインのお姫様の名前が自分と同じということ  
程度。なのにどうして唐突にこの話が頭に浮かんだのだろうか。楓  
自身、無意識にハッピーエンドの結末を期待しているとも言っ  
たのだろうか。

当たり前だと思っていた自身の存在を根本的に否定され、深く少  
年が口にした言葉を考察せず、その結果、両親ばかりか一族諸共を  
少年に殺され、異常な力を手に入れ、そして人を殺めた人間が、人  
でなしの自分にハッピーエンドが訪れるわけがあるだろうか。常識  
的に考えて、そんなシンデレラストーリーは核戦争で人類を初め、  
あらゆる生命が死滅した地球で、瓦礫の下で気絶していたおかげで  
たった一人生き残ることが出来ました、というくらいの奇跡でも起  
こらない限り、楓に対して有り得ないレベルだ。どちらかと言えば  
有り得てはいけない。道徳的に考えれば尚更だ。

(うつ……。で、でもな……。っ、ち、違う)

楓は認めたくなかった。認めるわけにはいかなかった。

認めてしまえば、全てが根本から揺らぎ、歪み、崩れてしまいそ  
うな気がしていた。

ここで『そんなこと』を考えているヒマなんて楓にはない。一日でも早く、少年を殺せる力を身に着け、家族の復讐を果たさなければならぬのだ。楓以外にその仕事を担えるか、と言われればまじいらない。

「違う……」

あんまり馬鹿な想像をしてしまったものだから、心がますます荒れてきたような気がした。

（神田とは……）

きゅと、楓の胸の辺りが疼いた。

楓自身、実はこの感情を認めることはそう抵抗はない。

それどころか、感情に抵抗する方が釈然としないのだ。出来ることならば、叶うことならば、もうずっと、会って、話して、笑っていたかった。何もかも忘却の彼方に吹き飛ばして、うんざりするほどに。それだけで良かった。

だけど。

「楓？」

ふと、自分の名を呼ばれた。

自然と、楓は声がした自分の背後へと振り返ってみれば、

「和美」

黒城和美が。

そこに立っていた。

何故だが、満面の笑みで。

第二六譚 抗う羊（後書き）

人が人である限り、きつとエゴは消えることはないのだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第二七譚 嗤う狼

「楓」

ふっと、楓の後ろで黒城和美は笑っていた。

「……和美」

正直な感想を言わせて貰えば、今現在最も会いたくなかった人間の一人だ。

楓はどう和美に接したらいいのか分からない。

あの会話を聞いてしまったのだ。

例えそれがデタラメかも知れない。あの会話の信憑性を証明できる確かな根拠なんてどこにもない。そう判断するのが妥当と言えるが。

信じてしまったのもまた事実だ。

「今日学校来てたの？ 来てたんなら教室来れば良かったのに」

和美は楓の傍らに寄り笑った。和美は懐疑的になっている楓を知ってから知らずか、はたまた故意なのか恣意なのか、いまいち判別が付かない。

「……ゴメン、増川に呼び出されてたから」

「災難だったじゃん」

会話が、途切れた。

確実に空気が冷えていき、周囲から音が消える。

外にいるクセに、車の音一つ聞こえてこない。

まるで世界中で自分と和美二人だけが置いてけぼりになってしまったような感覚。

こうなってしまった以上、楓はこの沈黙を破る勇氣なんてなかった。

この雰囲気壊すということは、きつと想像よりもずっと勇氣の



衝撃的な和美の暴露に、もう自分が戸惑っているのかすら、分からない。

「でもさ、私は楓が神田のこと好きだって知ってた」  
どうして。

楓がそう呟くと和美は微笑んでいた。

「あんた意外と単純なんだよ。ポーカーフェイス気取ってるクセに考えてること見ようと努力すればすぐ分かる。だから、楓が一人ぼっちになっちゃったって聞いたとき、チャンスだと思った。だって思ってた以上にへこんでたんだもん。無理ないと思うけどさ」

表情は笑っていた。

けれど、口調は女子高生の物とは思えない程、冷めた声だった。  
ゾツとした。それは和美の冷めた声だけではなくて、雰囲気全体に。

もし毎晩のように行われている『レッスン』がなかったら、ただ恐怖に震えているだけだっただろう。確実に背筋を凍らせて何も考えられなくなっていただろう。和美を中心に広がっている雰囲気はそんな物だ。

「楓を何処か安心出来るような所へ連れて行くことを提案したのも私。さすがは幼馴染みだけ会って楓の好みを理解してるよ、神田は後ね、楓から目を離さない方が良くって言ったかな」

大方、楓は理解し始めていた。

神田が楓をあのお古びた喫茶店に連れて行ったのは和美のアドバイスを受けていたから。

神田がサボっている楓の様子をわざわざ屋上まで見に来ていたのは和美のアドバイスを受けていたから。

「で、満を持して楓をデートに誘えばって昨日言ったの」  
「和美……」

「もしたらずくにメールが返ってきた。誘えたって」  
嬉しかった。素直に。

歡喜が満ちて心が震えた。不安で堪らなかったのに、全てが綺麗

そして少女は紫衣を纏ふ

さっぱり吹き飛んでしまった。楓はこみ上げる喜びを抑えきれない。

「それでね、楓。楓にお願いがあるの」

「お願い？」

風が一瞬凪ぐ。まるで時が止まったかのように楓は感じた。

和美を見れば、その表情は凜としていて、同性でも見惚れてしま  
いそうなほど凛々しかった。

「神田のことなただけだね」

「うん」

楓は頷く。

和美は楓が頷いてからワントempo置いて、

「神田のこと、諦めて欲しいの」

急転直下。

あまりの一言に言葉を失った。

「神田のこと、諦めて欲しいの」

分かっていたはずなのに、改めて楓は衝撃を受けた。

「私ね、相談受けてるうちにおかしくなっちゃったの」

呆然とする楓に構わず、和美は告げた。

「いつの間にか、相談受けてることが楽しくなっちゃったの。どうしてって言われれば、よく分からないし困っちゃうけど。良く分からないいうちに、神田がどんどん私の心に入ってきてちゃった。今でもそうだよ？ 神田のことを考えると、胸が苦しい。だけどね、苦しいのに、嬉しくなるの。分かるでしょ、楓。自分でもどうしてそうなっちゃったのか分かんないけど、これはきつと恋ってヤツ」

楓はもう何も言えなかった。

さも当たり前のように続ける和美。役者が一枚も二枚も上だと思  
い知らせる。

「か、……ずみ」

まともに答えられなかった。

「最初はね、こんな事言うつもりなんてなかった。だけどね、イライラしてきた。だって自分が好きな人が『楓なんか』に恋してるんだもん」

胸が締め付けられた。

胸が、痛い。

イタイ。

「楓、神田のこと諦めて。私は楓の何百倍もの立派な人間なの。女としても、人間一個体としてもね。だから神田が願うこと全部叶えてあげられるの。そしたら神田は幸せになれし、私だって幸せになれる」

自信たっぷり、和美は続けた。

「だけど、楓なんかと神田が付き合っちゃえば神田は幸せになれるのは目に見えてる。だったら私に神田を譲って。神田のこと、さつさと諦めてよ。楓はさ、神田のこと好きなんでしょ？ なら神田の幸せ考えて私に譲るべきだよ。楓は身を引いて」

雑音が聞こえてくる。

聞きたくもない罵詈雑言がノイズに変換されて意識に押し寄せる。「そもそもさ、アンタみたいなどうでも良い存在は私みたいな立派な人が付いてなきゃダメなの。私みたいな立派な人が居て、初めて

存在を認めて貰えるの。私の庇護がなきゃアンタなんて誰も見てくれない。楓、アンタはどうでもいい存在なの。だいたいさ、考えてよ。誰が納得すると思ってるの？ 私が、この私の好きな人が、せっかく巡り会えた『恋できた人』を楓なんかに取りられたなんて。誰も認めないよ、そんなこと。そんな不条理が起こっちゃ行けない。有り得ない。そんなことあっちゃいけないの」

もう、一ヶ月近く前のことだ。

自分は存在してはいけない存在だと知らされた。

殺される道、生き残れる道。少年によって示されたたった二つの選択肢、生き残る道を選択したけれど、その代償はあまりにも多く、あまりにも絶大なもので。

復讐を誓った。他でもない。家族を殺めたその少年に。

やがて、やがて力を付けた。流石に仇でしかない少年のようにまどとは言わないけれど、格段であって確実に。今ではもうあの少年に不意討ちの一撃を喰らわすことさえ出来るようになった。

そして、人を殺した。初めて、一人の人間から全てを奪い去った。他でもない。力で。状況からして、法的には正当防衛だと言いつけるかも知れないけれども、殺した。殺めたことには変わらない。それは絶対的な事実だ。

「私は神田のことが好きで堪らない。大好きなの。愛してるの。神田だってね、私が神田のこと好きだって気付けばすぐに私を好きになっってくれる。そうならたらさ、楓は傷付くでしょ？ だからよ。私は楓のことを考えて忠告してあげてるの。だから楓、神田のことは諦めて。デートの日に会った瞬間に『私は神田裕太のことが嫌いです。さようなら』って言うって。言っつて。絶対言っつて。今まで面倒見て貰っていた私のために、神田のために。せっかく守ってあげたんだからさ、せめて恩返しくらいはしてよね」

爪が掌に食い込んでいく。

頭が、炸裂した。

ここが道路の真ん中で人目に付きやすいとか、人を殺してはいけ

そして少女は紫衣を纏ふ

ませんか、ここは冷静に話し合つべきだとか、そう言った綺麗事が纏めて全部木っ端微塵に吹き飛んだ。

楓は一步前に踏み出す。

もう、どうでもいい。

迷う気持ちさえ、とっくの昔に消え失せている。

今までキリキリと握り締めていた利き手をやんわりと解き、振り下ろした。

目の前で和美が固まっているが、気にしない。

否、気にしてやる義理もない。もはや。

握り締めた大鎌を、楓は大袈裟に振り上げた。

目標は、首。

嘗て振り上げていた『不殺論』なんて忘却の彼方に吹き飛ばされている。

それを自覚して尚、

殺す。

もはや楓の頭にはそれだけしかなかった。

第二七譚 嗤う狼（後書き）

後悔なんてなかった。ただ殺したかった。ただ許せなかった。本当に、それだけだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第二八譚 踊る獅子

「邪魔しないでよ」

返ってきた手応えはあの『人を壊す』独特なモノとは似ても似つかぬモノ。

楓は睨む。

みつともなく地面にへたり込んでいる黒城和美と、彼女の命を刈り取るうとした大鎌の間に割って入ったその人物を、楓は殺気を全開にして睨む。

「楓ちゃん。ちよつとは冷静になろうよ」

楓の大鎌は、ギリギリの所で止められていた。

止めたのは、一本の腕。下膊部で、和美を庇うような体勢だった。誰に、という問いは無粋だ。考えなくとも分かる。

楓の『紫衣』を止めたのだ。超人的な『紫衣』での一撃を止められる人間と言え、一人しかいない。

「邪魔、しないで」

「楓ちゃん。場所を考えてよ」

煩わしい。

構うものかと、楓は力を込めた。

「ちよ、楓ちゃん」

グググッと押される少年の腕。

少年は慌てて楓を呼ぶけれども、楓は彼の要求に応じるつもりはない。

「待ってよ、待ってって」

慌てていた。誰でもない。あの『追捕使』の少年が。そんな今まで見たこともないような不思議な事態を目の当たりにして、楓は初めて沸点がやや下がった。

「何よ？」

力を緩めるが、それでも押し合いは続いている。

「楓ちゃん。場所を考えようよ。こんな路地の外れだとしてもさ、人に見られちゃすぐ通報されるよ？」

「……うるさい」

「あのね。楓ちゃんが思っている以上に『殺し』って繊細なの。特に今は警察の科学捜査が発達してるから、昔みたいにある程度強引な誤魔化しなんて絶対に通用しないし。面倒事を避けるためにはいろいろ隠蔽工作とかしなきゃいけないわけ。分かる？」

論点はそこだった。

結局、そんな物なのだ。どうでもいいことだけれども。

「そんなことくらい分かってる……」

「じゃあさ、この場はオレに任せてよ」

「は？」

「フオーしなきゃいけないでしょ？ やり方は後で『レッスン』の中でちゃんと教えてあげるからさ、ね、ね？」

一瞬だけ、少年の背後に座り込んでいた和美に視線を向けた。

失神する、その寸前と言ったところか。焦点も定まらず、ぼやっとしている。一体全体、さっきまでの勢いは何処へ行ったのだろうか。そう考えると無性にオモシロクなってくる。思いつきり嘲笑しなくなってくる。なんだか、もう満足だった。

「分かった」

眩き、楓は大鎌を消した。

そんな楓の対応に満足したのか、少年は一息付いた。

「じゃあ楓ちゃん。後始末はオレに任せて先に家帰ってて。」

あ、そうだ。忘れるトコだったよ、そのの袋も一緒に持って帰ってね」

少年が指さした方を見れると、そこにはコンビニの袋が無造作に置かれていた。

「何それ？」

「プリン。オレの夕食のデザート」

「あっそ」

楓はウンザリしながら、すくい上げるようにしてコンビ二袋に入っていたプリンを回収してそのまま立ち去ろうとしたけれど、ふと振り返った。

「和美」

和美を射抜くようにして、出来るだけ冷酷で残酷な口調になるように心がけて。当の彼女は状況を把握できていないようで、恐怖に身体を震わせていた。そんな和美に、楓は告げた。そんな和美だからこそ、楓は告げた。

「確かに私はそんな存在かも知れないけどさ、これっぽっちも譲る気なんてないから。それにさ、私は和美が『優れた人間』だったら『優れた人間』なんかにはなりたくないかな。和美の言う『優れた人間』がどんな人間だか知らないけど、イイヨ。和美みたいな人間が『優れた人間』だったら和美と同類になんかなりたくないしね」  
明確なりアクションが返ってこない。

無駄に格好付けて、ドラマのヒロインにでもなったつもりで放った言葉だっただけに何もリアクションが返ってこないのは本当に面白くない。ジワジワと腹立たしくなってきた。

和美側から言わせれば、楓の宣言に構ってる余裕なんてこれっぽっちもないだろう。理解できない現象に、恐らく味わったことのない『死の予感』が殺到して、思考がパンクしているのだから。かつて最初に少年と出会ったとき、自分がそうだったから。

「人殺しは確かにイケナイこと。だけど憎しみって想像以上に激しくて、美しい。そんな憎しみを止める手段なんて、この世にあるのかな？」

それは誰に告げた言葉でもなかった。

楓は微笑む。

微笑んで、通牒した。

「バイバイ。良い夢見てね」

真新しい朝刊を広げた。

(一二月、一九日か……)

早いもので、楓の世界が一変してからもう一ヶ月近く経とうとしていた。

(それにしても、まあ動じなくなっただな……)

それは決して楓が強くなったからではなく、慣れてしまったからに他ならない。

他人事のように楓は自己評価を下し、記事に目を向ける。

北沢家が取っている新聞は全国紙だった。

一面トップには、例の不適切発言で窮地に立たされていた厚生労働大臣が更迭されたとの見出し。やっぱりクビだった。その下には中東で起こった爆弾テロで二〇〇人が死亡、という記事が続く。

続いて楓は新聞をひっくり返してテレビ欄をチェックする。

いつもも見ていたドラマが今日はクイズ系特番で潰れていた。かなり楓好みだったドラマだけに、がっかりを通り越して苛立ってきた。テレビ局にイタ電してやろうかと、なかなか犯罪じみたことが脳裏を過ぎるも、とりあえず僅かな良心を働かせた。

「おはよ、楓ちゃん。ごはんできました？」

「まだ」

ふわふわと欠伸を隠すことなく、少年がリビングに入ってきた。

普段と違うパターンに、ほんの少しだけ楓は新鮮みを覚えた。

「寝坊？」

「昨日の夜はいろいろ大変だったからさ」

楓の嫌味を物ともせず、或いは嫌味だと理解していないのか、とにかく無邪気に少年はもはや定位置となってしまうたソファアに腰

そして少女は紫衣を纏ふ

を沈めた。

「ねえねえ、楓ちゃん、ごほん」

「うっさいな……」

折角社会の出来事に目を向けている最中なのに、どこまでこの少年は身勝手なのだろうか。そんなことをぶつぶつ呟きながら楓は新聞を捲って

ピタリと、動きを止めた。

が、しかし。

直ぐさま何事もなかったかのように溜め息を付いて、

「これ、アンタの仕業でしょ？」

新聞を満員電車で読むようなコンパクトなサイズに素早く折り畳んで、少年に提示する。

「え？ ああ」

突き付けられた当人は一瞬だけ目を丸くするも、

「そつだよ」

何事もなかったように返答する。

問題のその記事は、地方欄にあった。

見出しは『放課後の凶行』。

内容は、すぐ近くの住宅街の路地で女子高生二人が他殺体で発見されたらしい。警察は遺体や現場の状況から強盗殺人事件と断定、捜査本部を設置した、とのこと。

「始末するの和美だけで良かったのに」

基本的に、楓の興味はそこで終わっていた。

「初めはそのつもりだったんだけどさ。丁度片付けようとしたら夕イミング悪く邪魔が入っちゃてさ、やっぱりそんなシーンを見られちゃいけないじゃん？」

「それで、斬っちゃったんだ」

楓はパラパラと新聞を捲りながら、

「まあね。シナリオは強盗殺人事件ってことで。どう？」

手品のように、何処からともなく少年は見るからにブランド物と

思われる高そうな財布を二つ取り出し、ヒラヒラと振った。

「ちよつと、警察が来たらどうするの？」

「最近の女の子ってお金持ちなんだね」

嬉々と財布から五千円札やら万札やら取り出している少年に、思わず楓の口から溜め息が漏れた。

「そんな『私が犯人です』って言ってるようなモンだと思っけど？」

「でもさ、お金はあつて損ないでしょ？」

「まあ、ね」

適当に楓は同意する。

どうでもいいことに、そう長い時間構っていられるほど楓は大人ではない。

第二八譚 踊る獅子（後書き）

真っ直ぐだったあの頃。腐りきった現在。どっちも自分、どっちも  
事実。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第二九譚 今宵は月が満ちていて、

一筋。

高層ビル街の一角、立ち並ぶ高層ビルのとある一棟の屋上で銀光が闇を裂き、一步遅れて強烈な刃音が轟いた。

漆黒の影が踊る。

力任せに少女は得物を振り抜いた。大鎌が暴れ、銀が吹き飛び、空を舞う。

「そろそろ、レベルアップってとこかな」

少女の一撃によって吹き飛ばされた少年は宙を舞いながら歓娛の声を上げて、そして重力を最大限利用し、落雷のように少女を標的にして落下。銀が月光を反射した。

対して少女は大鎌を振り上げ、迎撃態勢を整える。

刹那、

「くッ、あ！」

少年の一撃を受け、少女は体勢を崩し、思わずその場から退く。退いた少女を少年は追い、銀を突き出す。

その軌道は無駄なく少女の心臓を射抜くモノ。

再度、すっかり闇に染まった街に金属の衝突する音が鳴り響く。

「ふ、あ……」

「まさか受け止められるとは思わなかったよ、楓ちゃん」

突きを、大鎌の湾曲した刃を盾にして少女は何とか一撃を凌いでいた。

「うる、」

刀の切っ先を受け止めている大鎌を、少女は力強く握り締め、

「さいッ！」

爆発。

そして少女は紫衣を纏ふ

少女の身の丈と同程度だった大鎌が、膨れ上がった。  
「え？」

少年の目が点になる。

少女の行動は酷く、あまりに酷く乱暴だったが、  
が、

「わ、ちょ……、か、楓ちゃん、ここがどこだか」

同時に酷く効果的だった。

少女の握る大鎌は文字通り『膨れ上がった』。心臓を狙った一撃を盾代わりにして凌いだ当初は身の丈ほどだったが、今は大型観光バスサイズまで膨れ上がり、それを難なく振り上げ、

「さああああああ ツ！」

少女の絶叫が夜を突き、叩き下ろす。

莫大な音の渦が炸裂した。戦場が今現在一体何処にあるのか、その一撃を振り下ろせばどのくらい方々が損害を被ることになるのか、そんなことはとっくの昔に少女の頭から消え失せていた。圧倒的なエネルギーが何の躊躇いもなく少年に向けて振り下ろされる。

鼓膜が引き千切られるような凄まじい轟音の後に、四囲に街に煙が立ち昇る。

ビルが僅かに揺れる。

が、倒壊しない。

倒壊しても仕方がない一撃を叩き込んだのに、倒壊しない。

「成長したね、楓ちゃん」

腕首を刀の峰に当て、少年は少女の一撃を食い止めていた。

倒壊しなかった原因が嗤った。

「うっさい」

少女はふて腐れたように吐き捨てた。

全身全霊の一撃だったのに、あっさり受け止められていたのだ。

満足できるはずがない。

やがて土煙が晴れる。

屋上の惨状は目も当てられないほどだったが、二人はさして気に

そして少女は紫衣を纏ふ

「していないかった。  
「じゃ、今日はこれまで」

「所沢？」

「うん。そこに『異常因子』がいるんだ」

朝食であるトーストを嚙りながら、少年は淡々と告げた。

「斬るの？」

「もちろん。だってそれが『追捕使』の役目だもん。見逃すわけにはいかないよ」

「所沢にその人がいるの？」

「うん。名前は大月ミナミって言うんだって」

「女？」

名前の感じから考察してみれば、少年は頷く。

「二四歳なんだって」

「二四歳で訳も解らず殺される、というのは些か理不尽すぎるかも知れない。」

あくまで他人事のように楓は思いながらトーストにバターを塗る。

（二四つてことは、……OLかな）

『異常因子』。

それはアカシックレコードから外れた者の総称（蔑称ではないかと楓は思ったりしている）である。

アカシックレコードは宇宙や人類の過去から未来までの歴史全てを記録している。言わば世界が成り行くためには絶対不可欠な存在だ。だがしかし。完璧なアカシックレコードにも時たまバグが生じるらしい。そのバグが世界に現れれば『異常因子』と呼ばれるようになるのである。

(彼氏とか、いるのかな)

そのアカシックレコードの欠陥である『異常因子』は早々に始末しなければならぬ。コンピュータの基本プログラムにエラーが見つければ早急に修復するように。やがて『異常因子』はアカシックレコード全体に悪影響を及ぼす存在になるからさうだ。そしてその修復を担う者が『追捕使』だ。基本的に『追捕使』は『異常因子』を始末するためなら手段を選ばない。『追捕使』に発見された『異常因子』を待っているのはただ一つ、死だ。

(その人、カワイイのかな)

皮肉めいたことだが『追捕使』は『異常因子』の中から選抜されるようだ。

元々アカシックレコードに記されていない『異常因子』は潜在的に普通の人間、つまりアカシックレコードに記されている人間とは一線を画すような力を秘めていることがある。その力を『紫衣』といい、その力を持つ者は『追捕使』になって生きる道を示される。が、少年曰く『紫衣』を纏える『異常因子』は早々見られないらしく、そんな『追捕使』に成れる『異常因子』は希少らしい。

だから楓は本当に幸福だったのだ。

幸福、だったのだ。

(けれど代償は)

果てしなく、想像を遙かに超えて大きく残酷なモノだった。

だから、誓った。

絶対に、この境遇を呼び込んだ少年を殺す。

そして自分自身にもケリを付ける。

だが。

(本当に、やれるの?)

疑問がついて回る。

先日少年が見せた圧倒的な武力に残酷性。

無理だ。

アレは、無理だ。

殺せない。

逆に殺される。

シマウマがライオンに挑むような物だ。あの少年に牙を剥けば確実に喰われてしまう。

(私は……)

復讐する。

手段を選ぶつもりはない。殺しだつて厭わない。

骸を積み上げることによって手を血で染めることによって為されるのなら、是非ともその手段を選ぶ。喜んで、選ぶ。その『大月ミナミ』を殺すことで一步近付くのなら、躊躇いもなく大鎌を振れる。それが、自分だ。

長い間、見ようとしてもしていなかった『北沢楓』の本性が、これ。

善人の薄皮に包まれた『ホントウノジブン』は酷くドライで、酷く残酷で、人でなしなのだ。

だが、絶対的な力の差があつた。殺したい。

だが、殺せない。

(いつになったら、)

少年に勝る力を手に入れられるのだろうか。

思えば思うほど、考えれば考えるほど深みに填っていく。

ジレンマに陥ってしまう。

(私は、)

何をしたい？

(私は、……)

どうになりたい？

(私は　　ッ！！！！！！)

何かが壊れていく。

どんなに強く握り締めようとも、ふとした拍子に逃げていく。疎ましかった。

願い一つ叶えられないでいる自分が、本当に疎ましかった。

そして少女は紫衣を纏ふ

『ねえねえ、あのオツキサマがほしい』

夏。

ずっとずっと前、花火大会の帰り道だ。

アイツと二人一緒に歩いた夜道。

手を繋いで、歩いていた。今でもしつかりと、あの小さな掌、その暖かさは鮮明に残っている。思い出せと言われれば何時何時でもすぐに思い出せる。今から考えてみるとやっぱり『あの辺』から始まったのだ。

当時、空には綺麗で大きな満月が浮かんでいた。

それは凄く明るくて、街灯がなくても夜道を歩けるほどに、優しい光だった。

昔から方向音痴だったから、よく迷った。だけどこの月が常に空にあればもう迷わないかも知れない、そんな風に錯覚させるような大きな満月。

『ね、オツキサマがほしい』

『オツキサマ?』

『うん』

『あのね、オツキサマってね、もっとね、ずーっとたかいところあるんだよ』

『そーなの?』

『うん。だってさ、てをのばしたってとどかないじゃん』

『じゃあ、やねにのぼろつよ』

『やね?』

『うん。やねならオツキサマにてがとどくでしょ』

『やねにのぼったつてむりだよ』

『ほしいほしいほしい。なんとかしてよ』

そうやって、駄々を捏ねた。

小さな頃から、相当我が儘な子供だった。

でも。

近所のお爺ちゃんやお婆ちゃんや周囲の大人たちはみんな良い子だつて言っていた。けれど、本当はそんな『良い子』じゃなかった。どちらかと言えば、悪い子だった。いや、裏表の激しい卑怯な子だった。その証拠に、余所の人たちの前では良い子を演じていて、けれども裏では母親に駄々を捏ねたり、大好きなアイツに無理な注文付けて困らせたりしていた。何でもかんでも欲しがって、とんでもないことを平気で叶うつて信じていて、自分は何でも出来るって思っていた。

そんな身勝手な考えが成り立っていたのは、やっぱり周囲がみんな甘かったからかもしれない。

両親はシツケに厳しい人だったけれど、逆に躰けられたことさえ守っていれば娘に甘い両親だった。だから我が儘に最初はいつも泣けるけれど、何だかんだ結局大抵のことは許してくれた。大好きなアイツも、いつも我が儘を叶えてくれた。そんな周囲の甘さにも似た大きすぎる優しさにドツプリと填り込んでしまつて、長い間『そんな自分』に気付かなかつた。

『じゃあにオヒメサマになればいいよ』

『オヒメサマ?』

『オツキサマのオヒメサマだよ』

『オヒメサマ? オヒメサマつて、オツキサマにすんでる

の?』

『えつとね、オツキサマにはオヒメサマのオシロがあるん

だつて』

『じゃあカエデ、オヒメサマになる』

『カエデヒメだ』

『え？』

『カエデちゃんオヒメサマになるんでしょ？ だからカエデヒメって呼んであげる』

『うん！ ありがとうユウちゃん！』

でも、小学校に入学してから思い知らされた。

自分じゃどうしようも出来ないこと。

頑張っても出来ないこと。

そんな事態が頻発していた。

まるで、我が儘だった幼い自分に制裁を加えるように。

あの頃、とんでもなく我が儘な子供だった。何でも欲しければ欲しがって、それを周囲は叶えてくれた。だから、とんでもない錯覚をしてしまうようになっていた。いつの間にか、本気で自分の欲しい物は望めば何でも自由自在に手に入る、そんな幻想世界は根底から木っ端微塵に壊された。そしてようやく気付いた。初めはとても小さな我が儘だったのに、それがいつしかどんどんどんどん大きな我が儘になっていったことを。

そして幻想世界から現実世界に戻された自分は、真っ直ぐに生きていくことが出来なくなっていたのだ。

今宵は、綺麗な満月だった。

何気なく二階にある自室のベランダに楓は裸足のままに出ると、そのまま真っ直ぐ飛んだ。

(月、か……)

音もなく楓は屋根の上に着地して想えば、今でも鮮明に脳裏に響く幼き自分の声とアイツの声。アイツはどう思ってるか検討もつけないけれど、楓にとっては良い思い出。そんな思い出を脳裏に浮か

そして少女は紫衣を纏ふ

べて、

(オツキサマ……)

手を、伸ばす。

今なら、届くかも知れない。

「　　なんてね」

嘲笑すると、不意に気配が膨れた。

「楓ちゃん」

背中からの声。

「そろそろ『追捕使』のお仕事行くよ？」

「わかってる」

そして少女は紫衣を纏ふ

第二九譚 今宵は月が満ちていて、  
(後書き)

キミシニタマフコトナカレ

「なんだ、それは？」

「戦利品。指輪だよ」

「金にするつもりか？」

「当たり前でしょ。ちよつと血で濡れちゃってるけど拭けばいいし。きつと良い値段着くと思うな」

「ふん。それにしても、思ったより抵抗が激しかったようだな？」

「は？」

「裾に返り血。らしくないな。お前なら返り血一つ浴びずに片付けられると思っておつたに。所詮は懦弱な人間かとばかり思ってたが……」

「オレだってね、手を抜いた覚えはないよ。相手はヤクザとか警官とかどうでもいいヤツらじゃなかった。苦しんで死んで欲しくなかったから、一撃で決めようと思ったのに下手に動くからさ」

「貴様の腕も鈍つたか？」

「バカじゃないの？ オレの腕が落ちるわけ無いでしょ？」

「さあな。分からぬぞ？」

「……、」

「……、」

「……、」

「……、」

「……『押領使』？」

「何時ぞや、話した昔話を覚えているか？」

「ん？ ああ、勿論。オレがお師匠様殺したときだろ？」

「覚えているなら止めておけ。末路は同じだ。貴様は『追捕使』となった者を縛り付ける永遠の螺旋に捕らわれているだけに過ぎない。その『抗おうと行動していること自体』が螺旋の一部なのだ。余は

今まで歴代の『追捕使』とこの世界を渡り歩いてきたが、誰一人として永遠の螺旋から逃れられた者はいなかった」

「その話は聞き飽きたよ。でもさ、だからってオレが出来ないって証拠はないでしょ？」

「まあ、な」

「オレはやるよ。あの頃はオレも、そしてお師匠様さえも未熟だった。だけど今のオレがやったらどうなると思う？ 今のオレがやったら成功する。みんな幸せになれる。そう思うでしょ、ね？」

「……貴様」

「アレ？ 羨ましいの？」

「良い。分かった。最早止めぬ。好き勝手、気の済むまでやるといい。余は余で勝手に動くとする」

「勝手にして。ただし、オレの邪魔はしないでね」

命が一つ、またこの世界から零れ落ちた。

最愛の、命が。

彼は征く。

斬り捨て、挽肉にした亡き骸を置いて。

愛刀の血糊を払い、引き裂かれた骸を跨いで。

そして。

その事実を知るものは、まだ誰一人としていない。

そして少女は紫衣を纏ふ

行間 三(後書き)

分かり合えてるかなんて分からないけれど、その手を掴まずにはいられなかった。

そして少女は紫衣を纏ふ

### 第三〇譚 るくでもなく素晴らしいこの世界

当然だが、表があれば裏もある。

そして光が強く輝けば、闇もその分深みを増す。

そこは、寂れつつもネオン煌びやかな夜の駅前の繁華街だった。行き交うのは会社帰りのサラリーマン風中年男たち。髪型をバツチリ決めている少年に少女、ホストと思われるアイドル顔負けの男や、一目で水商売だと分かる格好の女たちも忘れてはいけない。皆々揃ってアルコールが入っているらしく、馬鹿みたいに大きな笑い声がそこら中で沸き上がっている。少年たちも同様に、アルコールの有無は判別しがたいけれども大声を張り上げて徒党を組み、ゲームセンターやらカラオケボックスやらにフェードアウトしていく。

「ひ、」

そんな『向こう』から伸びている一本の路地。

雑居ビルとビルとの谷間に出来た細く薄汚れた路地に、女の嗚咽混じりの悲鳴が響いた。けれどその声は『向こう』の喧騒に掻き消され、誰一人として気付いた者はいない。『向こう』を歩く連中に女のSOSが届くことは残念ながらもなかった。いつだってそうだ。弱者の声は他人に届くことはない。歴史が声高々に証明している通りだ。

「ひぎ、ああ……」

両足を真っ赤に染めて、その女の逃げ様はあまりにも無様だ。芋虫のようである。

彼女が動いた道筋は一目で分かる。女が蠢く度に、まるで絵の具が足りない絵筆で幼稚園児が描くような川でも描いているようなタツチで薄汚れた硬質な地面を染めていくから。

「待ってよ」

そして少女は紫衣を纏ふ

追う、銀の刃。

持ち主は必死に地を這う女と対照的に淡々とした表情だった。逆にそのあまりに淡泊なりアクションは恐怖すら抱いてしまう。

「あ、い、痛いッ、熱い！ いやぁ！」  
続く悲鳴。

両足ばかりではなく、右腕を斬ったのだ。恐らく、利き手を。

「『世界』は貴方の存在を知らないんだ」

小刻みに悲鳴を上げる女。その女の悲鳴を何とも思っていないのか、淡々と告げた。

「だから、オレは始末する。簡単に言うとな、そう言うこと」

のたうち回る女に対して、笑みの一つも浮かべずに。

「痛い、痛い、痛い、痛い……」

「うん、分かるよ。死にたくないってことは分かってる」

次第に小さくなっていく女の悲鳴。まるで神が救われない哀れな子羊に理解を示したような荘厳な口ぶり。反吐が出る。他でもない、その銀の持ち主に。

「でもね、残念なことに貴方は『世界』に記されてないし、どうやら生き残るために必要な切符を持っていないんだ」

激痛で意識が朦朧としてきたのか、女は虚ろな目でこちらを睨んでくるけれど、そんな虚ろな目で睨まれても幼児一人ビビらすことは出来ない。寧ろ、尻込みするどころか近くに行つて『大丈夫ですか？』とか『救急車今来ますからね』とか言つてやりたくなる。

「い、……や」

絶望なのだろう。

以前自分も味わったことのある『この手の絶望』は、殺されるかもしれないという本能に反する絶対的な恐怖は、そう簡単に拭い去れるような甘いものではない。何度も何度も、しつこく、大拳して襲い掛かつてくる恐怖は発狂するか、逆に自暴自棄になるか、そのどちらかではない。

「こ、ない、でえ」

そして少女は紫衣を纏ふ

弱々しく、刀の持ち主を睨み付ける視線。

彼は刀を女の首元に当て、

「どうやら、貴女は切符持ってないみたいだね。すぐに楽にしてあげるよ」

少年は、嘆息。

「今まで無駄にいたぶってゴメンナサイ。 さようなら。良い夢を」

最後まで一貫して平淡な口調に平淡な表情。

刹那、彼は女の首を刎ねた。

「以上。これが『追捕使』のお仕事だよ」

流れるような鮮麗された動作で少年は血糊を払うのも早々に、腰元の鞘に銀の刃を収めた。

「でね、ここで注意点が一つ。殺すときはね、出来るだけ酷たらしめ殺し方をすること。一昔前の拷問みたいな感じでね。……理由は分かる？」

「分かりたくもない」

忌々しそくに、楓は言う。

「理由はね、楓ちゃんが一番よく分かっていると思うけどな？」

「……」  
「楓ちゃんがそうだったように、アカシックレコードに記されていない『異常因子』の中には『紫衣』を纏える逸材がいるんだ。その逸材は『追捕使』になる資格を持っているんだよね。丁度今の楓ちゃんみたいだよ」

さっきまで恐怖すら覚えてしまうほど無表情で冷酷非道だったのに、何でこんなに感情豊かに語れるのだろう。楓は冗談を抜きにし

てそう思う。

「楓ちゃんはさ、オレに教えられる前に自分が『異常因子』だって気付いてた？」

「気付たわけではないでしょ」

即答する。

当たり前だ。そんなこと事前に把握していたら、まともに生きていけない。他の人がどうかなんて楓には分からないけれど、少なくとも楓だったら普通に振る舞うことは無理だ。

「オレみたいな『追捕使』に言われなければ『異常因子』は自分の存在が異常だなんて思っていないんだよ。当たり前だけど『紫衣』のことなんて知ってるわけもないんだ。……基本的にはね」

「基本的には？」

「うん。ま、その話は追い追いつて事で」

釈然としない楓だったが、

「とにかく教えて上げなきゃいけないんだよね。『あなたはこの世界に存在してはならない存在「異常因子」です。だから世界の安定と崩壊を防ぐために死んでください』って。さ、ここで問題です。

『紫衣』を纏うために最も必要な物ってなんでしょう？」

無駄にクイズ形式だった。さつさと教えるよ、と心荒れる楓だったが、ここでこの少年のご機嫌を損ねると更にめんどくさいことが起きそうな気がしたから、とりあえず苛立ちは奥底に押さえつける。

「……感情、でしょ？」

「正解。『紫衣』を纏うに必要なのはその人個人が抱いている最も強烈な感情なんだよね。そんな感情はやっぱり死ぬ、って言うか殺される直前に沸き上がるんだよね。今まで押さえられていたとか、隠されていた感情が一気に溢れ出して、心を満たす。楓ちゃんも心当たりあるでしょ？」

認めたくなかったけれど、実際少年が告げたことは楓にも当てはまる。

楓の場合は『哀れみ』だ。

(それも、……自分へのね)  
自虐的に笑う。

「だから殺す瞬間に試験するんだよ。絶望と恐怖をその『異常因子』にぶつけて、その『異常因子』が『紫衣』を纏えるのか纏えないのか。もし纏えるようなら、死ぬって道以外に『追捕使』になる道を示すんだ。楓ちゃんがそうだったでしょ？ あ、ちなみに拒んだら処分するんだ。やる気のない者に任せられるような役目じゃないしね。時期が来たらもう少し詳しく教えて上げるよ」

足下の惨殺された女の亡き骸に目を呉れることもなく、

「こんな感じで『追捕使』は世界を守るってわけ。これが『追捕使』のお仕事なんだよ」

少年は白い歯を見せた。

啜り泣く声が聞こえる。

久しぶりに入った教室は、あまりに重苦しい空気が立ち込めていて息が詰まりそうだった。

楓は誰に挨拶することもなく、悲しみに暮れる周囲に構うこともなく教室の中を進む。周囲も久しぶりに教室に姿を見せた楓に声を掛けるわけでもなく、誰一人として楓に注目しようとしなない。そんな周囲の反応にも特段ショックを受けるわけでもなく、久しぶりだなと適当に思いながら、窓際最後列の席へと座った。

楓が登校した理由は一つだ。

先日『不運にも路上で強盗に襲われ、金品と共にその尊い命を奪われた一人の女子高生』の一件で全校集会が行われるらしく、登校拒否の不登校児となっている楓も例外なく召集されたというわけだ。何でも、校長が直々に事件経過や捜査状況を全校生徒や保護者各位

に説明するらしい。当然の対応と言えば当然の対応だろう。

（悲劇の少女、か）

だが、悲劇には程遠い。

別に何でもないので。

（和美は知らなくて良い世界を知っちゃっただけ。この世の中には知らなくて良いことだってある、って話よ、結局）

花束が置かれている隣の席を横目で流しながら、楓は思う。

（原因は、私だけど……）

黒城和美は死んだ。

死んだが、自業自得だ。

死んで当然だと思っっているし、後悔もしていない。

一応、黒城和美と楓は友人関係にあった。お互いその関係性になんか感情を抱いていたのか、今となってはもはや懸案事項ではない。自分でもとんでもなく利己的だと思う。

でも殺意は確かに湧いた。呆気なく、拍子抜けしてしまうほど簡単に。

啜り泣く声がいい加減鬱陶しくなって、楓は溜め息を付いた。

（警察の手はこっちまで届かないだろうな）

あくまで自己保身を前提に打算を働かせていく。

（来たら来たでアイツが手を打つだろうし）

そんなこんな、ダラダラと考えていると、

「 姫？ 」

振り向いた先にいたのは、

「 神田…… 」

だった。

第三〇譚 ろくでもなく素晴らしいこの世界（後書き）

罪悪感はない。だって死んで当然だったのだから。

そして少女は紫衣を纏ふ

そして少女は紫衣を纏ふ

第三譚 I · m n o t g o n n a l o o k b a c k . (前書き)

I · m n o t g o n n a l o o k b a c k . (後悔した  
くない)

啜り泣きの鬱陶しさが何処かに霧散してしまった。

「何考えてんだよ？ 物凄く怖い顔してたぞ？」

「う、ううん。何でもない……」

言えるわけがない。

真つ黒な打算を平気で働かせていたなんて。言えるわけがなかつ

た。和美が死んだ原因は自分にある、なんて。

「ま、無理ねえか……」

「へ？」

「黒城」

「うん」

どう、答えて良いのか分からなかった。

仕方なく曖昧に頷くと、神田はガタガタと乱暴に自分の椅子を引

き、席に座った。

「俺だつてシヨックだよ。あんなに元気だったのにさ」

背中越しに神田は言う。

「けどその口調は何処か他人事めいていて。実は神田もどうでもいいんじゃないのかなと楓は思ってしまった。」

（相当根性腐ってる、私）

いつからこんなに酷い思考の持ち主になってしまったのだろうか。

（ 悲劇のヒロインでも、もっと誠実なものにな）

俗に言う『悲劇のヒロイン』はもっと健気で、力強く人生のど真ん中を歩んでいった。勿論、身に降り懸かってきた不幸事にもめげず、負けず、強く逞しく真つ直ぐ生きていき、いくら辛かろうと懸命に最期まで薄幸な人生を全うするのに、

（ やっぱり、小説みたいに人生上手くいかないってことね。私なん

そして少女は紫衣を纏ふ

てもう腐っちゃったみたいだし)

ふふふ、と笑う。何だか精神異常者みたいだけれど、誰も見てないから気にしない。

「あ、姫。イヴの日、忘れてないよな」

瞬間、顔が熱くなった。

先程まで抱いていた真つ黒で汚らしい打算が一気に吹き飛んで、どこかに行ってしまったみたい。和美のことも、何もかもが一気に取っ払われた。

「う、うん」

どうやら、北沢楓という女は相当現金で利己的らしい。

楓は神田に気付かれないよう小さく溜め息を付く。赤みを帯びた頬が元に戻るまで、どれくらい時間が掛かるのか予想も出来なかった。

入らない。

「ぬう」

楓は軽く絶望する。

BGMはメインテーマを壮大なフルオーケストラによる演奏で、といったところか。

(やっぱり、小さかったか……)

目の前には例の絵。楓が中途半端にしたままで美術室に放置していたあの絵だ。

そして手にはやや大きめの紙袋がある。この大手デパートの名前がプリントアウトされている紙袋で絵を回収しようと思ったのだが、(入らない……)

ガックリと、楓は肩を落とした。

そして少女は紫衣を纏ふ

校長の話は、酷く退屈なモノだった。

校長の口から話されたことは、マスコミが報じていたこととほとんど同じだった。尤も誰が犯人かも分からないような状況で、いくら同じ学校に通っていた生徒やクラスメイトにも捜査当局がマスコミにも公表していない捜査情報を学校に教えるわけがないのだ。実のところ、校長も詳しく警察から経緯を知らされていないのかも知れない。口ぶりから勝手に楓はそう推測していた。

緊急集会の本当の目的は『学校として生徒の心のケアには全力を尽くします』とアピールすることだったのだろう。事実、ローカルニュースでは学校側が市の教育委員会にカウンセラーの派遣を要請したと報道されていたし、今回の緊急集会でも重ねて校長は、まるで集まった生徒や保護者に刷り込むように『生徒の心のケアには全力を尽くします』とか『相談事があるならすぐに担任でもいいので申し出てください』と言う台詞を繰り返していた。

(絵が入りません。どうしたらいいですか?)

なんて、派遣されてきたカウンセラーに相談したら、カウンセリングルームから無条件で追い出されるだろうか。ヤケクソ気味に楓は思う。

( 笑ってる場合じゃないんだけどさ )

仕方がない。

こうなってしまうえば後日また改めて、だ。

多少納得いかないけれど、楓は自己完結を試みた。

そして引つ張り出した絵をまた悪戯されないように美術室の奥まった所に隠し、

「あ、北沢？」

美術室に施錠してさっさと帰ろうとしていた楓の前に、尾藤蘭が立っていた。

尾藤蘭は美術部顧問である。

「スランプなんですよ？」

「スランプ？」

「そ。スランプのない芸術家なんてモグリよ。彼の有名なゴッホだってモネだってみんな強大なスランプと闘ってきたんだから。先人もしっかりと通るべき、これは試練なの」

「ホント？」

「さあ？」

「……、」

何となく、だ。

何となくだったが、絵を運びだそうとしてました、と言うのは躊躇われた。理由はてんで分からない。本能的とも言うべきか、心を許してはいけないような気さえたのだ。なので適当に『絵を仕上げようとしたんですけど、上手くいかなくて……』と誤魔化すことにした。と言うか、気が付いたときにはもう自分は言い訳しようとしていたからびつくりだ。

「とにかく、よ。スランプで悩む事なんて無いの。北沢はコンクールに出さないんだから、ゆっくり描いたって別に締め切りとかないわけだし。極端な話、辛かったらいつでも何処でも直ぐに止められますよって。それにあたしだって合ったんだからね、スランプ」

「センセ、美術部だったんですか？」

「あれ、言っただけだったっけ？」

まあどうでもいいけれど、と言いつつ、尾藤は左手で白チョーク

を握ると『元祖！ 美術部』とレタリングしていった。黒板の文字は意味不明も良いところだけれども、本当は知って欲しかったのかも知れない。

「私は初耳」

「あゝ、そーだっけ」

豪快な笑みを浮かべ、

「一応、これでも中高と美術部だったのよ」

さらさらと行書体に飾られていく『元祖！ 美術部』。普通に上手い。彼女はデザイン系が得意分野だったかもしれない。

「へ〜。ちよつと意外だな」

「それ失礼よ。こう見えてもね、人物画は上手だったんだから」

自慢する尾藤。正直楓にはどうでもいい話だったから流していたんだけど、

「特に、北沢みたいな絵いっぱい描いたよ」

「風景画ですか？」

「いやいや。恋する乙女の肖像画」

目が、点になった。

「で、北沢。神田とは上手くやってんの？」

身を乗り出してまで訊く尾藤は、簡単に爆弾を投下したのである。

「ほらほら。ボサツとしない！」

目の前で、繁華街の雑踏の中で凄みを利かせているのは尾藤蘭。

尾藤は楓が所属している美術部の顧問であり、隣のクラスの担任でも社会科教師である。

学校ではのんびんだらりと、特段生徒に思い入れすることなく、良い意味でドライな人間性が売りでもある彼女は、誤解を招きそう

な言い方になるのだが変な意味ではなく、楓がこの世で信頼出来る数少ない人間の一人だ。

そんな彼女も、街の雑踏の中ではすっかり大人の女だった。

何というか、黒いコートがよく似合っている。バリバリのキャリアアウーマンとも言えはいいのだろうか。とにかく『やれる女』オーラが全開で、何だか同性の楓から見ても格好いい。学校では特に教師らしいこともせず、まったりしている光景が嘘のようだ。

「き・た・ざ・わ」

「あ、」

尾藤は俗に言う『熱血教師』のように生徒に深く肩入れすることもない。受け持った生徒の自主性を重んじ、何でも好きなようにやらせる。その代わりに何が起ころうとも担任である尾藤は責任を持たない。よっぽどのがなければの話だが、学校全体でもはやそれは暗黙の了解として成り立っているくらいだ。

が。

残念ながら、彼女は妥協を知らなかった。

基本、彼女は他人がやることには教師として給与を貰っている人間と思えないくらい無関心と言える。他人が死のうと生きようと、殺されようと殺そうと興味のないことは何がどうなっても構わない。そんな性格の持ち主だ。

だがしかし、いざ自分が興味を示した事柄の主導権を握ったや否や、例えば校長が納得したても尾藤本人が納得しなければ絶対に退かないという始末の悪い怪物に変貌し、突っ走る。そうなたら尾藤を止められる者はいない。少なくとも、校内にはいない。そんな彼女の能力が全校生徒に知れ渡ったのが『佐藤真蔵丸刈り事件』である。今でも佐藤にとって、バリカンサトウシンソウは鬼門でありトラウマの塊ではないらしい。

「遅い。さつさと来る」

怖い。

なんて言えるわけもなく、楓は尾藤に付いて駅前の繁華街を進ん

でいく。いくら冬休み中とはいえ、一教師が一生徒を街に連れ出していいのだろうか。そうボンヤリと思うが、瞬間的に尾藤の前では無駄な気遣いかも知れないなと思ひ直した。彼女なら市の教育委員会でも文科省でも気合い一発で押しつぶせそうな気がする。

「ねえ、センセ」

「ん？」

「説明会の後、こんなことしていいんですか？」

「ああ、そんなこと」

「そんなことって」

「斬られた人間よりもね、今生きてる人間の方が私は大切なよ。それに、私は黒城さんの担任じゃないし。黒城さんの死にはウチの学校は直接関わってるわけじゃないし。別にいいのよ。保護者への対応は校長、教頭の仕事だから」

校長や教育委員会が聞いたら双方が腰を抜かしそうなドライなトシデモ回答が帰ってきた。

「センセらしいや」

微笑する楓に対し、尾藤は振り向きもせず、

「北沢。一言多い」

「でも、事実で」

「うっさいー！」

一喝し、

「はい。着いた」

尾藤はセンスの良い店構えのブティックを指さした。

そして少女は紫衣を纏ふ

第三一譚 I · m n o t g o n n a l o o k b a c k . (後書き)

堕ちた死神の夢は破けて消えてしまうのだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

第三編 There's still a chance. (前書き)

う There's still a chance. ) まだ間に合

一体どこでどう道を踏み外せばこんな奇怪な展開になるのだろう。試着ブースの中で、楓は大まじめに考えるが、

「北沢っ！ 何もたまたしてんの？」

カーテン一枚挟んだ所に仁王立ちしている尾藤から発せられた無言のプレッシャーが普通に怖い。けれど怖いなんてなんて言えるわけもなく、楓は手渡された淡い青のワンピースを見る。

デザインはシンプルだが、それはそれで可愛い。可愛いと思うのだが、

「センサー。やっぱり似合わないんじゃない？」

「着なさい」

やるときは細かいところまで徹底的にやる。芸術家タイプだ。少なくとも、めんどくさがり屋で飽きっぽく、直ぐに妥協してしまう自分よりはよっぽど芸術家だ。流石は美術部顧問だけあると妙に納得してしまった。

(ぬう……)

試着室でワンピース片手に、内心楓は呻りながら考える。

尾藤曰く、デートは出征と同義らしい。

元々当日に特にめかし込んで出掛けるなんて予定はなかった。ただあり合わせなものを適当に選んで待ち合わせ場所に行くはずだったのに、その胸を尾藤に口走ってしまったのが運の尽きだった。告げた瞬間に表情が一転した尾藤の顔は多分一生忘れることがないだろう。急かすように楓を半ば強引に学校から連れ出し、そしてこのブティックに引っ張ってきたのだ。曰く、男はデート時の女の服には敏感らしい。

諦め半分に、制服を脱いでワンピースを着てみると、鏡の前には

そして少女は紫衣を纏ふ

見慣れない自分がいた。

（やっぱり、何か……）

普段、ジーンズで済ませて滅多にワンピースとかスカートとか女の子らしい（と思う）格好をしない楓だったから、何だか場違いな感じだった。妙に似合わないような気がして堪らない。

「どー、着た？」

もう諦めた。

カーテンを開ける。

多分、表情は硬くて引きつっていると思う。

「……………」

何も言わず、腕を組んで尾藤は楓を上から下までゆっくりと見渡す。

「えっとですね……………」

「……………」

「一応、着てみたんですけどね」

「……………」

「やっぱりさ」

「……………」

「人には向き不向きがあつてさ」

段々声が小さくなっていき、

「……………いいじゃない」

楓が尾藤の発した言葉の真意を問うまもなく、尾藤の手が伸び、

楓を引つ張った。

「いいじゃん」。普段からこんな感じの格好してればいいのに」

「へ？」

「後はそのワンピースに合うコートとブーツね。いや、ヒール……」

「え？」

「コートはやっぱり、白かな」

「あ〜」

「北沢。アンタ何か良いバック持ってる？」

事態把握すら満足に出来ない楓だったが、そんな楓に構ってられないのか気付いていないのか、物凄く楽しそうに尾藤はぶつぶつ独り言を呟いていた。

溜め息ものだ。

楓の手には大きな紙袋が握られている。先程のブティックの名前が流れるような筆記体でプリントされ、それは何だかズッシリと重い。

中身は尾藤蘭に半ば強制的に見繕って貰った（費用はやっぱり楓持ち）『デート一式』である。余談ではあるが、この紙袋のサイズならばあの美術室に放置したままの絵はすっぽりと入るだろう。もしかしたらお釣りが来るかも知れない。何というか、一度の機会に二つも手に入ってしまった。皮肉のような気がしてならない。

もう日は完全に落ちた。

ブティックでの着せ替え人形体験はかなりハードだった。

と言うか、血眼になって店内を探し回るのはどうかと思う。洋服や小物なら尾藤が蹂躪していたとき、女の店員さんが何も言えずに呆然としていたのは絶対に楓の見間違えなんかじゃないだろう。

まさにアレは嵐だった。ちよつとだけ罪悪感だ。

(はあ……)  
足取りが重い。

家に帰つたら直ぐにでも寝ようと思う。寝て、少しでも体力を回復しないと深夜の『レックス』に堪えられない。それに最近の『レックス』は殆ど『殺し合い』に近いレベルだ。万全の体制を整えなければ、コチラの命まで危うくなる。家族の仇討ちも果たせず、神田との約束まで果たせないなんてシャレにもならない。笑えない。絶対に。

でもまあ、尾藤には感謝している。

強制イベントで酷く体力を消耗したけれど、それなりに楽しかった。それに人の情らしき情を味わつたのも久しぶりだった。突如として天涯孤独となり、楓の世界が一人の『追捕使』によつて滅茶滅茶に叩き壊された翌日からの日々は本当に殺伐としていた。だから受ける『情』は『人情』ではなく『非情』であつたし、特に麻薬取引を叩き潰した一件から、邪気を孕んだ感情を向けたり向けられたりだ。

(せっかくだし。ありがたく使わせてもらいますか……)

尾藤に感謝しつつ、足早に路地を曲がり通学路にも使用している交差点を横断して左に曲がれば自宅正面が見えてくる。そのまま真っ直ぐ敷地内に入り、鍵穴に鍵を突っ込み、

次の瞬間。思考は停止した。

「北沢、楓だな」

コツンと。

背中に冷たい、感触。

ぞわりと身体が震えた。

「……誰？」

「さあな」

男の声だった。その声は酷く落ち着き払っている。

そして不思議なことに、気配が感じられなかった。声の主がどこにいるのか分からない。声は後ろから聞こえてくるのに、それでもだった。まるで幽霊と会話ようだ。

「だから、誰？」

「いずれだ。まだ知るべきではない」

「意味、分かんないから……」

恐怖心を出るだけ悟られないように、精一杯の虚勢を張って楓は応じる。

「一月二五日午前〇時。横浜港で待っている」

楓は反論しようとした。

が。

反論しようとも、既に背中に突き付けられていた冷たい感触はなかった。

「家、荒らさないでよね」

楓は玄関で慣れないブーツに手間取りながらも、突っぱねるようにリビングに向けて声を放った。

「荒らさないよ。楓ちゃんはそのなおめかししてどいくの？」  
少し考え、

そして少女は紫衣を纏ふ

「デートよ、デート」

「へ〜。相手はオレ？」

「何バカなこと言ってるの。アンタとは今度付き合ってあげるから」

「うん。楽しみにしてるね〜」

「冗談も程々に、玄関を出る。」

空は快晴。

準備は万端。

多少気になることもあるけれど、気分は悪くなかった。

「ふう……」

待ち合わせは街の中心にある中央駅の上り線ホーム。

楓は改札口を抜け、駅の階段を昇りながら、嘆息とも吐息ともつかない息を漏らす。

（何か……）

家を出たときはあんなに朗らかだったのに、今は何だか自分の感情がよく分からなくなっていた。気持ちが高ぶって暴走してしまいそうな期待感に、予測不可能な出来事が起こりそうな気がする不安感と緊張感。

そんな要領の得ない、何とも言い難い感情を抱きながら、階段を昇り切った。

ホームとホームを繋ぐ連絡橋を楓は歩く。

楓と同年代と思われる少女の一人団が、携帯で会話しながら歩くサラリーマンが、父親と幼子が、近所の中学校のロゴが入った野球のユニフォームを来た二人組の少年が、パンク系の服装に身を包んだ一団が、カップル風の男女が、連絡橋のあちこちでみんな楽しそうに笑っている。流石は冬期休業中だ。圧倒的に平均年齢は低い。

連絡橋を渡り切って、楓は上り線ホームに降り立った。  
ホームを見渡すけれど、神田らしい人影はない。  
仕方がないから、楓はホームのベンチに腰掛けた。

(……………、)  
心配になってきた。

もしかしたら、待ち合わせ時間を間違ったかも知れない。  
いや、そもそも待ち合わせ場所を間違ったのかも知れない。  
それともまた、神田との『約束』自体がフェイクで『ドッキリで  
した』というオチかも知れない。

(……………、う)  
いてもたってもいられなかった。

携帯で連絡を取ろうかと、

「お、早えじゃん」

声が出た方向に顔を向ければ、向こうから早足で近付いている一  
人の少年と目が合った。

すると、何故だか勝手に笑みが漏れてきた。

楓は何とか普通の表情に戻そうと努力するけれど、努力すればす  
るほどニヤついた顔が元に戻らない。仕方がないから、少し俯き加  
減に、表情を隠すことにする。

「遅い」

どう受け取っても怒ってます、と取れるにすればく意識的にそん  
な口調で楓は言う。

(何か、ずるい)

自分だけあたふたしているのが妙にしゃくに障った。

だから、ちよっとした意地悪だ。神田を困らせてみたかった、と  
いう意図もある。

が、

「悪かったよ」

そう神田はふて腐れたように言い掛けながら、楓の頭にポンと手  
を乗せた。

(　　ッ！)  
まるで赤ちゃんをあやすような、はたまた髪の触感を楽しむように。

楓は動けなかった。

緊張とも違う、恐怖とも違う。何とも言い難い、不思議な安心感とも言えば良いのかも知れない。そんな感情が駆け巡り、あたふたしていたことや、困らせてやろうと思ったことが、綺麗サツパリ吹き飛んだ。先程までの強気発言はどこに行ったのだろうと、自分でも不思議に思う。

「つてかさ、五分ぐらい見逃せ」

そう言いながら、神田は楓の手を離し、楓の隣に座る。

「ん」

何だか、酷く惨めかもしれない。

これでは赤ちゃん扱いだ。

けれど、それで済んでしまう自分も相当だ。もしかしたら人の優しさに弱いのだろうか。それとも単に飢えているだけなのだろうか。

「姫？」

「ん、あ、何でもない」

弁解するも、神田は不思議そうに楓を覗き込む。

「……………」

視界一面を覆う神田の顔。

ビククリした。

普通に心臓に悪い。

心臓の鼓動が酷くうるさくて、

「どーした？」

「……………何でもない」

まもなく列車到着を告げる機械的なアナウンスがホームに響いた。

そして少女は紫衣を纏ふ

どうか私を殺して下さい。

第三譚 There's still a chance. (後書き)

そして少女は紫衣を纏ふ

第三譚 D A R L I N G , i f t h a t e v e r h a p p e n s .

D A R L I N G , i f t h a t e v e r h a p p e n s . . .  
( ねえ、もし、そうなった時は…… )

デートと言えば、やっぱり遊園地らしい。

クリスマスイヴだったから人混みは半端じゃない。でも神田について回るようにして何時間も待ってジェットコースターに乗ったり、お化け屋敷に入ったり、コーヒーカップに乗ったりと。些か定番過ぎるような気もしないわけでもなかったけれど、それなりに楽しかった。相手が腐れ縁の神田だったからか、変に気を遣うことなく

と言つか、お互いにお互いのことを充分過ぎるほど知っているわけで今さら気を遣うことなんてなかった。我が儘も言い放題だ。

午後七時ごろからパレードが始まるらしい。

せっかくだから見ていこうと提案したのは楓だった。

場所取りしてない、そう神田は言うが、別に場所取りしてまでパレードを見たいわけではなかった。ただ、帰りたくなかった。この夢のような世界に出来るだけ長く浸かっていただけだ。一種の現実逃避と言っても良い。神田は呆れたように溜め息を付くと、楓の提案に意外にも神田はすんなりと了解してくれた。嬉しかった。そんな些細な事が本当に嬉しかった。

アトラクション巡りも一段落すると小腹が空いたので、園内のバカ高いファーストフード店で軽食を取ることにした。

「なあ、何でパレードなんて見たいんだ？」

楓の目の前に座っている神田はハンバーガーを食べる手を止めて

そして少女は紫衣を纏ふ

言う。

「さあね」

「あゝあ、そうですかそうですか」

気怠そうにそう言っつて、神田はハンバーガーを頼張る。

「それ何個目？」

「三個目」

「食べ過ぎじゃない？」

「育ち盛りなんだよ」

「太るよ？」

「それ男に言うセリフか？」

神田は口を尖らせて言う。

「つてかさ、姫こそ食べよ」

「これ以上食べたら太っちゃうよ」

神田は言われて一瞬目を丸くし、そのまま楓の全身を上から下まで見る。何だか品定めされているようで本気で恥ずかしい。

「いいじゃん。別に太ったって俺は気にしねえし。今だって折れそうな身体してんじゃねえかよ」

「そう、かな」

火照った顔を冷ます効果の程は知らないが、とりあえず楓はドリンクを飲むが、

「変に食事制限して減らなくていいとこまで減ったらどーすんだよ？」

神田に言い切られて、思わず手が止まってしまった。

「……ねえ」

「ん？」

「それ、物凄いセクハラだと思っただけど？」

ジトツと神田を睨む。

「そうか？」

「あのね、女の子は凄くデリケートなの。そんなデリカシーのないこと言ったら嫌われるよ？」

そして少女は紫衣を纏ふ

誰に、とは言わない。

「……そうかい」

「？」

「なんでもね」

不愉快とは違う。

怒りとも違う。

言うなれば、言い淀んだ感じか。

「ま、精々頑張ってくれよ」

「その誤魔化し方、酷くない？」

「酷くない酷くない」

何でもない、こんな会話が楽しかった。

邪気のないこの関係が心地よかった。

だから。

思わず零してしまった。

「昔は楽しかった」

気が赴くまま、楓は紡ぐ。

突如として溢れ出した感情を止められない。止める術を知らない。

「何も考えずに遊んで、怒られて、怪我して。楽しかった」

心の奥底に押し込まれていた感情が決壊した。

「……確かにな」

ハンバーガーを飲み込み、神田はポテトを漁る。

「汚らしいエゴとか、そこには何もなくてさ、純粹にただやりたい

ことをやって、笑えてた」

「あ？」

神田の手が止まった。

「何処で間違っただら」

泣きたく、なってきた。

「……姫？」

神田の声が哀愁を帯びる。

「いろんなこと、した。それが……、唯一の道だから。けど」

もう全てをぶちまけたかった。

自分はこの世界に存在してはならない存在だと言うこと。

家族が夜逃げしたのではなく、一人の少年によって殺されたこと。

自分は異様な能力を持つ化け物だということ。

自分という人格の基本は、冷徹で残酷で、本当の姿は人でなしだ  
と言うこと。

人を、殺めた経験があること。

黒城和美が殺されたのは楓に原因があること。

何もかも口外したかった。

口外して、楽になりたかった。例え警察にお世話になることがあ  
るうと、神田が十字架を背負うことになっても、それでも。利己的  
な考えだと解つていても、それでも。

「どうして、かな」

何か、おかしかった。

そう。何かが根本的に絶対的におかしい。

存在を否定され、両親が殺され、妙な力に目覚め、家族の復讐を  
誓い、自分の心の奥底に眠る『人でなし』に気付いて、関係ない人  
を殺した。殺さなくても良かった人を、殺してしまった。それが直  
接だろうと間接だろうと関係ない。そうやって、自分という存在は  
いるだけで人を不幸にしてしまうのだ。死を振りまく存在に為りつ  
つある いや、もうそうなっているのかも知れない。

あの少年は、楓に何を求めているんだろう。

そして少女は紫衣を纏ふ

わからない。

何を思っているのだろう。

わからない。

第一、どうしてこんな役回りが自分に回ってきたのだろう。

わからない。

疑問は山のように浮かんだ。

「もう、 いやだ……」

何か、おかしかった。

何か間違ってる、と思った。

何かがおかしい、と考えた。

何か狂ってる、と気付いた。

「こんな……」

こんなはずじゃなかった。

震える唇で楓は呟いた。

言葉は最後まで続かない。

昔々。

ある少女がいた。

少女は明るく、少しめんどくさがり屋だったけれども、両親のおかげで真っ直ぐに育った。

そんな少女には思いを寄せる少年がいた。

少年とは俗に言う幼馴染みという関係で、いつも一緒だった。

近くの森林に秘密基地を造ったり、神秘的な溜め池を見に行ったり、とても無邪気で充実した日々を送っていた。

そんな少年があるとき言った。

少女の髪が綺麗だ、と。

それから少女は髪の手入れを怠らなくなった。

「私は……」

私はもう耐えられない。

震える唇で楓は呟いた。

言葉は最後まで続かない。

家族の復讐のために全てを捧げ、全身全霊で『殺人技術』の習得に励み、そして人を殺した。

家族を、全てを奪い去った『追捕使』しょうねんが憎い。

その気持ちは今でも変わらない。

その憎しみを晴らすため、はたまた癒すためなら何をやっても構わない、本気でそう思っていた。

だが。

もしも、だ。

もしも『復讐が叶わない』としたら、一体どうなるだろうか。

今まで『復讐が叶うなら』なんでもやって良いと思っていた。

しかし、もし『復讐が叶わない』のならば、一体今までの努力は何だったのだろうか。

全ての源に等しかった『復讐が叶う』という希望的観測を取っ払ってしまえば、そこには一体何が残るといえるだろうか。何のために人を殺めたのだろうか。少年への憎しみが麻酔となって倫理観を麻痺させていたのだ。

だが、麻痺した感覚は少年の圧倒的な『暴力』によって醒めた。

楓の中で『勝てる』が『勝てない』に、『殺せる』が『殺せない』に変わったとき。

今まで麻痺して存在すら認知できなかった様々な罪悪感が悲鳴となって押し寄せてきた。

喚き、叫ぶ。心を掻き毟る。恐れ、傷つき、哀しみ、怒り。感情という感情が心を引っ掻いていく。

「もう、……いやだ」

一体全体、今自分は何をしたいのだろうか。

何に、何処に救いを求めているのだろうか。

この苦しみからの解放を願っているのだろうか。

違う。

単純に、ただ助けて欲しかった。

手を差し伸べて欲しかった。

一瞬でも良い。贅沢は言わない。  
一瞬で良いから、誰でも良いから。

「……たす、けてよ」

けれども、手を差し伸べてくれる人はいない。

助けてくれる人なんて、誰一人としていないのだ。

存在自体を永久に否定されたこの苦しみと哀しみを理解してくれる人など現れるわけがない。

無意味なのだ。

あの苦しみは自分にしか解らない。

あの苦しみは自分以外に解るはずがない。

そもそも、楓自身が人でなしだ。

周囲はそんな自分の苦しみを理解しようとも思わない。因果応報、  
自業自得

「オイコラ」

慌てて視線を上げ、潤んだ視界に映ったのは怖い顔をした神田だった。

そして少女は紫衣を纏ふ

第三譚 D A R L I N G , i f t h a t e v e r h a p p e n s .

今がずっと今であって欲しい。そう願わずにはいらなかった。

そして少女は紫衣を纏ふ

第三四譚 I d o n ' t w a n t t h e f u t u r e . (前書き)

I d o n ' t w a n t t h e f u t u r e . ( 未来なん  
て欲しくない )

第三四譚 I don't want the future .

日はとつくに落ちていた。

ぐいぐいと引つ張られ、ハンバーガーショップから雑踏に入る。クリスマスイヴの遊園地ということで、周囲は殆どカップルだった。だけれど、そんなことに構っているほど悠長な事態ではなかった。

腕が引つ張られて痛い。

神田は衆人環境なのに、怖い表情を崩さずに、引つ張る。

時より楓が上げる抗議の声を完璧に無視し、周囲から向けられる怪訝そうな眼差しをも堂々と無視して。

「ちょ……」

男の力がここまで強烈だとは思わなかった。

腕の痛みや、何が起きているのか把握できない不安から、涙が出てきた。

涙で曇った目に景色は歪み、自分がどこに連れて行かれようとしているのかさえ分からない。

「かん  
だ。」

その声が出る前に、ガンツと衝撃が背中に走る。

慌てて目を見開けば回りは灰色の壁。取り囲まれている。ここが何処なのか分からないが、どうやらビルとビルとの間の路地らしい。暗い。

「姫……」

背には冷たい壁。

いつの間にか両手首を神田が掴んでいる。動けない。

「嫌っ、……」

そして少女は紫衣を纏ふ

無意識に拒絶する。

壁に押し付けられ、神田は楓に覆い被さるような体勢で楓を射抜いていた。楓の視界には神田以外何も見えない。怖い。殺されるあの恐怖とはまた別物の、恐怖。気迫に圧倒される。恐くてぎゅっと目を瞑った。

「嫌っ、放して！」

「落ち付けて」

怖い。

神田が神田じゃないような気がして、何が何だか分からない。もう嫌だ。

「はな、放してって！」

「嫌だ」

「嫌っ」

どんなに抵抗しても、暴れても。神田は楓の手首を放そうとしな。身体を捻ってもすぐ対応される。ならばとばかりに楓は蹴り上げようとすが、神田が一枚上手だった。身体を強引に楓にねじ込んで、押さえ付けられ、

どくん、と心臓が脈打った。

「あ」

身体を暖かさが包む。

抱きしめられた、と理解したときはもう身体が動かなかった。巻き込むように囚われたまま、急速に楓の力は抜けて行く。

「泣くなよ」

暖かい。

抱き締められて、驚いて顔を上げる楓の顎に、ひんやりとした神田の指がそつと添えられて。

息が止まる。

優しさと温もりが同居しているような、そんな瞳から目が離せない。

「放して、よ」

「いやだ。姫が泣いてる理由教えてくれれば放しても良いけど？」

楓は押し黙る。

言うべきか、言わぬべきか。

言ったところで神田は信じてくれないだろう。

言ったところで神田は楓を見限るかもしれない。

それは、嫌だ。

信じてくれないのはまだいい。耐えられる。だけど見限られるのは、嫌だ。

「、死神だから」

直接告げるのは躊躇われた。

何よりも、神田に見限られなくなかった。

「みんな、不幸になる。みんな、殺しちゃう」

あの大鎌が、どす黒い北沢楓の本性が無性に忌まわしい。

「だから……」

「だから？」

次の言葉が出てこない。今度こそ神田を突き放すような言葉は、何一つとして出てこなかった。

頬が冷たい。

「だからどうしたって？」

神田は毅然と言った。

「死神だったらどうするんだよ？」

視線が交錯する。いろいろな感情が一気に溢れかえって、言葉が

出ない。

胸が痛いくらいにいつぱいだった。

「己惚れるからな」

「嫌だつて、……言ったら？」

「却下だ」

神田のシナリオ通りに動かされている気がして、だからせめて意地悪を、と思つての一言だったけれども簡単に打ち砕かれた。そう言われてしまえばもう何も言えない。

楓は傍若無人だなあと思いながらも、答えの代わりに目を閉じる。すると、何だかんだで把握されていたのか、神田が苦笑する気配がする。

(むかつく)

蹴つてやるうかと思つた瞬間、

「蹴つてもやめねえからな」

優しい響きが楓の鼓膜を打つた瞬間、優しく唇が触れ合った。

パレードはまもなく始まった。

無数の輝きが踊る。

「あ、あのな……」

「うん」

「あれは」

「うん」

「だから」

「うん」

「やっぱりな」

「うん」

そして少女は紫衣を纏ふ

「いや、そーゆーわけでもなくて」

「うん」

「いやな、別に……」

「うん」

面白いな、と楓は思った。

あの時はあんなに自信满满だったのに、少し時間をおいて場所を  
広場に変え、ベンチに座った途端にこれだ。別に言い訳とか必要な  
いんだけれどな、そう楓は微笑む。

「　　姫？」

「なんでもない」

気分が良い。

ここまで晴れやかなのはきつと生まれて初めてだ。

「あ、そうだ」

「ん？」

「忘れてた」

神田は懐から何かを取り出して、

「クリスマスプレゼント」

小箱だった。

「クリスマスプレゼント？」

「メリークリスマス」

ポイツとあるう事か神田は放り投げた。慌てて楓は、その小箱を  
落とすまいと必死でキャッチする。

「……何これ？」

「開けてみ」

「　　ネックレス？」

「それがリングに見えるか？」

戯けたように神田は言う。

小箱に入っていたのは銀のネックレス。三日月を象ったものだ。

「昔喚いただろ？ 『月が欲しい』って」

「そんな昔のこと……」

「忘れるかよ」

神田は悪戯っぽい笑みを浮かべたまま、楓からネックレスを優しく奪うと、楓の首にそれをかけた。

「男って意外と執念深いんだぜ。まあ、大分小さくなっちゃったけど」

「ありがとう」

「こんなんで良いならな」

「十分だよ」

我ながら、素直な反応が出来たと少し満足する。

「ありがとう」

「さつき聞いた」

幸せだなあと、柄にもなく思っ

「どした？」

「あ、いや……プレゼントが、ない」

申し訳なくて、語尾になればなるほど小さくなってしま

「別に気にしなくても」

「でも……あ」

目に入ったのは母の形見のシルバーリング。

楓は左人差し指の飾り気のないそのシルバーリングをためらいなく抜いて、

「あげる。女物だけど我慢して」

神田に差し出せば、慌てたようにリングと楓の顔を交互に見て、

「え、これ？」

「いや？」

「そういう意味じゃなくてさ、これって……」

「いいの。持っててよ」

「でもな」

「うるさい」

一喝して、

「あげる。持ってなさい」

睨んだ。

神田はしばらく当惑顔だったけれど、やがて諦めたように溜め息を付く。

「じゃあ、ありがたく頂戴しますよ」

神田は楓の頭を撫でる。

「うん」

心地よかった。

紛れもなく、幸せだった。

帰りは各停だった。

もう一〇分早く改札を抜ければ急行に間に合ったのだが、まあそんなことはどうでもいい。ゆっくりカタカタと、普段停まったことのないような駅にも停まるというのはなかなか新鮮だし、何よりも神田と少しでも長く一緒にいられて嬉しかった。

ホームに降り立ち、改札を抜ける。

「じゃあな。また今度」

「うん。メールするよ」

「俺は電話がいんだけど……」

「じゃあ電話にする」

楓は優しく笑っていた。

「おう」

笑う。

笑い方は秘密基地を造って遊んでいたころと変わらなかった。

「じゃ、俺は帰るけど、送るか？」

「良い大丈夫。ちょっと買いたい物あるから」

「付き合っつて」

そして少女は紫衣を纏ふ

「いいよ。買い物って言ってもコンビニで済ませられるし」

「コンビニじゃなくて夜道だよ。夜道の一人歩きは危ないって」

「大丈夫だって。私を襲うような人なんていないし」

「俺」

「は？」

「お前を襲う人」

「ば、何言ってるの！」

顔を真っ赤にして楓は叫ぶ。

「ははは。冗談じゃねえから」

「ええ！？」

豪快に神田は笑って、

「じゃあ俺は帰るからな、気を付けるよ？」

「うん。バイバイ、ユウちゃん」

勇気を出して呼んだその呼び名が妙に懐かしい。

「あ」

「なに？」

「お前、そのカッコ似合ってる」

「え、あ」

慌てる楓に、神田は笑っていた。

それは優しく、見る者を和ませるような微笑み。そして

「じゃ、バイバイ」

それは、他愛のない別れの挨拶。

何の変哲もない、普通の、有り触れた。

楓の『バイバイ』を拭ったような、神田には相応しくない挨拶。

楓はと言うと、答えることが出来ないでいた。

あまりに遅い『似合ってる』の一言。

気付くのが遅い。

そう罵ってやりたかったけれど、楓は言葉を発することが出来なかった。

(未練がましいな)

やがて神田の姿が闇に溶け、ぼんやり思う。

そして、気付く。

(雪、か)

チラチラと舞っている。

ホワイトクリスマスとはよく言ったのもだ。

(つと、時間は )

携帯を取り出し、時間を確認すると、九時三四分。

クリスマスイヴのデートとしてはかなり清きお付き合いだっと思う。自分も人のこと言えた口ではないが、神田は意外と奥手なのかも知れない。まあ楓も初めてなんてあんなモノかなあと楓は思うから特に気にしない。段階を踏めばいい。機会はいくらでもあるのだから。

(さてつと)

楓は『コンビニに背を向けて』駅へと踵を返し、コインロッカーにバッグを突っ込んで鍵を閉めた。

「横浜だったっけ……」

自分に言い聞かせるよう、呟く。

(ここから人目に付かないように『飛んで』いけば、丁度良いかな)

楓は人気のない場所に赴くと、闇に紛れ、飛ぶ。

ここからは、世界が違う。

第三四譚 I d o n ' t w a n t t h e f u t u r e . (後書き)

そうだった。私は世界に刻まれていなかった。やっぱり私は邪魔者  
だったのだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

### 第三五譚 イツカオワルユメ

今晩は月が見えない。

その代わり、ちらつく雪が幻想的だった。

前回の豪華客船が繫留されていた港とは根本的に場所が違うから当然風景も異なる。楓の一キロぐらい先に広がっているのはおおよそ三キロ四方にわたる石油化学コンビナートで、夜と言うことで全体像を掴むのは難しいけれども巨大な潰れた円筒形の石油タンクがいくつも並んでいたりと、長い煙突が突き出ていたりする。

楓が今立っているのはそんなコンビナート近くのタンカーやコンテナ船が着岸するための波止場で、倉庫が点在しているだけで他には何も無い少し開けたところだった。少し前方には薄高くコンテナを搭載しているが輸送船が繫留されていて、その脇に聳え立っているクレーン共々迫力満点だ。

(さて、)

人の気配はない。

波の音が聞こえるだけだ。至って静かと言えるし、静かならば気配を探ることも容易になる。

携帯を出し、時計を見る。ぼんやりと楓の顔が照らされた。

一一時五八分。

もうすぐ聖なるクリスマスだ。

(まったく、人を呼び付けといて待たせる気?)

そろそろ本格的に寒くなってきた。一応コートを羽織ってきているけれど、着ているのはワンピースだ。普段楓の私服はジーンズばかりだったから余計に寒く感じるのかも知れない。着替えてくれれば良かったかも、そう楓は惟っていたが、

そして少女は紫衣を纏ふ

「良く来た。北沢楓」

ズツシリと、胸にのしかかるような重苦しい、声。  
この声には聞き覚えがあった。

家の、玄関先で。

（ ツー！！ ）  
油断はしなかった。

最後まで索敵を怠ることなんてなかったのに。  
なのに、どうして背後から声が聞こえるのか。  
どうやって自分の背後に回り込んだのか。

疑問が、溢れて止まらない。

「……誰？」

方々から湧いてくる疑問を押さえながら、楓は問いかける。

「余は『押領使』」

威圧感が、半端じゃない。

胸が苦しく、呼吸が乱される。

「オウリヨウ、シ？」

「余は『押領使』。アカシックレコードの体現者にして『追捕使』  
を管理、監督する者」

金縛りにあったように動けない。

辛うじて動きに自由が利くのは首から上だけだ。

「機は熟した」

かつん。

第三者の足音が聞こえる。

そして少女は紫衣を纏ふ

風が吹き抜ける。

血の臭いが、した。

「貴様はまだ奴から聞かされていないだろうが、ただ『紫衣』を纏えれば『追捕使』に成れるというわけではないのだ。二つ、条件を満たした者のみに『追捕使』として生きる権利が与えられる」  
かつん。

その血の臭いを伴い、足音は確実にこちらに向かってくる。

「一つ。『余』<sup>アカシックレコード</sup>に記されていない『異常因子』であり、尚かつ『紫衣』を纏える者」

かつん。

その足音は耳に覚えがある。

かつん。

「あゝあ。こんな夜更けに何かと思ったらぶち壊しだよ」

漆黒に溶けるようにして、楓の右方から『追捕使』の姿。  
そして。

背後の『押領使』は告げた。

「二つ。現行の『追捕使』をその手で殺めた者であること」

雪は次第に重みを帯びていた。

「楓ちゃん。そのカツコ似合ってるよ」

黒衣の少年は微笑む。

「アンタ……」

嫌な予感に、

(なに、この、……)

一ヶ月と数日。

少年と過ごしてきた時間だ。

しかし楓は一度たりとも『あんな少年の気配』を見たことはなかった。それは猛烈な違和感となつて楓を襲う。不安が、増幅する。

「アンタ、ちよつと」

そこまで声を発して、楓は気付く。

「どういう事が説明してよ、『押領使』。これじゃオレのプランが台無しじゃないか」

少年の矛先は楓に向いてない。

矛先は、楓の後方にある。

「余は頃合いだと判断した」

「だから、その必要はないんだって」

「余の存在意義は『追捕使』を管理、監督することこそ本分」

状況が把握できないのは勿論のこと。だが楓は断片でも分かる部分だけを引き出し、頭の中で繋げ、いくつかの可能性を構築していく。

「北沢楓」

唐突に背後からの声に話を振られ、楓は驚く。

「貴様はこやつを殺したがっていたな」

「え」

「一族皆殺しにしたこやつが憎いだらう？」

ずっしりと、声が響く。

「今し方余が告げた話を覚えておるな？」

プレッシャーに押し潰されそうだ。

「『追捕使』に、なる、……条件のこと？」

必死に耐えて楓は言葉を紡ぎ出す。

「そつだ。機は熟した。余は貴様を『追捕使』を継承する資格を持つ者として認めよう」

震えるように湧き出してくる興奮を押さえつけながら、楓は頭を今一度整理する。

『追捕使』となるためには二つの条件がある。

一つ。アカシックレコードに記されていない『異常因子』であり、尚かつ『紫衣』を纏える者。

二つ。現行の『追捕使』をその手で殺めた者であること。

(殺す？ あの『追捕使』を？)

思考がフリーズしていく様子が手に取るように分かった。

(あの『追捕使』を？)

先日、少年が見せた圧倒的な力がフラッシュバックする。

(私が？)

血塗られた刀。

(どうやって？)

銃声、血飛沫。

(殺す？)

響き渡る阿鼻叫喚。

(私が？)

無理だ。

そんなことは無理だ。

殺せない。殺せるわけがない。返り討ちに遭うのが関の山だ。

絶対的な『畏れ』が障壁となって立ちはだかっている。

怖い。死ぬのが、怖い。

あの刃がこの身に埋まるという事実が怖い。

以前ならば、闇雲に少年に立ち向かうことが出来た。

だが『なまじ力を付けたために』少年の『殺しの一手』が見えるようになってきてしまった。そして見せつけられた『あの光景』

そして少女は紫衣を纏ふ

ッ！！

「楓ちゃんがオレを殺せるわけないって」  
突然、核心を少年によって射抜かれる。

動揺しながら楓は少年を見遣れば、笑顔の少年がそこにいた。  
だが、あくまでその笑顔は楓には向けられていなかった。

「『押領使』だって見てたでしょ？」

少年は楓を通り越し、声色に軽蔑と自信を込めて告げた。

「もう古くさい仕来りはお終いだよ。これからオレは楓ちゃんと二人で生きていく。『追捕使』として、悠久の世を流離うんだ」

楓は愕然とする。

少年の声が、あまりに自信に溢れたものだったから。

少年の心が、あまりに北沢楓に向けられていなかったから。

「楓ちゃん。あのね、『追捕使』になるにはね、現行の『追捕使』を殺さなきゃいけないんだ。つまりね、楓ちゃんが『追捕使』になるためにはオレを殺して『追捕使』の座を奪い取らなきゃいけないってこと」

「だから？」

悪寒でしかなかった。

「一緒に行こうよ、楓ちゃん。愛し合う同士」  
ぽつ。

楓の頬に一筋の雨。

「愛し合う、同士？」

「そ。オレは楓ちゃんが好き。愛してるんだ。楓ちゃんもオレが好きだしね。断る理由なんてないだろ？」

「そんなこと、一言も言っていないけど」

「そうだね。だけど『オレには分かる』」

途端に楓は吐き気のような嫌悪感に襲われた。

少年の言葉に込められた人の心の負の部分。腐った蜜柑のようにじゅくじゅくと、どろどろな感情が楓の心に流れ込む。

仮にもその感情を向けられた者として、楓は理解していた。

少年が抱いているのはまさに狂信的な妄想であり、愛し愛された  
いという真つ直ぐで純粹な気持ちでもあるということ。けれどそ  
れが正反対のベクトルを持った、根本的から崩壊した論理でしかな  
い。

(あ、そっか)

気が付けば楓は理解していた。

全ての元凶。

今までの道筋、そして少年の行動つぶさに。

最初から全てが狂っていたのだ。

だって、綺麗すぎる。

まるで予めセットされたシナリオに沿っているかの如く、身に降  
り懸かっってきた華麗すぎる悲劇模様。

悟った。

元凶を。

悟り、そして思う。

狂っている。

気持ち、悪い。

「さあ、行こう。永遠に、永久に。オレと一緒にさ」  
震える足に力を込める。

ぐらりと視界が揺らぐも、関係ない。

この少年は、生かしておけない。

楓を、壊したのだ。

「その前に、一つ良い？」

一つ、どうしても確かめたかった。

いつしか金縛りは解けていた。

楓は、頑と告げる。

「人、殺したでしょ？」

血の臭いが、鼻を突く。

「うん。さっき、三〇分くらい前かな。どうして分かったの？」  
あっさりど。

訊ねた楓が愕然とするほどあっさり少年は言い放った。

「血の臭いがする」

楓が指摘すれば、途端に少年は表情を歪めて、

「ゴメンゴメン。あの野郎がさ、せつかくオレが苦痛もなしに斬つてあげようって好意を台無しにしちゃったんだよね。ったくさ、素人のクセに下手に太刀筋を避けるから、死ぬ間際凄く苦痛だったと思うよ。おかげでちよっと裾に汚い血が付いちゃったし」

侮蔑的な言辞だった。

少年は続ける。

雪は、既に雨へと変わっていた。

「でもまあ、値打ちがありそうな指輪持ってたからさ、許してあげないこともないけどね」

次の瞬間。

思考が停止する。

今自分が立っているのか座っているのか、分からなくなってしまう。

「これ純銀みたいだね」

それは

「にしてもアイツ女装の趣味でもあったのかな、これ女物なんだよね」

血に濡れた、それは

「まあ別にどうでもいいけどさ」

ここからの事は良く覚えていない。

焼き切れてしまいそうな凄まじい熱が脳内で弾け、少年の対する憎しみが溢れ出し、激しく、味わったことのないような絶望が楓全身を隈無く支配して。

ぱらつき始めた雨の中、気が付けば大鎌を少年目掛けて振り下ろしていた。

第三五譚 イツカオワルユメ（後書き）

入り口も出口も皆同じ。誰しも『彼』のオモチャに過ぎず、誰しもその事すら長い時を過ごす中で忘れてしまつのだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 行間 四

「一つ、昔話をしてやろう」

「え〜。何それ？」

「まあ付き合え。儀式のようなものだ」

「ふ〜ん。さつさとしてね。オレ、このクソ女の死体から離れたいんだからさ」

「……なるほど」

「さつさとしてね」

「昔、男がいた。その男はある女の師だった。その男はな、女と出逢ったとき既に狂っていた。永遠の時を過ごしていくうちに、その男の心は壊れてしまったのだ。人間というものはな、呆気ないほど容易に壊れる。潰れる。腐る。脆く、淡く」

「その男は愛に救いを求めた。何事でも癒せなかったひび割れた心を元に戻そう本能的にな。そして、男は嘗て恋い焦がれた女とよく似た女を見つけ、男はその女を全身全霊で愛でた。例えばそれが邪恋であろうとなかろうと」

「男は常々余にこう言った。『儂は「我が最愛の師の生まれ変わりである」あのおなごの心が欲しい。儂の伴侶とし、永遠の時を渡る』。男は言葉通りになるよう画策した」

「だが、女にとってその男は憎しみの対象でしかなかった。男は何かと理由を付けて女を独占しようとして、女の縁者を手に掛けた。そんな男を女が受け入れるわけもなく、やがて成長した女は男を殺めてしまったのだ」

そして少女は紫衣を纏ふ

「人は貴様らが自覚している以上に脆く、情弱な生き物よ。長い時を刻んでいくと次第にひび割れ、やがて砕ける。そして砕けた『それ』を修復しようとして過去の愛を求めろ」

「そして過去の愛に気付く。幾重も年月が折り重なったその果てに、過去に己に向けられていた先代の愛に気付かされる。しかしそれは何代も何代も繰り返されてきた永久不滅に続く螺旋なのだ」

「それから久遠の年月が経った。男の愛に気付かなかった女はやがて男と同じ道を歩き、辿り、そして散った。女が愛した一人の男によつてな」

「 終わり? 」

「 以上だ 」

「 ふん。で、それがナニ? 」

「余が代々の『追捕使』に語り継いでいる『昔話』だ。忘れても構わぬが、覚えておくがいい」

「 なんだよ、それ? 」

「『追捕使』は所詮『異常因子』でしかない。故、世間には受け入れられ難い」

「それぐらい知ってるさ。オレが父母に捨てられたのもそのせいなんだでしょ? 」

「一概には言えぬがな。『異常因子』は大多数の人間から除け者扱いされることが多いのだ。まあ、それは『異常な者を本能的に感じ取り、そして本能的に排除』しているだけのことなのだがな」

「それがどうしたの? 」

「除け者にされた人間は情を欲するのだ」

「 情? 」

「 そうだ。僅かでも己を理解してくれる者を、理解してくれた者を

欲し、そして縋り付く。それが螺旋の正体なのだ」

「ねえ、話が見えない」

「何れ分かるときが来よう」

「分かりたくもないよ。そんな意味不明な話」

「良いではないか。さて、余は貴様を一六六代目と認め、余はその証しに貴様が望む『形』となるう」

「カタチ？」

「余には固定の『形』がないのだよ。今は先代が望んだ『鷹』の姿になっておる」

「へへ。オレが望んだらその『形』になるわけ」

「うむ」

「そーだなく。……じゃあ『白猫』がいいかな」

これが『一六六代目』が誕生した瞬間だった。

それは三〇〇年も前のこと。

螺旋は螺旋。

それ以上でもそれ以下でもない。

そう、ただそれだけのことなのだ。

行間 四（後書き）

全てにケリを付けようと思った。

そして少女は紫衣を纏ふ

第三六譚 ラストダンス 1

大鎌の柄が刀と交差して、悲鳴を上げ、楓は思う。  
何という仕打ちだ、と。

世界は、悪魔だ。

自分は一体何をした？

神田が何をした？

自分は『こうなる前』に何か罪を犯したというのか？

神田は『こうなる前』に何か罪を犯したというのか？

何故、殺されなければならなかった？

アカシックレコードのバグである『異常因子』と関わったから？

自分が『異常因子』だったばかりに神田の運命をねじ曲げてし

まったから？

誰が、悪い？

自分？ それとも殺した張本人？

にくい。

ニクイ。

憎い。

殺す。

殺してやる。

こうなった元凶を。

全てを、コワシテヤル。

「ああああああああああああ　　ッ！！！！！！」

叫んだ声は言葉にならない。

全てを、解放した。

望んで、願って、初めて何の制御もなくチカラが解放されていく。  
言い表せないほどの快感が楓の身体を包み込んだ。

そして少女は紫衣を纏ふ

常識、良識、人格、感情、思想……。

壊すためには、いらぬ。

殺すためには、必要な。

再設定。

目の前の『追捕使』を叩き潰すために必要な物を選択、必要のない物を全て破棄、放棄していく。

再設定。

ターゲットは『追捕使』。

高揚していく意識。それは快感にも似ていた。

「ニク、イ……」

世界が、憎い。

「クロス」

家族を奪ったこの世界全てが、憎い。

「クロス」

この世界に存在してはならない自分自身が、憎い。

「クロス」

そして。

「クロス」

何より自分を壊したあの少年が、憎い。

「クロス……」

力が解放されていく。

ドス黒い光が眩いまでに楓の身体から溢れ出し、包み込み、集約していく。

殺意という発動のキーをねじ込まれ、歡喜に振るえる『紫衣』。

ぶつかり合う刀と大鎌の向こう、焦燥が少年の顔に浮かぶ。

「……楓、ちゃん？」

情けも容赦も必要ない。

実力の差なんて関係ない。

薄く笑う。

薄く笑った。

どうして笑みが零れてくるのかなんて分からない。  
込み上げてきたから、そのまま従ったまで。  
自分でも驚くほど鋭く、研ぎ澄まされた大鎌が空気を引き裂いた。

降りしきる雨の中、少年が闇夜に放り出される。

が、少年は芸術的な身体捌きで体勢を立て直すと立ち並ぶ倉庫の屋根に着地し、何事かを必死に叫んだ。しかし楓は元より少年の戯言に耳を貸す機など毛頭ない。その必要すら感じられなかった。

楓は外に流れきった大鎌を巧みな手捌きで瞬時に身体正面へと引き戻し、ギリギリまで腰を捻り、刹那。大鎌が高層ビルをそのまま持ってきたかのようなサイズへと膨張する。楓の心に躊躇いはなかった。

「はああああああ　　ッ！」

振り抜く。

少年が着地した倉庫、そしてその倉庫の周囲に立ち並ぶ倉庫群、その向こうのコンビナートの一部、コンテナ船に埠頭に備え付けてあったクレーン諸共横に輪切りにされ、膨大な音の波と衝撃波が港一体を襲う。同時に楓は巨大化していた大鎌を身の丈二つ分ほどに戻し、爆心地へと突っ込む。

殺す。

ただそれだけを胸に抱き、楓は巻き上がる粉塵の中を駆け抜ける。

「楓ちゃんッ！」

右方約三〇メートル。

声と気配から逆算し、楓はこう素直に思った。

もらった。

畏かも知れない、なんて考えなかった。

畏でも別に良かった。

刺し違えてもあの少年を殺せれば満足だった。

大鎌を最も振り回しやす身の丈ほどに戻すと、膨大な粉塵の中で感覚を研ぎ澄ませ、飛ぶ。

目標は少年の上空。先程少年が着地した倉庫『跡』付近の空中から、漆黒の長髪を靡かせ、落下の勢いに腕力を載せ、強襲する。

「楓ちゃんッ！」

構わず、迷わず振り下ろせば少年は横に跳んで回避。仕留め損ねた楓の大鎌は灰色のコンクリート舗装を叩き割り、だがそれだけで飽きたらず、その衝撃で、初撃により廃墟と化していた建物群が大黒柱を抜いたように呆気なく崩壊していった。硬質な断末魔が空気を振るわす。

それと同時に、背後から急接近する気配を感じた。

刹那、楓は地面に突き刺さっていた大鎌を強引に振り上げ、振り戻し、左肩口に少年の斬撃を浴びながら、それでも前に踏み出し、少年の間合いに侵入。大鎌を振り上げた。激しい動きで肩口から血が噴き出すが、そんな小さな事はどうでもいい。確かに痛いけどどうでもいい。あの少年を殺せるためだったら腕一本、安い買い物だ。少年は困惑しきっていた。それが何だって言うのか。躊躇無く大鎌を振り下ろせば、金属音が響く。大鎌の軌道は刀によって阻まれてしまった。

「なん、………で？」

聞きたくないのに、聞く必要もないのに悲愁を帯びた表情に少年の声色が耳に入ってくる。が、大部分は楓の脳内では処理されることはなかった。

「どうして………？」

この期に及んでまだ事態を把握していないとは。

雨が楓の髪を、肩を、腕を、大鎌を、じっくりと濡らしていく。

「どうし」

中途半端なところで少年の声は途切れた。

そして少女は紫衣を纏ふ

原因は単純だ。大鎌を一気に巨大化させた。少年はその重みに耐えきれなくなった。

ドスンと、地面が頼りなく揺れた。

雨に身を濡らしながら、楓は口元を大きく歪めた。

楓は大鎌を元の大きさへと戻す。

少し呆気ない。

違和感があった。

あの少年からは殺す意志が感じられなかった。終始受け身に徹していた。楓のことを侮っていたのかどうかは今となっては定かではないが、いまいち納得できなかった。

が、まあいい。

今となってはそんなことはどうでも良かった。

だって、背後から伝わってくる気配はあの少年その物なのだから。

しぶといな、とそう思いながら楓は振り返り、対峙した。

「どうして、……楓ちゃん」

無視して、大鎌を正面に構え直す。

「どうして、オレを殺そうとしているの？」

楓は一気に踏み込む。

「どうして、オレが何をしたって言うの？」

全力で大鎌を振り上げた。

「オレは……」

甲高い金属音。

「ねえ、答えてよ」

刃と大鎌の柄が交錯する。

「ねえ、どうして？」

今にも掻き消されてしまいそうな、みすばらしい声。

刀はジリジリと押されていく。

「答えてよ、楓ちゃん……」

鬱陶しい。

無機質に、アクティブに大鎌を振り抜けば少年は後方へと吹き飛んだ。

「アンタは、殺されるの」

吹き飛んだ少年を追撃に移りながら、ポツリと呟いた。

「ころす。わたしのすべてをかけて」

少年の懐に踏み込み、全力で大鎌を振り抜く。

少年は楓の一撃を避け損なった。大鎌の湾曲した刃先が少年の頬をほんの少しだけ掠り取り、少年の右頬に朱が弾ける。

「か、」

あまりに予想外の展開だったのか。驚愕する少年を余所に、

「私はアンタを殺すために『レスン』を受けたの」

刃先に付着した少年の血糊を楓は嘗め摂り、

「家族や神田の仇を討つ」

太刀打ちできる相手じゃないとか、そんな戯れ言はどうでも良くなっていた。吹っ切れていた。殺せなければ殺されればいい。いい。それでもいい。もういい。

楓は正面から少年を射抜くように見据えて、駆け、斬り込む。正面突破を試みる楓に対して、案の定少年は飛び込んでくる楓を迎撃

そして少女は紫衣を纏ふ

するため、刀を走らせる。が。少年の『気の抜けた』斬撃程度に今の楓を捉えることは造作もない。上体をずらすようにして斬撃を簡単に躲す。そのまま微妙な手首の返しを駆使し、振り上げた大鎌を刃が水平になるように九〇度傾け、大鎌を少年の首元へ滑らせる。

「楓ちゃん……」

雨に身を濡らしながら、少年は凶刃を受け止めた。

「オレを、攻撃して何の意味があるの……？」

「意味？」

楓は哀れみ、そして見下す。

「私を壊したのはアンタ。壊されたら壊すの。ハンムラビ法典って知ってる？」

応じて発せられた少年の言葉は刃音にて掻き消される。力尽くに楓が押し込んだのだ。瞬間、踊るような華麗なバックステップで距離を取るうとしていいる少年。楓は即断。追い討ちをかけるべく大鎌の体勢を整えて飛ぶ。

直後、少年は速度を緩めた。楓は好機とばかりに突っ込み、大鎌を振るう。軌道は勿論少年の首元。一撃で人の命を狩り殺す刃が少年を捉え、その刹那。少年は刀で大鎌を受け止め、否。受け止めたように見せ掛け、たった半秒、もしかしたらそれ以下だったかも知れない。少年は楓の一振りを掠らせるようにいなすと同時に楓の間合いに踏み込み、

「ち、あ！」

一筋。血が舞う。楓の二の腕が斬り裂かれた。

「くっ」

振り払うように楓は大鎌を薙ぎ払う。

少年はその一撃をしゃがみ込み、低姿勢で回避し、立て続けに少年は手にした刀を走らせる。

刀が虚空を切り裂く。

大鎌が刃を迎え撃つ。

刃音。

そして少女は紫衣を纏ふ

降りしきる雨の中、二つの影が重なった。

第三六譚 ラストダンス 1 (後書き)

悪意は悪意によって磨かれた。

そして少女は紫衣を纏ふ

## 第三七譚 ラストダンス 2

「アンタは、私を壊したの。アンタはね、たくさん、私を壊したの」  
脇腹を抉られたが、楓はそれでも抑揚のない声で告げた。

「お母さん、お父さん。お祖父ちゃん、お祖母ちゃん、伯父さんも伯母さんも……。みんな大好きだった。全部全部、私に必要なピースだった。私を構成するピースだった」

楓の眼前には左腕をまるまる一本失っている少年。

「何度自分を責めたか分からない。だって自分のせいで死ななくて良かった家族が殺されたんだもん。あの時から、ずっと絶望だった。和美の本心も知っちゃったし、ろくなことがなかった。けど、てゆーか、私もさつきまでは自覚してなかったんだけどね、まだ余裕はあった。たった『ピース』だけね。その唯一残った『ピース』が私を支えていた。その『ピース』が私の生きる原動力だった」  
けれど。

「アンタは最後の最後で私の『ピース』を壊した」  
だから。

「私は」  
壊れた。

「アンタが壊した」  
大鎌を振り上げ、

「アンタは私から全てを奪ったッ!!」  
怒鳴り、振り下ろす。

「私の大切なモノを何もかもッ!!」

強烈な一撃。甲高い金属音。少年は刀で大鎌を受け止める。

「何で、何でアンタは神田を殺したのッ!？」  
激昂。

そして少女は紫衣を纏ふ

「何で、何で、何でアンタが、神田は殺されるべき存在じゃなかったッ！！　そうでしょッ!?!」

金槌で釘を打つように、何度も何度も大鎌を振り下ろす。

「答えなさいよ、答えろッ!?!」

渾身の力を込めて振り下ろしたが。

少年は楓の一撃を受けなかった。

大鎌が地面にめり込み、地面が揺れる。

「　楓ちゃん」

軽いテンポで少年は下がり、

「オレは楓ちゃんを守ったんだよ」

信じられない返答だった。

「アン、タ……」

激昂が憎しみへと変わる。

そして不思議と憎しみは僅かに楓に冷静さを与えてくれた。

「この期に及んで、……!?!」

「だってさ、楓ちゃんを愛せるのはオレだけなんだもん。あんな普通の人間が楓ちゃんの素晴らしさに気付くわけがない」

少年は刀を構えない。

「きつとき、神田だっけ？　アイツは楓ちゃんの事なんて想ってなんかいないよ。楓ちゃんのことを想ってるのは世界中でオレだけ。

楓ちゃんのことを想って良いのは世界中でオレだけなんだ。楓ちゃ

んはオレのことだけを想ってくれればいいし、オレも楓ちゃんしか想わない。昔からそうだったじゃん？」

朗々と少年は紡ぐ。

「いつしょに行こうよ？ 怖いのは分かってる。だけどさ、三〇〇年前そうしようとしてくれた。オレが気付かなかったただけでさ」

楓は何も言えなかった。

何を言っているのか、分からない。

ただ、怒りが収まることはなかった。

仮に、少年の言葉が楓に向けられていたのなら話は別だったかも知れない。

しかし、少年は楓を見ていないのだ。

少年の目に映っているのは恐らく北沢楓だろう。

だが、少年の心は北沢楓にはない。楓を通り越し、もっと楓の先にいる誰かがある。北沢楓を媒体にした誰かに呼びかけているようにしか見えなかった。

怒りが、収まらない。

屈辱的だった。

大鎌を振り上げる。砂利が宙を舞う。

瞬間的に大型観光バスサイズほどに展開させた大鎌をがむしゃらに薙ぎ払った。少年が飛び退いたのが視線に映る。粉塵が周囲を覆う。瓦礫が更に砕け、潰れ、叩かれ、破壊され。その上停泊していた船舶の側面が切り裂かれ、火の手が上がる。楓は同時進行で大きく展開させた大鎌を身の丈ほどに元に戻す。身体を動かす度、斬られた二の腕、抉られた脇腹が痛む。痛い。

「楓ちゃん」

あちこちで火の手が上がっている。

「オレを、愛してないの？」

粉塵が降雨によって晴れ、正面に少年のシルエット。

「オレはこんなにも愛しているのに」

歯を食いしばり、少年に大鎌を振るう。

「なんで？」

少年はあるう事が右腕楓の一振りを止め、押し退けた。

「三〇〇年ぶりに会えたんだ」

素手で捌かれたことに楓は驚愕しつつも、距離を取って体制を整える。少年は楓のその行動を平然と、追撃する必要もないと語っているのかの如く見過ごした。

「あの時オレがやったことが許せないんだったら謝るよ。だけど、オレが刀を向けたときだって好きって言ってくれたじゃん、ねえそ  
うだったでしょ、あれは嘘だったの？ ねえ！！」

少年からは殺気も闘志もない。漂ってくるのはただ哀愁、疑問、不安のみ。

少年は隙だらけだった。先程は素手ではね除けられたが、今度はそんなへまはしない。今、楓が持てる力を全て大鎌に注ぎ込めば、少年の首を刎ねることが可能かも知れない。少なくとも、致命傷は与えることが出来るはずだ。

だが、楓は動けなかった。

それは別に楓が少年に同情しているわけでもなく、構えていない相手に斬り掛かることを封じ手としていているわけでもない。ただ、単純に身体が動かないのだ。少年の気に押され、萎縮してしまったかのように。

「楓ちゃん」

一瞬だった。

「愛してる」

次に少年を捉えたとき、彼は楓の肩口に立っていた。

「う、」

楓は大鎌を

「楓ちゃん」

動かない。

慌てて見遣れば少年に大鎌の柄が掴まれていて、動かない。

「オレはね、ずっと孤独だったんだ。オレが『追捕使』になって三

〇〇年。あの時は気付かなかったけどさ、オレはお師匠様のこと  
大好きだったんだよ」

少年の吐息が聞こえる。

「だけど、あの時オレはまだ未熟だった。お師匠様の愛に気付か  
なただのがキだった。だけど、今は違う。お師匠様をこの手で斬  
つてから二九七年と六ヶ月と二三日。オレはようやく見つけたんだ」

まるで自分に言い聞かせるかのような、独白めいた、告白だった。  
「なのに、どうして？ あんなにオレのことを懸命に愛してくれた  
のに、どうしてオレを殺そうとしているの？」

ふんわり、と。

抱きしめられた、そう理解したときはもう身体が動かなかった。

「オレはお師匠様の愛を知ったとき、すごく後悔した。結局さ、オ  
レを理解してくれたのはお師匠様だった一人だったんだよ。親の顔  
も知らないで盗賊の下っ端として生きていくしかなかったオレを救  
ってくれたのは紛れもなくお師匠様だったんだ」

屈託なく、少年は笑った。

「もう、同じ間違いはしない。お師匠様を手に掛けたりはしない。  
三〇〇年探した。三〇〇年待ったよ。オレと一緒にこの世をずっと  
ずっといっしょに生きていくんだ」

笑う。

笑っていた。

けれど。

けれど。

けれど。

少年は確かに笑っている。

が。

決定的だった。

少年は笑っているも、壊れていた。

脆くて儂くて、強がっているようにしか見えない悲しい嗤い方。  
力を振るって戦い抜くことに疲れ果てたような、痛々しい横顔。

「さあ、行こう。まだ『押領使』はグダグダ言ってるけどさ、オレが責任持って許可させる。どうせ『押領使』はアカシックレコードが機能すればそれでいいんだ。『追捕使』おれたちのことなんて、使い捨てのモルモット程度にしか思ってないだろうし」

何て愚かなのだろう。

何て哀れなのだろう。

楓は少年の腕の中で、必死に嫌悪感を押さえながら思う。

この少年はきつとその『お師匠様』を愛しているのだろう。楓にはその『お師匠様』が誰だかさっぱり分からないが、何となく理解できた。

だが、殺したのだ。

推測するに、少年はその『お師匠様』を殺した。

楓は思わず唇を噛んだ。

「だからね、行こうよ」

少年は優しく嗤っていた。

その嗤い、壊れた笑み。

楓も、気が付けば嗤っていた。

「分かった。だから、一度私を放して」

歡喜。

ピタリ、とまるで映画を一時停止したかのように少年の表情が一瞬だけ止まり、やがて瞬間的に歡喜が彩っていた。少年は何も言わず、ただただ、少年は喜び勇んで楓を解放する。楓はそんな少年に向かつて優しく微笑みながら、

大鎌を薙ぎ払った。

そして少女は紫衣を纏ふ

第三七譚 ラストダンス 2 (後書き)

詰まるところはモルモットでしかないのかも知れない。

そして少女は紫衣を纏ふ

### 第三八譚 ラストダンス 3

「ごめんね。私って、結局『人でなし(ことう)』なの」

少年の胸、真一文字。ザックリと一閃。

接近して斬り付けたから大量の返り血がびちゃびちゃと楓を濡す。気持ち悪い。だがそれを含めて楓は嗤っていた。

「か、……」

ふらふらと少年は後退して、一本残っている右手を傷口に当てる。刀の柄を血がジツトリと侵食していく様子がはっきりと見えた。溢れ出す鮮血が彼の足下のドロに溶け、奇妙なマーブル模様が浮かび上がっている。

「ホントは、今ので終わりにするつもりだったんだけど」  
感心していた。

楓は、先程の一撃で決めるつもりでいた。両断するつもりだった。

「さすがは、って感じ」

必殺の一撃を少年は避けた。咄嗟の行動だったのだろう。

(少し甘く見てたかな……)

嗤いながら、いい気味だと嘲笑しながらも楓は少年を観察する。

(まだ、うん。来れる)

顔面蒼白、出血も甚だしい。左腕もまるまる一本失っている。常人なら気を失ってもいいような気がするが、少年は斃れなかった。恐らく医学的にも有り得ないことなんだろうが、彼は残念なことに『常人』というカテゴリーにカテゴライズできない。楓だって同類ではあるのだがこの際そんなことはどうだっていい。何にせよ、斃れなかったと言うことは、この少年ならまだやれるだろう。傷口を残った右手で押さえているが、それでも刀を振れる。それだけでも十分楓にとっては脅威だ。

そして少女は紫衣を纏ふ

流石に、今の楓の戦闘技術では一撃では仕留められない。が、連続攻撃に耐えられるほど彼の体力は残されていないだろう。

(いい加減、雨も酷くなってきたな)

そろそろ、潮時だろう。

ゆっくりと少年の元に歩み寄り、そして大鎌を目一杯振り上げた。

「バイバイ。オヤスミナサイなんて言っただけでいい」

終わった。

振り下ろす。

身体の内から歓喜に振るえていた。

今までに感じたこともないような力が沸き上がってくる。

そして、完璧に目の前の満身創痍の『追捕使』を上回っていたという自覚があった。

思えば、少年は最初から間違っていたのだ。

楓を殺す気など無かった。終始、防戦に徹していた。それが仇となった。初めから全力で楓を潰しにかかっていたら少年は間違いなく楓を瞬殺していただろう。これは別に変な負け惜しみなどではない。紛れもない事実だ。そこには感情が入る余地は一切無い。

そう。少年は自ら勝利を楓に渡したようなモノだ。自分はそれを確実に生かしただけ。

勝った。勝った。これは勝った。いくら『追捕使』でも眼前で大鎌を振り下ろされたら生きていられるはずがない。縦に両断された死体が次の瞬間に拝むことが出来る。素直に楓はそう思っていたのだが、

ザシュツと。

灼熱したいくつもの痛みが楓を貫いた。

何が起こったか分からなかった。

「が……ッ?!」

続いてあちこちの皮膚繊維がブチブチと千切れるような鈍い感触。それは聴覚ではなく、身体の芯に訴えてくる直接的な激痛。左袖が弾け飛び、同時に鮮血が吹き出す。両足に深い刀傷。眩暈がする。身体を揺さぶる激痛に立っていられないが後ろ足で踏ん張る。

少年は動いていない。

口の端から血の糸を垂らしながら、刀を握っている右腕も未だ傷口に当てたまま。

「それが、オレの罪だって言うのなら」

激痛で視界が歪む。これは精神力でどうこうできる範疇を超えていた。

「オレはいいよ。もう一度、斬ってあげる。罪を上塗りするよ」

傷口から右手が離れ、少年は握る刀をバトンのように回す。刀に付着していた鮮血が点々と地面に血玉を付け、雨に混じって流されていき、ここでようやく楓は察した。

刀に付着している鮮血。あれは、少年の物ではない。

あれは自分のだ、と。

「それが望みなら、オレは容赦しないよ。それが望みならね」

ガクンツと視界が揺れた。

足、足だ。やられた。深い。痛い。両足を一閃された。斬撃の軌道を捉えるどころか見えなかった。痺れ、足の感覚がない。傷口を少しで動かせば痛みが楓の脳内に収縮され、次々と炸裂していく。これではまともにも大鎌を振るえない。それ以前に動けない。戦局を、ひっくり返された。

「死体でもいいよ。オレの想いは死体になっても大丈夫だから」

一歩一歩、少年が近付いてくる。

そして少女は紫衣を纏ふ

莫然と、終わってしまっ、そう思った。

出血は止まりそうにない。それどころか酷くなっているような気さえしてくる。

刀を手に、少年は靴音を聞かせるようにゆっくりと間合いを詰める。

一歩一歩がカウントダウンだ。楓の命が狩り取られるまでの。

そう感じていたとき、少年は最後の一步を踏み込んでいた。

「愛してるよ」

楓は答えない。

振り下ろされた。

楓は目を丸くしていた。

「まだ、足掻くんた。まだ、オレとの別れを惜しんでくれてるんだ」

鳴り響いた甲高い金属音。

気が付いたら、絶叫を噛み殺し、大鎌の柄を盾にして何とか斬撃を防いでいた。咄嗟の判断ではない。咄嗟の判断などと片付けてしまえるほど生半可なモノではなかった。きつと原始に刻まれた生存本能がボロボロの身体を動かしたのだ。楓は最後の力を振り絞るように、そのまま刀と盾にしている柄の作用点をずらして少年の勢いを外に逃がし、身体を捻って前方へと踏み出す。楓と少年が擦れ違い、斬撃が楓の肩口を抜ける。楓は激痛に気を飛ばしそうになりながらも片足を軸に九〇度回転し、即座に迎撃態勢を整えれば、岩をも破壊しかねない、突き出される切っ先。その軌道を湾曲した刃で何とか軌道を逸らし、僅かに崩れた少年の体勢、その隙を付き、後退、距離を取った。

「かー、はー……ッ!」

そして少女は紫衣を纏ふ

たった数秒間動いただけなのに、全身から悲鳴が上がる。

少し少年の斬撃を受けただけでもうこのザマだった。少年の斬撃がいくら超人だろうと、常識に当てはまる物ではないだろうと、いくら何でも早過ぎる。

視線の向こうには、ゆっくり歩いてくる少年。

アレを近づけては、いけない。

大鎌を必死になって構える。

「愛してるよ」

語尾が脳に溶けた刹那の間。

少年は楓の間合いにいた。

目の前の光景に動揺する間もない。先程までとは比べようがないスピードで斬撃、刺突のコンビネーションが繰り出される。何とか斬撃を受け止め、刺突を躲していくが、すぐ回避が間に合わなくなる。かまいたちのように身体に細かい傷が走り、血が飛ぶ。身体が悲鳴を上げる。

限界だった。

そう認識した直後だった。

ギユウジャツ！と。

大鎌を握っていた五指が裂けて吹き飛んだ。

「い、 にア……」

大鎌が泥水の中に落ちた。あまりの痛みで脳が麻痺、絶叫すら出れない。痛いことすらよく分からない。本当に痛いのかどうかも分からない。だが、それでも痛かった。訳が分からない。楓は斬られた五指に左手を被せ、崩れ落ちた。熱い、焼けるようだ。激痛が襲う。痛い、痛すぎる。痛いとすら理解しかねているのに、痛い。

「愛してる」

耳を、そんな言葉が打ったような気がした。

「ああああああああああああああああああああああああああああ

ッ！！！！！」

最期の叫喚が土砂降りの中を突き裂いた。

そして少女は紫衣を纏ふ

頭が真っ白になる。

頭が、 真っ白に、 なった。

その瞬間、全てが吹き飛ぶ。

指のない右手で拳を作った。

絶叫しながら少年の顔面に向かって突き出せば、右腕は斬り落とされ、そして

第三八譚 ラストダンス 3 (後書き)

それは終わりでもあり、始まりでもあった。

そして少女は紫衣を纏ふ

### 第三九譚 ラストダンス 4

命が消える瞬間とは、実にあっけない。

地面からはカツカツと足音が身体に直に響き、上からは容赦のない雨に曝されている。

それが波紋のように身体中を蹂躪し、触発された痛みが何度も何度も往復していく。

無限に続く痛みの中で、楓はボンヤリと思った。痛みを感じられるなら先程よりは幾分かマシかも知れない、と。他人事のように思っていた。

どっちにしろ、もう事は終わってしまった。

結果は楓の負け。少年の勝ち。

それ以上でもそれ以下でもない。まもなく楓は少年の手によって息の根を止められるだろう。もうここまで来てしまえば死の恐怖もクソもなかった。

結局の所、自分は何がしたかったのだろうか。取り残されたように楓は思う。

少年を殺したかった。

両親を守れなかった後悔。

関係のない神田を巻き込んでしまった後悔。

それが殺意を育て、膨張させた。

殺さないと、楓の前には進めない。

殺さなければ、生き残った意味もない。

だが。

目的も果たせず、死にかけている。

身体はどう頑張ったって動かない。動くとも思えなかった。まるで電池の切れたカラクリ人形のようにピクリともしない。右腕をま

るまる一本失い、脇腹を抉られ、数え切れないほどの刀傷に刺し傷。雨に打たれ、身体はどんどん冷えていき、出血は止まらない。精神と身体が分離したような感覚に陥っている。もっ、終わった。終わったのだ。全て。何もかも。後は死を待つのみ。

そう心中で諦めたその瞬間、

ふわり、と。

何かが楓の上に被せられた。

(え?)

何か布のような物だった。

『これは余の力。余の一部』

声が響く。

『貴様には奴を仕留めて貰わねばならぬのだ』

声が響く。直に、身体に。

『死にたくなかるう?』

声はどこから聞こえてくるか分からない。

『貴様は奴を殺すために力を磨いたのであるう?』

でもこの声は聞き覚えがあった。

『貴様は奴を殺めなければならぬ。そのための存在だ』

この声は『押領使』の声に間違いなかった。

『殴られたら殴れ。身内が殺されたらそれ相応の復讐を。法が裁けないのならこの手で裁け。それが貴様が唯一出来ること』

そして少女は紫衣を纏ふ

痛みが、スツと沈んでいく。

「貴様がここで死ぬのも自由だ。貴様は一族や思い人の命を喰い、ここまで命を繋いできたのだ。貴様が死ねば、貴様のために捧げられた命が報われぬぞ？ 貴様が生き長らえるために喰い潰した命に申し訳ないとは思わぬか？」

家族。

友人。

見ず知らずの他人。

そして、アイツ。

数え切れないほどの命が楓の前で消えていった。

そう。

全ては「異常因子<sup>きたさわかえで</sup>」と出会ってしまったばかりに。関わってしまっただけに。

「「追捕使」が歩んできた道のりは血生臭い。選ばれた「異常因子」が生き長らえるためには「追捕使」となる道より他はない。そして例え「追捕使」となる資格を得ようと、先代の「追捕使」をその手で殺めぬ限りは明日はないのだ」

僅かに生き残っていた良心が疼いた。

「貴様は勝たねばならぬ。貴様は奴を殺めなければならぬ」

楓が関わって殺された沢山の人々。

楓が直接殺してしまった人。

そして頭の中に「押領使」の音が響いた。

「殺せ」

唯一残った左手を地を這うように伸ばした。

動かないはずの腕が、動く。力が戻る。

身体を捻り、そのまま泥の中を横に転がって、尻餅を付いたまま手を伸ばせば視界の大半を占める少年の姿。彼は楓の復帰に戸惑い気味にも刀を構え、楓を斬ろうと刀を振り上げる。刀身が鳴ったが。

その鐳鳴りは掻き消された。

派手な風切り音。

背後から飛んできたのは、一振りの大鎌。

大車輪の如く回転し、右肩を抉り、楓の手に収まった。

少年は滝のように血を振り撒き、爆音のような雄叫びのような絶叫が轟く。

それでも楓は怯まない。

素早く立ち上がると低姿勢で少年の間合いに侵入。手にした大鎌が風を切る。利き腕ではないから上手く操れない。それでも楓は大鎌を目一杯振り抜いた。

刹那、甲高い金属音。

大鎌を少年は刀身で止めたのだ。

楓は一旦後方へと飛び、大鎌を握り直すと、低姿勢で弾丸のように再度突っ込む。

狙いは、首。一撃で仕留めるために。

だが、そんな楓の思惑を読んでいたのか、少年はしゃがみ込んで渾身の一振りを避け、体勢が流れながらも斬撃が飛んできた。

身体を捻って斬撃を躲したが、一房、楓の髪が犠牲になり宙を舞う。

刀身が鳴った。

少年は刀を返し、立ち上がる勢いをそのままに下段から上段へ強引に振り上げた。銀色の刀身が迫る中、楓はタクトのように軽々と大鎌を振り回し、あつという間に上段へと持っていくと、そのまま勢いを一切止めることなく振りかぶり、振り下ろす。

下段から上段へ。

上段から下段へ。

二振りの刃が、真っ向から交差する

ように思われた。

刹那、少年の表情が揺れる。

刹那、楓の表情が若干緩む。

上段から下段へと描かれる軌道を、楓は一瞬にして意図的に崩した。

斬撃を楓は見切る。少年の下段からの斬撃を半身ずらして避け、崩した軌道をそのまま下半身と上半身を横に分かつように修正し、尚かつ大鎌を高層マンションほどに巨大化させる。

一度斬撃を放ってしまった少年に、片腕を失っている今の少年に對抗する手段はない。

ゴウツ！ と。

まるで屋根を吹き飛ばす怒濤で、爆発的な突風のような轟音。軌道は無茶苦茶だった。だがそれでも十分だった。圧倒的な物理的な力と速度で、衝撃波まで産み出し、港全体を掻き斬った。

膨大なエネルギーが炸裂し、衝撃波で停泊していた貨物船がひっくり返る。

そんな一撃をダイレクトに身に受けた人間の生死は問うまでもなかった。

そして少女は紫衣を纏ふ

第三九譚 ラストダンス 4 (後書き)

世界が荒んで見えた。

そして少女は紫衣を纏ふ

#### 第四〇譚　そして少女は紫衣を纏ふ

ざーざーと降りしきる雨粒の中、ぼんやりと目を開けた。

気怠い。長時間雨に打たれていたせいだろうか、それとも泥水の中で倒れ伏しているからだろうか。身体はビツクリするほど冷え切っていて動かない。断続的な吐き気が止まらない。だが、痛みは感じられなかった。多分、各所から断続的に送られてくる痛みの信号が脳を飽和状態に陥らせているのだ。痛いのだが痛くない。それはまるで心と身体が分離してしまったような、とても奇妙でとても気持ち悪い感覚。

視界はぐにやぐにやとしていてとてもじゃないがはっきりしないが、まるで爆心地で倒れているようだった。辺りは荒廃しきっていて、どう頑張っても『絨毯爆撃が実行された場所』としか認識できない。降りしきる雨にも負けず、あちこちで炎が上がっていて瓦礫の山だらけ。少し前までは港だったのにコンビナートも見当たらない。繫留されていた貨物船も炎を巻き上げている。時より小規模ながら爆発が各所で起こっていて、遠くからサイレンのような音が近付いているような気がしないでもない。

犠牲者がいなければいいなあ、我ながら暴れたなあと楓は思っていた。

全てどれもこれも楓が暴れたからだ。とんだ化け物だ。まるで何処かの怪獣が通り過ぎたような惨状なのだ。楓一人に自衛隊が出勤してくるかも知れない。顔は自然と微笑みを浮かべていた。

しかしそんな化け物でも死ぬのだ。現に今、楓は死にかけている。少年を大鎌と巻き上げられた衝撃波で叩き潰した後、何もかも感覚が綺麗に失せた。討ち果たしたという安心感か、それとも身体の限界だったのか。それは楓にも分からない。気を失うまでのほんの

そして少女は紫衣を纏ふ

数秒、楓は『押領使』のことを考えていた。何故あの場面で『押領使』は自分に手助けをしたのだろう、と言うこと。あのアシストがなければ確実に死んでいた。殺されていた。

そして意識が戻った今、改めて思った。何故『押領使』は自分を助けたのだろうか、と。

と、そこへ。ぴたぴたと小さな音が雨音に混じって聞こえた。足音だ。だがそれは人間の足音ではない。人間の足音ならもっと大きいはずだった。そう。それは小動物のような

「よくやった」

雨音にも、波の音にも阻害されず、不自然なほどクリアな声だった。が、その声に威圧感。絶対に忘れられるものではなかった。

相変わらず、その姿は見えない。足音は止まっているから自分の近くにいることは確かだろう。視界に入らないから恐らく背後にでも佇んでいるのだろうか。

「貴様は先代をその手で討ち果たした。余は貴様を『追捕使』と認めよう」

雨を伴った風が引き抜け、はたはたと服が靡くような音がした。そして思い出す。この衣が楓を救ってくれたことを。

「幾分か早かったがな。その衣は余の『紫衣』であり『追捕使』たる証にして万能の妙具。纏え。貴様の身体も直と良くなる。時間をかければ右腕だって甦る。まあ、自業自得よ。貴様は肉体を酷使しすぎた。身体が動かめだろうか？ 貴様が『紫衣』ちからを乱用した結果。

余の助けがなければどうなっていたか」

「どうして、……」

か細い声しか出なかった。

「たすけて、くれたの？」

「あの場面で貴様には死なれては困るのだ。貴様には奴を討ち滅ぼして貰わねばならなかったのだ。余のために、ひいてはこの世のために」

楓には『押領使』の言葉が理解できなかった。従って、沸き上がっている疑問が解決されることはない。

「このよ、の、ため？」

「潮時だったのだ」

そうやって『押領使』は話を繋げた。

「奴は父母に捨てられた孤児だった。貴様ら『異常因子』は一般大衆に忌み嫌われる傾向があるのだ。それは本能的に貴様らがこの世に存在すべき者ではないと察しての行動なのだがな。仕方あるまい。人は他を排斥しなければ自らの存在意義を感じられぬのかも知れない。まあ、そんなことはどうでもよいのだ」

心当たりがあった。

確かに、そうかも知れない。

「『追捕使』は殺戮者だ。例えばこの世を守るといふ任があるのと無かるのと、人殺しには変わりない。『追捕使』の任を賜うためには『追捕使』を殺めねばならぬ。『追捕使』の任を全うするには『異常因子』を殺めねばならぬ。たつた一つの椅子を巡りその存在を奪い合う。存在無き者の存在を更に奪う。それが『追捕使』だ」

そうやって『押領使』が言葉を切れば、静寂が辺りを包んだ。

「だがやがて『追捕使』の心は碎ける。殺戮を繰り返し、永遠とも言える時を過ぎ続ける。元が『異常因子』である故に、利害関係以外の関係はまず望めない。長きに渡って邪気と陋劣のみしか触れられず、やがて『追捕使』の心はひび割れ、やがて碎けてしまう。そして碎けた心を修復するために人の情を盲目的に求める。過去に

向けられた愛情を」

楓は自然とあの『追捕使』<sup>しゅつぽん</sup>を思い浮かべていた。彼は思い込んでいた。

彼の中では『北沢楓』お師匠様（と言う見ず知らずの人）『という有り得ない式が平然と少年の脳内では成り立っていた。面影が似ているからか知らないが、全くの別人にも拘わらず。それはとても狂っている。愚かにもほどがある。

楓はそう思うことに何ら感情は抱かない。

目の前の事実、真実として有りの儘を受け入れた。別にこの少年に感情移入出来るほど楓は甘くはないし、面倒見の良い人間ではない。

「そうなってしまうえばもはやその者に『追捕使』たる資格はない。愛に執着するばかりに必要以上に人を殺し、この世を、そしてアカシックレコードを乱す存在となった者を生かしてはおけまい。如何なる手段を用いても、排除せねばならぬ」

楓は変に納得していた。

何だ、そんなことか。

何だ、だからこんなことになったのか。

「だが、貴様は例外だ」

「……、え？」

「貴様は例外だ。まさに余が追い求めていた者」

ざーざーと降りしきる雨。

雨が止む気配はなかった。

消防車のサイレンがはつきりと聞こえる。

楓は黒衣（と言っても黒いボロ布だった）を羽織って、足を引き

摺りながら荒涼とした港を歩いていた。

何とか失血も止まり、歩けるようにまで回復した。だが足を引きずり、よろよろと覚束ない足取りで前に進んでいる状態を『歩いてる』と定義付けられるかどうかは謎である。楓の身体はそんな付け焼き刃で回復しきれる程度の負傷ではなかった。

(とりあえず、ここから逃げないと……)

サイレンがより鮮明になってきて、焦りが生まれてくる。

(つたく、……『押領使』だっけ?)

矛先はさつさと姿を消してしまった『押領使』へと向けられる。

(やること済ましちゃったら、さつさと、消えちゃうんだから)

どうせすぐに再会することになるだろうから、その時は思いつき罵ってやるう。場合によっては大鎌で斬り付けてやる。それに『押領使』が楓が例外だと言った真意も気になる。

そこへ、

「？」

何かを蹴飛ばした。

不審に思って視線を落とせば、思わず笑みが零れてしまっ

た。

「ふふ、」

まず見えたのは、人間の右腕。

次に見えたのは、人間の上半身。

続いて見えたのは、人間の頭部。

最後に見えたのは、その傍らに転がっている刀身が折れた一振りの日本刀と、薄汚れた銀のリング。

「お、……ういあ」

胸から下、左腕、そして両足。

それを失っているにも拘わらず、口から声が漏れ出ている。

「ホント、凄い、生命力ね……」

あの一撃を防いだとも言つのか。そうだったらこれは称賛に値する。

「あ、え、……ちゃ」

何かを求めていた。

僅かに、表情が和らぐ。

ニユアンスは『助けてくれるよね?』で間違ないだろう。

この少年は、まだこの期に及んで『信じて』いるのだろうか。

ならばその考えをここで正してやらなければならない。

楓は微笑んでいた。

そして。

会ったこともない『お師匠様』を気取って、告げた。

「私はアンタなんか愛してない。むしろ、キライよ。大っ嫌い。考えただけでも虫唾が走る」

その和らいだ表情が、消えた。

「そう言えば、前にアンタを抱き締めたことがあったっけ」

ひん曲がった刀と共に転がっていたリングを拾い、指に嵌めながら、楓は意図的に告げる。

最期の最期まで、この少年をいたぶり尽くすために。

「アレはね、」

満面の笑みで、妖艶な声色で。

「アンタが『カワイソウ』だと思ったからよ」

面白い。

本当に面白い。

「人を殺して、駄々を捏ねただただのカワイソウなお子様。誰にも今まで一度も愛されたことがないんだな。って。凄く同情しちゃったよ」

詠うように、生き生きと、楓は告げる。

「そっだ」

わざとらしく、恰も今思い出したかのよう。

「アンタ学校の屋上で言ってたでしょ? 『同情ってのは一番醜い』って。アレはただカワイソウなアンタに同情しただけ。なんてあの子は可哀想なんだろうってね。上から目線で優越感を持って、ね。」

そして少女は紫衣を纏ふ

「アンタはさ、愛する人にそんな感情抱けるって思ってる？ もう分かっていると思うけど、もう一度教えて上げる。私はアンタのことが嫌い。だからさ、さっさと死んで」

はつきりと、目の前の表情が壊れた。

そんな様子に楓はうつすらとした冷酷な笑みを浮かべて、左手を上から下へ滑らせれば現れる大鎌。それを挑発するようにクルクルと新体操の演技のように回転させて、やがて頭の上で大鎌を止めると、

「ごめんね。私って、結局『人でなし（こころ）』なの」

第四〇譚　そして少女は紫衣を纏ふ（後書き）

ワタシハダレ？

そして少女は紫衣を纏ふ

そして少女は紫衣を纏ふ

終 Reality depends a lot on your vant

Reality depends a lot on your  
vantage point) 真相はあなたの視点で決まる)

誰も寄りつかない第三校舎。

その屋上で楓はフェンスに手を掛けながらぼうつと街並みの彼方を眺めていた。今日は雲一つ無い快晴だった。夕焼けが柵引いている。直に夜が帳を降ろし、あと数時間もすれば繁華街のネオンが彩り始めるころだろう。

何てことのない地方都市で、飽きるほど見た光景だったけれど、これが見納めだと思うと何だか感慨深いモノがあった。どうやら『押領使』は数日中にこの街から出たいらしい。

あの少年を殺してから、もう一ヶ月経った。

何だかんだ、傷を癒すのに一ヶ月かかった。身体中の傷はもうすっかり良くなった。後も残っていない。それは少年に切断された右腕も例外ではなかった。戦闘から直に『押領使』は、得体の知れない男（闇医者者と名乗っていた）を連れてきて、とても現代医療とは思えない方法で腕を復活させてしまった。どうやら化け物は自分だけではないのかも知れない。

楓は脇に置かれていたショルダーバックに手を伸ばし、ジッパーを開けた。中には愛用の絵筆にパレット、絵の具やバケツなど美術セットに五〇〇ミリリットルペットボトルが一本入っている。それらを丁寧に一つ一つ外に出し、最後に落下防止用のフェンスに立てかけてあった包装を解く。未完成の絵が一枚、夕焼けに反射してキラキラ輝いていた。それらを一通り重ね合わせて、楓は一つだけ重ね合わせずに脇に避けてあったペットボトルのキャップを開け、迷うことなくそこに最後の一滴まで撒いた。刺激臭が鼻を突く。と、

「何をしている？」

背後で急に気配が膨れ上がり、『押領使』の声がした。噂をすれ

ばなんとやら。楓はカラカラと落下防止のフェンスを揺らし、夕焼けを臨みながらさも当然のように笑って言った。  
「死のうとしてるの」

冗談ではなかった。本気だった。

「死ぬ？」

僅かに懐疑的な声色を含んだ『押領使』の声が返ってきた。

「そ。ここから飛び降りるの」

楓は急に現れた『押領使』に構うことなくポケットから取り出したライターに火を灯し、そのまま火を付けた。真っ先に絵が燃えていく。

「死ぬのか」

「悪い？」

バチバチと火の粉が飛ぶ。

「おかしいと思わない？ 家族もみんな死んで、神田も死んで、舞台の中心に立ってた私は死なないなんてさ。それに向こうに行けば神田にも家族にも会えるかも知れないしね」

自嘲ではなかった。平然と事実を語ったまでだった。

「ずっと考えてた。私は何者なんだろうって」

しみじみと、語る。

「クラスじゃ誰も私の事なんて構わなかった。私も積極的に輪の中に入ろうとしなかったし、騒ぐことだって好きじゃなかった。自分が自分であれば、私は良かった。どうせ私は舞台の真ん中で堂々とされる人種じゃないことは分かってたし、舞台に参加できたって『町人その六』くらいが関の山だから」

振り返る。

そこには一匹の白猫が佇んでいた。

「別にそれでも良かった。私は上手かみてから下手しめてまで歩くだけしか能がない『町人その六』。それで十分だった。舞台の真ん中でイケメンと踊れるオヒメサマはほんの一握りだけだし、私のスペックじゃ『町人その六』で精一杯だもん」

視線を足下に落とした。長年親しんだ絵筆やパレットが徐々に燃えていく。

「でも、私は『町人その六』でもなかった。私に居場所はなかった。その劇に出ちやいけなかった」

掌に爪が食い込む。

「なら、私は誰？」

紅蓮の火の粉が跳ねた。

「私は何のために生まれてきたの？ 人を殺すタメ？ あの『追捕使』を殺すタメ？ 私は今何のタメに生きてるの？」

「貴様は『追捕使』だ。アカシックレコードの害でしかない『異常因子』を殺すために生きている」

「それが、理由？」

「貴様は理由がないと生きられないのか？」

「そう。生きられない」

楓は断言する。

「人を殺すことが存在意義なんておかしい。間違ってる」

「間違ってるなどいない。この世を守るためには邪魔者を消さねばならぬ」

「じゃあ、神田は？ 家族は？ 邪魔者だったって言うの？」

「知らぬ。余は『押領使』だ。『追捕使』がやったことには感知せぬ」

「私は死を振りまくために力を磨いたわけじゃない。全てはみんなの仇を討つため。そのために生きてきた。だから、もう潮時。死を振りまくだけの存在にはなりたくない。そんなふざけたことを生きる理由に何てしたくない」

「全くとんだ偽善者だな」

白猫は鼻で笑い飛ばした。

「貴様が黒城和美や『追捕使』を殺めた時の顔を余はすっかり覚えてるぞ？ 『あのよ様な顔』が出来るクセに何故だ？ 美しいまでの利己主義を振るっていた貴様が『死を振りまくだけの存在にはなりたくない』などと滑稽過ぎると思わぬか？」

「そうかもね」

楓は憫笑する。

「人つてさ、案外脆いの。変なことで狂って、呆気ないほど容易に壊れる。潰れる。腐る。脆く、淡く。それに一瞬でも希望を見せられるとその味が忘れられなくなる」

「一つだけ希望があった。」

だが、その希望も今やこの世にはいない。

「他の人がどうだか知らないけれど、私にはその希望が全てだった。絶望の真ん中での希望が全てだったの」

パレットが燃える。

楓はフェンスを握り締め、足をかけると、

「なら希望を与えてやるよ」

その瞬間、遂に自分の耳がイカれたのかと思った。

「何だよ、白状だな。俺を無視する気かよ、なあコラ姫！」

幻聴だ。

有り得ない。

そして少女は紫衣を纏ふ

楓の頭にはもはや飛び降りて死ぬ事なんて吹き飛んでいた。  
「姫が死ぬまで面倒見てやるよ。死神だろうが何だろうがな」  
楓はフェンスに足をかけたまま、振り返る。  
「やっと見つけた。ずっと探してたんだよ、姫みたいな奴をさ」  
そこには

時は遡る。三〇〇年前に。

「にしても凄いな」

腰に漆黒の刀を差した少年が澁刺はじらひと告げた。

「何の話だ？」

「あつと言う間に鷹から白猫になっちゃんだもん」

「余を誰だと心得る？ 余は体現者だ。よって特定の『形』を持たぬ余が鷹を象っていたのは先代がそう願っただけのこと」

「それさつき聞いたよ」

「本来ならば、聞く必要などないのだがな」

「は？」

「余は究極の逸材を探しておるのだ」

「何それ？」

「歴代の『追捕使』は次第に時を重ねるにつれ、余の制御を離れ、世を乱す存在へと堕ちていく。余は『追捕使』を管理、監督する者。そのためには『異常因子』を愛する異端児の存在こそ不可欠なのだ」

「……どうということ？」

「人は何のために生きる？ 時が有り過ぎるとやがて人は目的を見失い、そして殺戮の限りを尽くす『追捕使』は心を壊す。やがて壊れ、余の制御を離れてしまう。全く、脆弱よ。検体にもならぬ。どうすれば『追捕使』は壊れぬのか？ どうすれば『追捕使』を完全

に御することが出来るのか。方法があろうと素材がなければ駄目なのだ」

「で？」

「余は『追捕使』を愛する異端児を求めているのだよ」

とある街のとある公園。

時刻は深夜。街路灯がぼんやりと遊具を照らしている。

そんな、公園の真ん中で一人の若い男が血塗れで転がっていた。

男はぴくりとも動かない。男は既に息絶えていた。

「終わった」

男を見下ろし、漆黒の衣を纏った少女は誰に告げる眩く。

「ご苦労様」

すると、どこからともなく少年が姿を現した。

少年はそのまま少女の元へ歩み寄り、そしてふんわりと後ろから抱き締める。

「今回もハズレだった」

「あつそ」

「興味ないの？」

「もし『紫衣』纏える奴がいたら姫と別れなきゃならねえだろ」

「……それは、ちよつと」

「だろ？」

「ね、」

「あ？」

「これからもずっと一緒？」

「だな」

「ホント？」

そして少女は紫衣を纏ふ

「姫が死ぬまでな。俺たちは永遠だ」

街灯が二人を照らす。

少女は笑っていた。

楽しそうに、幸せそうに。

了

## 後書き

投稿時間的にはこんばんは。

では、読んで下さった読者様のために、

おはようございます。

こんにちは。

こんばんは。

お休みなさい。

と、一通り全時間帯を考慮してみました。

鍔金ダラです。

一応「小説は後書きまでが小説」って無駄な信念(?) 持っていたりするんで別枠に後書きを設けさせていただきます。ちなみなのですが、これは本編とは一切合切パーフェクトに関係御座いませんのであしからず。

それにしても、アレですね。いくら事前に完結していたとは言え、一日一章投稿とかマジで辛いです。本当にね、やばかった。何せ話の内容が結構重苦しいし、やったことのないことに無謀にも挑戦しちゃったもんだから、自分で書いたくせに編集に何度か挫折しかけたときがありました。次回はもつと明るい話を書こうと軽く心に誓った次第です。

さて、と。

今作に登場したワードの解説に入ろうかと思えます。

今作に登場したワードで大まかな物と言えば「アカシックレコード」「追捕使」「押領使」「紫衣」くらいですかね。

アカシックレコードは、宇宙や人類の過去から未来までの歴史全てがデータバンク的に記されているという一種の記録をさす概念です。神智学とかその辺を研究して極めた人はアカシックレコードに

アクセスして思うがままに未来を知ることが出来るとか出来ないとか。予言者と呼ばれた人物はみんなアカシックレコードから未来の情報を引き出していたとかいないとか。虚空蔵菩薩はアカシックレコードを擬人化したものではないかという説があったりなかったり。まあ凄い物ということはあるかなよう。

追捕使つひぶしと押領使おしりょうしは実在した役職名です。歴史です。日本史です。高校の日本史にちよこつと出てきます。でもこれ知ってる人は結構歴史得意な人なんじゃないでしょうか？ 聞いたことあったり意味を知っていた方も中にはいたんじゃないかなあと思っておりますが一応説明を。

追捕使と押領使は共に警察・軍事的な官職で、令外官の一つになります。令外官とは律令にない新設された位で、八世紀ごろ桓武天皇の時代に多数設置されています。代表的な令外官を上げてみれば、摂政・関白・右大臣・中納言・参議・蔵人及び蔵人頭・檢非違使・勘解由使・征夷大將軍という感じでしょうか。日本史とか古文で出てくる有名どころはこれでしょうね。征夷大將軍とか摂政とか関白は誰でもあるでしょうし、右大臣とか中納言は古文の定番でしょうし。その中で追捕使・押領使の治安維持を担当していました。

追捕使は臨時的な官職だったものの、段々と各国に置かれるようになりました。その役目は海賊や盗賊を鎮圧することで、そう言うわけで『追つて捕らえる使』で追捕使つてことらしく、実際に戦闘に参加することが多かったそう、押領使は兵を率い、後方で指示を与える指揮官つてポジションだったとか。ちなみに藤原純友の乱・平将門の乱の鎮圧に当たったのは追捕使と押領使です。なお、この追捕使が発展して守護に発展していったとか。

紫衣しえとは、紫の法衣や袈裟けさのことです。決して黒ではありません。紫衣は朝廷が宗派に関係なく偉いお坊さんに下賜したそれはそれは尊い物なんです。今作では大変なことになっていますが。まあ、これも聞いたことある方いたでしょうね。なにせこれも日本史です。江戸時代初期に紫衣事件つて朝廷と幕府のゴタゴタがあります。

して、まあそこ「お、これ何か語呂良いじゃん」というわけで拝借したんですけどね。まあ詳しく知りたい方はウィキで調べてください。紫衣事件って検索すれば一発で出てきます。

さて、一通り語り終えたところで、私信じみたことを。

もう毎日のようにお世話になっている『キミ』へ。極地少しだけ手を付けてくれたようで、普通に嬉しかったです。ありがとうございます。でね、俺の話がアナログ派のキミは特にめんどくさくて読む気失せるだろうけど、今回はいろいろキミに配慮して書きました。これ、結構熱烈なラブコールだからね？ そこんとこ、感想評価共々ヨロシクね？ あと『キミには膨大な迷惑』をこれから『フィールド』でもかけるかと思っています。パーティプレイで吹き飛ばしたり邪魔したり、飛竜及び古竜に俺が未熟なばかりに三死してクエ（以下略）。まあ何はともあれ、俺が言えた口じゃないかも知れないけど受験にも負けずに頑張ろうね。それに基本方針として『キミ』におんぶに抱っこしていく予定だから。とは言うものの、こちらも出来る範囲だったらいろいろ協力するからね。（ってか、悉く却下されるけど普通にアレ個人的には大真面目な意見なんですよ？）見捨てないでね。

さてこんな感じかな。

それにしても、作者自身相当性根腐っているみたいで。もはや病気ですね、こりゃ（遠い目）

ところで、今作はちよつとした実験作です。そして極地シリーズが個人的に行き詰まってしまうので息抜きにと書き始めたところ、んな感じになっちゃったという事実が根底にあるわけなのですが、このことは秘密にしておいてください。そんなわけでいくつか個人的にも風変わりなことしたと思ってます。一番分かりやすいポイントと言えば、視点が（数カ所例外がありました）ずっと楓視点だったってことでしょうか。女の子の一人称及び完全主人公は個人的にも初めてだったので、おっかなびっくりでした。特にデートの件は死ぬかと思った。恋愛物書いている先生たち、ホント尊敬します。

そして少女は紫衣を纏ふ

敬愛します。恋愛を文章で表現するのは酷く難しい。というわけで  
『To feel the sense of incompatibility.』と言い訳しておきます。

最後にここまで読んで下さった読者様、この場を借りてこの場を  
提供して下さった管理人様に御礼申し上げつつ、この辺でいい加  
減筆を置かせていただきます。

ではm( )m

ところで、これはハッピーエンドなんでしょうかね？ バッドエ  
ンドなんでしょうかね？

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9306d/>

---

そして少女は紫衣を纏ふ

2009年5月28日14時30分発行